
赤ずきんと狼さん

元村有

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤ずきんと狼さん

【Nコード】

N8495E

【作者名】

元村有

【あらすじ】

すきつ腹を抱えた赤ずきんは、食べられるためにおばあさんの元へ向かいます。

第1話 おばあさん、死す

私の村は、とても豊かです。

私の村の近くには魔物さんがたくさんいます。そういう場所だからです。でも、私の村は豊かです。魔物さんに守ってもらうからです。

私は、赤ずきんです。

今年の、赤ずきんです。

私の村は魔物さんに守ってもらうから豊かです。でもその代りに、毎年一人、魔物さんたちにあげる約束になっています。魔物さんはその一人を食べて、一年村を守ってくれます。今年は、私の番です。私が、魔物さんに食べられる赤ずきんです。

赤ずきさんは、昔、最初に魔物さんに食べられた人が真つ白なずきんをしていたのだけど、魔物さんがその人を食べた後に血で真つ赤に染まってしまったそれを形見として返したから、赤ずきんだそうです。最近では目印にもなっているので、最初から赤ずきんです。

私の村は、豊かです。でも、私のお腹は今、豊かではありません。どうせ食べられてしまうのだからと、ご飯をケチられたからです。ひどいです。

お腹がすきました。

私は、これから魔物さんのところへ行きます。でも、ちょっと寄り道です。お花畑は確か、こっちの方でした。

発見です。お花畑。きれいです。おいしそうです。もちろんお花をむしゃむしゃ食べるわけではありません。蜜をちゅうちゅう吸うのです。

ちゅうちゅうちゅうちゅう。

……足りません。

でも仕方ありません。私は歩きだしました。せつかなので何本かお花を持ちます。歩きながらちゅうちゅうちゅうちゅう。

……お腹がすきました。

腕いっぱい抱えたお花の蜜を全部飲みほす頃、ようやく魔物さんのところへつきました。魔物さんは、山のてっぺんのお家にいます。別にここに住んでるわけではないらしいです。人間ごときが魔界に来ることはできないから、わざわざ迎えに来てやってるらしいです。だったら村まで来てほしいです。足が疲れました。

こんこんこん、家のドアを叩きます。

「こんにちわ、赤ずきんです。おばあさん、赤ずきんが来ました」
ちなみに、魔物さんはおばあさんです。お年寄です。顎が弱いです。だから、赤ずきんはまだ幼い女の子でなきゃいけません。顎が弱いんですから。成人男子は無理だそうです。

「おばあさん、赤ずきんが来ましたよ」

こんこんこん、返事がありません。魔物のおばあさん、遅刻でしょう。か。お年寄りだから、足腰弱いです。ちよつと遅れてもしようがないですね。

「おじゃましまーす」

ドアを押したらあっさり中に入れます。この家にはカギがありません。本当は返事を聞いてからお邪魔しなきゃいけないのですが、仕方ありません。足が疲れているのです。

部屋の中にトコトコ入ります。イス発見。パン発見。ワイン発見。お腹がすきました。

でも、勝手に魔物さんのパンを食べたら怒られそうです。ワインを飲んだら怒られそうです。

考えます考えます考えます。

よく考えました。

私は、魔物さんに食べられます。パンが私に食べられます。ワインが私に食べられます。

結局、パンもワインも魔物さんのお腹の中です。無問題。

「いただきます」

つつましかに感謝をささげて、パンにかじりつこうとしたその

時！

ドアがバタンと開きました。チツ。

でも、現れたのはおばあさんではありませんでした。見たことないけど、妙にこじやれた格好をした成人男子です。なんだか都会のにおいがします。おしゃれさんです。

「……おや、君は」

声もなんだか気取っています。氣にくわないです。どうせ私は田舎育ちです。

「こんにちは」

でも、ちゃんとあいさつします。あいさつは人間関係の基本です。大事です。

「こんにちは……その手に持っているのはなんだい」

「パンです」

「君が持ってきたの？」

「ここにありました」

「……食べようとしているように見えるのだけど？」

「おばあさんの手間を減らしてあげようと思ったのです」

だって、おばあさんは顎が弱いのです。このパン、何日前に作られたかは知りませんが固いです。私が食べて柔らかくなったところに消化吸収。完璧です。

「……ああ、うん。なんとなくわかった。もしかして君が今回の赤ずきん……」

「正解です」

成人男性はその場に黙り込みました。私はパンにかじりつきました。もぐもぐもぐ。感動です。おいしいです。まともなメシ、最高。……おばあさんは死んだよ」

もぐ、ごくん。

いきなりの言葉に、パンがのどに詰まりかけました。嘘です。余裕で飲み込みました。しかし大変です。おばあさんが死んでしまったそうです。では、私は誰に食べられればいいのでしょうか。

「おばあさんの遺産は私が受け継ぐことになっていてね、赤ずきんの話も聞いていたからこうしてやってきたわけだけど」

つまり、わたしを食べる権利もこの人が持っているということですね。どうしましう、この人は顎が強そうです。でも、私は知りませんでした。おばあさんが食べるパンだと思ったのです。善意の行動です。それに、パンがこの成人男子のお腹に入ることは変わりありません。無問題。

「お悔やみ申し上げます」

もぐもぐもぐ。成人男子は止めません。おいしいです。

「お悔やみも何も、君……」

成人男子は私をじっと見て動きを止めました。まさか今更止める気でしょうか。あとちよつとで満腹なのです。冥途の土産に数か月ぶりの満腹感ふりーずです。

もぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐ。

すぴーどあつぷする私の顎。限界への挑戦です。

成人男子は私のところへ近づいてきます。パンを取り上げられてしまうかもしれません。慌てて抱え込みました。成人男子はパンを無視して、私を持ち上げました。

んぐっ。

さすがにびっくりします。マジでどのに詰まりかけました。

成人男子は、ムム、と眉をしかめます。そして、私を手を持ったまま、はぁーと溜息を吐きました。なんだか失礼なことを言われそうな予感がします。

「私はグルメなんだ」

やっぱり失礼です。

「いくら女性でしかも子供とはいえ、こんなに痩せっぽっちで意地汚いものを……」

超失礼です。

「食べたら腹を壊しそうな気がする……」

失礼にもほどがあります。温厚な私もマジギレ三秒前です。

「ああ、そのパンは全部食べていいから。」

「こない人見たことがあります。」

「食べたくないなあ。でも食べないとなあ。とりあえず、家においで。食べるにしても、もうちょっとなんとかなるだろう。きっと、たぶん」

もぐもぐもぐもぐ。

「パン以外にも美味しいもの食べさせてあげるから、ついといでもぐもぐごくん。」

「行きます」

今日の私はラッキーです。

第1話 おばあさん、死す（後書き）

初投稿なので至らない点も多いかと思いますが、よろしく願います。

第2話 赤ずきんのアイデンティティ

成人男子な魔物さんの家は、りっちでした。

どこもかしこもフカフカつるつるキラキラです。ビバ、魔界。

「……そんなにがつつかなくてもクッキーは逃げないよ」

出されたお茶とクッキーをむさぼる私に成人男子はため息の連続です。しかしそんなことは気になりません。なんでしょう。ここはもしや、噂に聞く天国と言うやつでしょうか。もしかして私はもう死んでいて、普段の行い故に天国へ旅立ってしまったているのでしょうか。

「ああもうどうしたらいいんだ。このマナーのなさ。意地汚さ。とにかくその頭巾をとりなさい。よく見たら土だらけじゃないか」

成人男子が私の赤ずきんに手をかけました。私は慌てて抑え込みます。これは今の私のアイデンティティなのです。赤ずきんを取った私をどうして赤ずきんと呼べるでしょう。

「……手を離しなさい」

「……………」

成人男子はともしつこいです。嫌がる女の子から無理やり衣服を取ろうなんて、道理に反しています。

じいっと頭巾の下からにらみます。サイテー男。虐待反対。ロリコンスケベ。

成人男子は私の頭巾から手を離しました。頭巾とともに半ば宙に浮きかけていた私の体がソファの上にポスリと落ちます。

「キャサリン」

成人男子が気取った仕草でパチンと指を鳴らすと、どこからかメイドさんが現れました。メイドさんです。どこから見てもメイドさんです。村でも村長の家にしかいなかった完全なるメイドさんです。

「この汚れきった赤ずきんをどうにかしてくれ」

「かしこまりました」

メイドキャサリンはにつこり微笑んで私の手をとりました。

「さあ、こちらへ」

もちろんそちらへ行くのもやぶさかではありません。もともと、私は成人男子に食べられる身です。些細な抵抗などする意味もありません。赤ずきんはともかくとして。

「ちよつと待つてください」

私はつかめるだけのクッキーをつかみ、ほおばり、噛み砕き、お茶で流し込み、クッキーをさらにつかみ服のポケットにいれ、そして空いた手でさらにつかみました。

「ひきまほう」

行きましよう、と言ったつもりが飲み込みきれなかったクッキーが邪魔をして、うまく発音できませんでした。けれど、メイドキャサリンは心得たようにはい、と先に立って歩き出します。さすがメイドさんです。

成人男子がソファから転げ落ち、床に膝についてうなだれているのが印象的でした。

お風呂に入っている間も、私は断固として赤ずきんをとることを拒否しました。するとメイドキャサリンは、私を赤ずきんごと洗ってくれました。それはとても助かったのですが、水を吸った赤ずきんはとても重くて邪魔でした。

「……でも、この程度のことではアイデンティティを手放すわけにはいきません」

ぐつと両手を握りしめ、決意を新たに成人男子の元へ向かいます。成人男子はもう床に膝をついてはいませんでした。けれど、私を見た瞬間、お茶をぶはつと吐き出しました。

「汚いですね」

「君にだけは言われたくない！」

成人男子はものすごい勢いで反論してきました。

「なんなんだその格好は！ ドレスに頭巾？ ありえないだろうどう考えてもその組み合わせは！ キヤサリン！ キヤサリン！ これはどうということだ！」

成人男子はものすごい勢いでメイドキヤサリンを呼びます。メイドキヤサリンは、どこからともなく現れ、成人男子に深々と頭を下げました。

「申し訳ありません。この方のお召し物は、その……クッキーのかすや、花の蜜などで汚れておりましてお洗濯するには少々時間がかかりますので、こちらをご用意させていただきました」

「……もうちょっとマシな組み合わせがあるだろう、それにしても」「この方に合うサイズとなりますと、それしかありません。屋敷から坊ちやまの幼い頃の服をお持ちしていれば、まだ選択肢もあったのですが。もちろん、時間をいただければ、私が縫うなり買ってくるなりもできますけれど」

「……………」

成人男子は黙りこくりました。どうやらメイドキヤサリンの勝利のようです。

「では、夕食の準備をいたします」

「それは私の分ですか？」

はい、と手をあげて元気よく質問します。先生、私、先生に言われたことしっかり守ってますよ、質問するときは元気よく、それが先生の口癖でしたね。私は、心の中の先生に話しかけました。ちなみに先生は今も元気です。でも、私の心の中に生きているという設定でお願いします。

「もちろん ですよね、カーティム様」

「ああ。とにかくまともなものだ。この赤ずきは絶対に普段から拾い食いをやらかしているに違いないからな。そのあたりのことをきっちり教えておかないと……」

「では、ぜひ豪勢におねがいします。最後の晚餐楽しみですよ」

ばんざーい、と私はリクエストしました。今まで見たことないく

らい豪華でおいしい料理を期待です。心が躍ります。楽しみです。
喜びのあまり小躍りをしていたら、なにやら空気がしーんと痛い
ことに気付きました。

きよろきよろと見れば、メイドキャサリンも成人男子も無言で私
のを見つめています。

「なんででしょう?」

小躍りがそんなに珍しかったのでしょうか。自作なのです。自信
作です。文句付けられるならつけてみると言いたい出来です。

「そういえば君、怖くないのか」
怖い?

「君は私に食べられる。殺されるんだ。なのに、さつきから怯える
様子が全くない。……死ぬということが理解できていないのか?
そこまで幼いようには見えないが」

失礼な。死ぬということくらい理解できています。

「成人男子は」

「いや待てなんだその呼称」

「私を食べるのでしょうか?」

成人男子は黙りこみました。そして、頷きました。

「ああ 食べるよ」

成人男子はとても静かに答えました。

「苦しめたりしますか? じわじわ指の先からとか、殺す前に目を
くりぬいたりとか、そんな拷問ちつくなこと」

「私は紳士だからそんなことはしない。まず最初に一息に」
がぶり。

なら、なにも恐れることはありません。怯えることもありま
せん。

私を食べる魔物さんは、なんとびつくり紳士だそうです。最後の
晚餐まで用意してくれるお人よしぶりです。今日の私はラッキーで
す。

なにも怖がることなんて、ないのです。

第3話 成人男子と最後の晚餐

最後の晚餐は、私の想像をはるかに超えた料理の数々でした。いえ、違います。私の想像を超えていたのは料理ではありません。メイドキヤサリンのミラクルな料理の腕です。

まず最初に、舌がとろけそうになりました。おいしさの余り、泣き出しそうになりました。そして、神様に感謝の祈りをささげようとして、やめなさいと怒られました。そういえばここは一応魔界です。

でも、魔界でもかまいません。私にとっては天国です。楽園です。パラダイスです。幸せです。

最後の一口を飲みこみ、私はほう、とため息をつきました。

「ああ……もう思い残すことはありません」

「デザートをまだお出ししていませんか？」

「それは大変です。死んでも化けて出てしまいます」

デザート！　なんてすばらしい響きでしょう。恍惚としている私の方を、成人男子は一度たりとも見ようとしません。下を向いて黙々と食べています。その額には心なしか青筋が立っているようにも見えました。

「っ、それはまさか！　噂に聞くケーキというやつですか！」

「ええ、そのとおりですよ」

「食べてもいいですか！」

「どうぞ」

丸い円に魅惑のクリーム。どこかしこもおいしそうで、じゅるりとよだれが垂れそうになります。

「では、いただきます……」

「ストップ」

さっきから一言も発しなかった成人男子が待ったをかけました。まさかこのタイミングで私をデザートにするつもりでしょうか。い

くらなんでもそれは承服しかねます。本気で化けて出ます。でも、化けて出ても、きっとケーキは食べられません。私はケーキに対する無念ゆえに現世にとどまり続けることになるでしょう……。

「なんでケーキを食べるのを待てと言ったくらいで、この世の終わりにみたいに悲しそうな顔をするんだ。君の感性は本当にわからない」
成人男子は優雅なしぐさでナイフとフォークを置きました。

「君は、今、どうやってケーキを食べようとした」
「どうと言われましても。」

「まずおもむろにケーキを手に取り、齧り付きま……」
ものすごい速度で、ナプキンが私の顔に直撃しました。痛いです。暴力反対です。

「君は、マナーというものが根本からわかっていない！」
「それは食べられるものですか？」

軽いジョークのつもりだったのですが、ものすごい目でにらまれてしまいました。おそろしや、おそろしや。

「……マナーくらい知っています。もちろん。言葉は。でも、そんなものは習ったことはありませんし、必要としたこともないのです」
どうせ田舎育ちですから。けつ。

「とにかく、私と食事をとにもするからにはちゃんとしたマナーを身につけてもらう。そうでなければ、気持ちよく食事することもできない」

「食事をとにも何も、私はこれからあなたの血となり肉となるんですよ？ マナーを身につけたとしても、それをどう役立てればいいんですか？」

それともこの成人男子は、自分の血肉となるものがマナーを身につけていないのが我慢ならないのでしょうか。今日のご飯に入っていたお肉たちも、マナーを身につけさせられたのでしょうか。最後の最後に、そんなこと。あんまりです。

「……成人男子は残酷な人ですね」

「その言葉を否定するつもりはないけど、妙に引っ掛かるな……」

成人男子は、メイドキャサリンに目配せをしました。心得たようにナイフを持ったキャサリンがケーキをきれいに切り分けていきます。

「あと、勘違いしているようだが、私は君をすぐに食べるつもりはない」

思いもよらない言葉に、ちょっと考えました。すぐに食べるつもりはない、とわざわざ言うということは、もしや、もしや！

「それはもしかして、明日の朝食も食べられるということですか？」

「……まあ、そうだね」
私は喜びに打ちふるえました。この世のものとも思えない食事を再び堪能できるとは！

「ありがとうございます、成人男子！」

「さつきから気になっていたんだが、その呼び方はどうにかならないのか」

「ありがとうございます、成人男子様！」

「違う、そういう意味じゃない！ そもそも君は……」

メイドキャサリンがことりと切り分けたケーキを私の前に置いてくれました。先ほどよりもだいぶ体積は減りましたが、私を誘惑するその魅力に変わりはありません。

「君聞いているのか？ こら、手づかみで食べるんじゃない！ フォークを使いなさい、フォークを！」

成人男子の声は、ケーキのすばらしさに夢心地となる私の耳には届きません。なぜなら、すべての感覚を味覚に集中しているから！
「幸せですー」

「……なんかもう、食べてしまおうか。いやいや落ち着け、これを食べる方がもつと嫌だ……」

成人男子はぶつぶつと呟いています。ヤバイオーラバリバリです。目が軽く座っています。軽く危機感を覚えます。

「食べないならケーキ全部食べてもいいですか？」

「……好きにきなさい」

成人男子はがく、とうなだれました。

第4話 素敵なアナタ

食事が終わると、私は再び風呂にぶち込まれました。無論赤ずきんは死守です。

「赤ずきん様は」

様なんてつけられると体中がかゆくなる気がします。

「とても綺麗な御髪をしてらっしゃいますね」

……はっ！

気がつけば頭巾はメイドキャサリンの手の中にありました。ガツと手をやった頭に触れるのは布の感触ではなく自分の髪。

「か、返してください！」

「この頭巾、どなたが縫ったものですか？」

メイドキャサリンは、微笑んだまま頭巾を撫でます。やめてください、返してください。声が出ません。

のどがカラカラに乾いています。

「……返してください」

変な声が出ました。でも声、出ました。がんばりました。

「失礼しました」

メイドキャサリンは微笑んだまま、私に頭巾を被せました。頭巾が私の頭をすっぽりと覆います。視界がずいぶん狭くなります。

私はほっと息を吐きました。

「……赤ずきん様の御髪は、本当に綺麗だと思いますわ」

「……ありがとうございます」

メイドキャサリンがふかふかのタオルで私を包みます。

着替えを手伝ってもらいながら、私は何度も頭巾を確認しました。せずにいられませんでした。

着替えを終えて部屋に案内されます。見たこともないような大き

な部屋でした。まったく、ここに来てから驚きの連続です。世の中にこんなに贅沢なベットがあるなんて思いもありませんでした。

「今日からしばらくは、この部屋でお休みください」

「しばらく、ですか？ 明日の朝ごはんは食べられると聞きました
が……成人男子はいつ私を食べる気にいるのでしょうか」

「それは、あの方のお心しだいですが、少なくとも一か月は……」
「そんなにですか！」

びつくりです。そんなに間があるなんて。

「あの方は他の魔物たちと違い、食事に非常に気を使っておいでなのです」

そういえば自分はグルメなんだとかほざいていた気がします。なんだか侮辱された気分です。むかむか。

「詳しいことは、ご本人にお聞きください」

それでは、おやすみなさいませ。とメイドキャサリンは去っていきます。私は明かりの消えた部屋のふかふかベットの上で目を閉じました。

……眠れません。

このふかふかベットはとても素晴らしいと思うのです。素晴らしいのですが、素晴らしすぎて目が冴えてしまいました。もともと眠くはありませんでしたが、さらに冴えてもうギンギンです。

仕方ありません。ベタな方法で行きましょう。

……羊が一匹、羊が二匹。羊が三匹。羊が四匹。

……羊が。

じゅるり。

はっ！ いけません。羊さんなんて数えていたらお腹がすいて眠れなくなります。

それにしてもなんて広いベットでしょうか。私が五人くらい寝れそうです。

くるりと一回転。二回転。三回転。四回転目でベットから落ちました。

立ち上がります。

布団にもぐりこみます。

一回転。二回転。三回転。四回転。五回転。六回転目でぼとり。
端から始めたので結構回りました。目も回りました。

……眠れません。

私は、本当なら既に永遠の眠りにについているはずだったのです。
それなのに今、眠れなくて困っています。それは、あの成人男子に
すべての原因があります。

私は立ち上がりました。これは、責任を取ってもらうしかありません。

部屋から出て、右、左、右、左。

はい、誰もいません。

そういえば、この家はとてつもなく広いです。村長さんの家10
個分は軽くあります。そのくせ、メイドさんはメイドキャサリン一
人しか見かけていません。ちょっと変です。もしかしたら他の方は
今日お休みなのかもしれません。

ぼつぽつと足元を確認できる程度の明かりがともされた廊下を当
て勘で進んでいきます。はてさて、成人男子はどこでしょうか。も
しかしてもう部屋でぐっすりというオチでしょうか。いくら私でも
眠っている人の部屋へ押し入るのは気がひけます。それでも『れで
いー』ですから。はい。

あてもなくさまよっているうちに、いつの間にか私は屋根の上に
いました。不思議です。

初めて見る魔界の夜空には、いかにも不吉そうな赤い月が浮かん
でいました。ぎゃーぎゃー、と変な鳴き声を上げる鳥も飛んでいま
す。不気味です。

私がここに来るのは、あのおばあさんの家から一瞬でした。気が
つけばこの家の一室にいて、いろいろ注意をされて、そしてクツキ

ーと紅茶を与えられました。

いろいろな注意については、その後のクッキーや紅茶や、もろもろの食べ物印象が強すぎてあまり思い出せないのですが……確か、この家には決壊？ が貼ってあるから？ 外に出ちゃダメ？ みたいな感じだった気がします。

決壊をどうやって貼るのかは知りませんが、とにかく外出は禁止、ということですよ、たぶん。でも、どこまでが家なのでしょうか。ここも外と言えなくもないですが、一応、家の中とも言えます。うーん、難しい。

まあ、ここはおとなしく引っこんでおいたほうがいいでしょう。注意を聞かなかったと食事を抜かれてはたまりません。

でも、いったいどうすれば戻れるのでしょうか。なにせ自分の直感にすべてを委ねて突き進んできてしまいましたから、道なんてさっぱりおぼえていないのです。

困った私はとりあえず周りを見ました。キヨロキヨロキヨロキヨロ。口。

しかし、本当に広いです。ちょっと遠くに塀が見えました。門らしきものもあります。あの辺りまでが家ということでしょうか。あの辺りまでは行ってもよいのでしょうか。明日、聞いてみることにしましょう。

しかし、本当に私はどこから来たのでしょうか。あ、なんだか今の私は哲学的です。カッコイイ、私！

自分で自分に満足しつつ、キヨロキヨロキヨロキヨロ。

「……君、こんなところで何をしている」
どっきん。

心臓が胸を突き破って出てくるかと思いました。軽くスプラッタです。

周囲に注意を払う私に気づかせず、気配さえ感じさせずに声をかけるなんて……やりますね。

私は慎重に声の方向へ振り向きしました。

「
」

そして、思わず声を失いました。

赤い月に照らされ、黒々と艶を放つ毛並み。静かでありながら、今すぐにでも私の喉元を噛み切ることができると予感させるしなやかな体躯。むき出しの牙は一本一本が私を殺すのに十分だとわかる鋭さを秘め、そしてその大きな瞳は恐ろしげでありながら確かな知性を感じさせる光を灯していました。

私は我知らず、ため息をもらしました。

私がこれほどの感動を覚えるなんて、食事以外では何年振りでしょうか。初めてかもしれませぬ。

なんて素敵で、美しく、恐ろしく、魅力的な　ワンちゃん。

じっと見つめる私に視線を合わせ、ワンちゃんはその大きなお口を開きました。

「…………君、今とても失礼なことを考えているだろう」

なんと、ワンちゃんは喋りました。さっきも話しかけてきたのもこのワンちゃんだったのですね。ちょっと聞き取りにくいですが、脳髓に直撃する美声です。

「そんなことはありません。ワンちゃん、あなたの魅力に惚れ惚れしていたところです」

「やっぱり失礼だ」

赤い月に照らされた大きな犬さんは牙を剥き、唸り声をあげました。怒ってしまったのでしょうか。

「あの、怒らせてしまうつもりはなかったのです。あなたはとても素敵だと言いたかったのです」

なぜだか焦って言い募ります。ワンちゃんは少しの沈黙ののち「怒っているわけじゃない」と言ってくれました。なんだかとてもほっとしました。

「それよりも、君はここで何をしている。キャサリンが部屋に案内したはずだろう」

「え？　あ、はい。ふかふかベットでした。でも、眠れなくて成人

男子を探していたのです」

そしたら、こんなに素敵なワンちゃんを見つけてしまいました。

「私を探していた？ 何か用でもあったのかい？」

「……はい？」

私は首を傾げました。話がなんだか食い違っています。

「私が探していたのはワンちゃんではなく、成人男子ですよ？ 正直なところワンちゃんに会えたので成人男子はもういいやって感じですけど」

「……君の言うところの『成人男子』は私だ」

……。

……。

……はい？

第5話 成人男子「ワンちゃん」？

私は耳を疑いました。これが夢かと疑いました。ちなみに目は疑いません。このワンちゃんが幻なんて悲しすぎます。ゆえにその可能性は即効デリートです。

にしても、どこから見ても、目の前にいるのはワンちゃんです。成人男子ではありません。あの成人男子は人間の姿をしていましたし、こんなに素敵ではありませんでした。あれ？　そもそも成人男子ってどんな顔でしたっけ。記憶を探っても出てくるのは固いパンとか美味しかった料理とかケーキとか……ああ、全然、出てきません。ということは、素敵ではなかったということです。そんな素敵でも何でもない成人男子とワンちゃんが同一の存在？　何かの間違いとしか。

……私は今、一つの可能性にたどり着きました。

「……ワンちゃん」

「私はワンちゃんでは」

「あなたは、本当に素敵です」

「え？」

ワンちゃんはポカン、と大きな口を開けました。

ああっ……らぶりー。

「そのキラキラさらさらな毛並みも、鋭い牙も、綺麗な眼も……本当に、本当に素敵です」

「え……そ、そう？」

ワンちゃんは照れたように声を上ずらせました。尻尾がパタパタ揺れています。素敵過ぎる外見とのギャップに胸キュンです。

「そうです！　私は、こんなに素敵な生き物を今まで見たことはありません」

「生き物って……うん。まあ、うん。結構気を使ってるから……」
照れ隠しでしょうか。何かぼそぼそ呟きながらもワンちゃんの尻

尾は風を起こさんばかりに猛スピードで右へ、左へ、と振られています。よし、もう一押し！

「だから、自分に自信を持ってください！ 成人男子と同一の存在だなんて！ 成人男子なんて、あなたに比べたら私が昨日村を出る前につまずいた石ころ以下です！」

「……え」

「姿かたちもいまいまいち思い出せないくらい存在感の薄い存在でしかもやたら失礼で、人を不眠状態に陥れる成人男子に比べれば……あなたの姿は私、死ぬまで いいえ、死んでも忘れない自信があります！」

「……………」

「ですから、成人男子と自分を混合したりしないでください。あなたは成人男子とはもう本当に、比べようもないほどダントツで素敵ですから ワンちゃん！」

ザア、と風が吹きました。

ワンちゃんの口から鋭い牙がのぞきます。

「…………… 赤ずきん」

「はい！」

私の真剣な心が伝わったのでしょうか。ワンちゃんは私の言葉を隅々まで受け入れるように目をつむり、深く深く息を吸って吐きました。

吸ってー、吐いてー、吸ってー、吐いてー、吸ってー、吐いてー。

…………… 深呼吸？

今度は口を閉じて沈黙しました。あれ？

…………… なんだかとても空気が重いです。

「ワンちゃん……？」

私が声をかけると、ワンちゃんはすっと、流れるような身のこなしで屋根を駆け下りました。そしてすぐ家の中へ入り、再び私の前に現れました。その口には一枚の白いシートがあります。鋭い牙がシートを割いてしまうのではないかと心配になりました。

はためくシーツをくわえながら、器用にもワンちゃんは言葉を発しました。さすがです。

「よく見ていなさい」

その言葉に、私はワンちゃんをガン見します。ええ、見るなど言われても私は見ます。だって、目の保養ですから！

ギン！ と見開かれた私の眼からさりげなく視線をそらしつつ、ワンちゃんは月を見上げました。月を見上げるワンちゃん……なんて絵になる光景でしょう。うっとりしつつ瞬きも惜しみつつ見つめていると 周りの空気が、変わりました。

夜の暗闇の中で、一層暗く、そして青い闇がまとわりつくような重さで私たちを囲みます。そしてその闇はじわじわとワンちゃんへ引き寄せられていきます。

「……あ」

魔素の収束……それも、こんなにも重く、苦しく、強い……これは これが、魔界の魔物の魔力。

体が震え、どくどくの心臓がうるさいほどに鼓動を打ちます。目は 逸らせません。

魔力は風のようにシーツをはためかせ、一瞬だけワンちゃんの姿を覆い隠しました。そして、再びその姿が現れたとき、そこにいたのは 。

「……ええ？」

「これでわかったか」

おぼろげな記憶ながら、さすがに目の前に現れれば思い出せます。確信できます。そういえばそんな顔をしていました。こんな声でした。

そこにいたのは、素敵な素敵なワンちゃんではなく……確かにまぎれもなく体にシーツを纏った人型の成人男子。

……なにやら見る限りシーツの下は何も着ていないように見えます。

ああ、これは。

これは、もしかして、もしかしくても。
「……成人男子は変態さんだったんですね」

次の日、私の朝食はパンのみでした。
うまうま。

第6話 認めるのもやぶさかではありません

私が悪いのですか。

「シーツの下に何か着ているようには見えませんでした。素っ裸に見えたんです。裸でいーの前で、素っ裸にシーツ一枚巻きつけただけの姿で現れたと思ったんです。素っ裸にシーツ。それで女の子の前に現れたんです。わぁ変態、って心の声がポロつてもれても無理ないと思うのですが」

食後に紅茶とクッキーをごくごくモグモグいただきながらメイドキヤサリンとお喋りします。

「それは、確かに……カーティム様、本当に素っ裸で赤ずきん様の前に？」

「い、いやそれは……それ以前に、素っ裸、素っ裸、素っ裸と、君たちには恥じらいがないってものを持ち合わせていないのか？」

「成人男子、もしかして話を逸らそうとしていますか？」

逃がすまじ、と突っ込みを入れました。だって素っ裸です。変態です。

「……っ、そんなことよりも、認めたんだろうな？」

……。

クッキーに手を伸ばしました。紅茶のカップも手に構え。

モグモグごくごく。モグモグモグモグモグモグごくごく。

モグモグモグ。ごくくん。

「何をですか？」

「私と、昨日の狼が同一の存在であることを、だ！」

おーかみ？ 私は首をひねりました。心当たりがありません。おつかみ、おー紙？

「紙？」

「お・お・か・み・だ！ ……昨日、君は私のことを『ワンちゃん』だとか呼んでいただろう。そのことだ！ でも断じて『ワンちゃ

ん』ではない。犬じゃない。私は魔に生きる誇り高き者、ワーウルフだ」

「わーうるふ」

「ワーウルフ、だよ。確か人界では人狼とも呼ばれていたはずだ。聞いたことくらいならあるだろう」

結局、おおかみなのかワーウルフなのかはつきりしてほしいです。……ああ、狼ならそういえば聞き覚えがありました。確か近くの山でそれっぽいを見かけたことがある気がします。でも、あのワンちゃん……いえ、狼さんの方が素敵でした。

ああ、でも。でもっ……！

……人がせつかく目をそらしていたことを突き付けてくるなんてひどい人です。

「夢をぼろぼろにするようなことを……」

「は？」

子供の夢を壊さないでほしいのです。あんな素敵なワンちゃんではなく、狼さん？ が、イコールで目の前の口うるさい成人男子と結ばれてしまうなんて……。

「はあー」

ため息が肺の奥から出てきます。私の幸せが逃げていきます。成人男子のせいです。

あのと看、狼さんから成人男子へ目の前で変身されてしまいました。二人？ が私にウソをつく意味もありません。何よりも、狼さんと成人男子のもつ魔力は同一です。冷静になつてみれば疑う方が馬鹿らしいのです。

もういつそ泣きたいです。生まれて初めての食べ物以外への感動だったんです。それなのに。嗚呼それなのに。

あの狼さんは確かに素敵でした。どこもかしこも本当に素敵でした。でも、目の前の成人男子と同じなのです……。

ああ、でも、でも……落ち着くのです、私！ どこもかしこも、と思つてしまうのはきつと恋はモウモクみたいなことになつていた

からです。先生も言っていました。好きって気持ちでいっぱいになって相手を見失うのは馬鹿なことですよ。好きって気持ちは相手を知るところから始まるんだって。だからちゃんと食べ物を食べるだけでなく、作り出す過程も勉強していつか素材から料理を作るようになりなさい、そして自給自足ができるようになりなさい、それが誰にとっても迷惑のかららない一番の道だって。

……先生、私、がんばります。

お空の上から見守っていてください。

決意を新たに成人男子を見つめます。見つめます。見つめます。

……はあー。

「なんだ」

「気にしないでください。はい。あなたと狼さんのイコールな関係を認めるのもやぶさかではないのです。はい」

ごくごく。ぷはー。

もぐもぐもぐ。

「認めたならいいが……いつまで食べ続けているつもりなんだ、君は」

「気にしないでください。ただのやけ食いです」

やけ食いができるという幸せを噛みしめながらやけ食いをすることとで胸のモヤモヤを晴らすとしているのです。

モグモグごくごくモグモグモグモグモグごくくん。

「それにしても君のマナーは本当にひどいな。口いっぱい物を詰め込むな。カスを散らかさない。……ああもう、言ってる傍から！」

「そんなことよりも狼な成人男子」

「その呼び方だけはやめてくれ！」

泣きそうな声で頼まれてしまいました。

仕方がありません。

「成人男子狼さん」

「……ああ、そういえば名乗っていなかった。私の名前はカーティムだ」

「カーティム狼様」

「ミックス禁止」

わがままです。お金持ちはわがままと相場が決まっているので我慢します。ご飯をくれるお金持ちには親切に、です。

私はちよつと考えて、目の前の男性の呼び名の中から一番好きなものをチョイスしました。

「狼さん」

「カーティムだって……何？」

私は狼さんの目をしっかりと見つめて話を本題に戻しました。

「結局、シーツの下は素っ裸だったんですね？」

第7話 ハラペコマナー

「……そんなに見ないください」

狼さんの熱い視線を感じます。体が震えます。冷静を装いますが、できているかはわかりません。

震える手をそっと動かしました。

がちゃん。……ずずーっ。

「音を立てない！」

すかさず狼さんのお叱りが飛んできました。

思わず手に持っていたスプーンを投げつけました。あっさり受け止められました。チツ。

「……どうしてスプーンを飲むためにそこまで神経をとがらせなければならいんですか」

お皿を手で持つてごくごく飲み干せばいいじゃないですか。スプーンで一口一口なんて、ひ・こーりつ的です。しかも音を立てちゃいけないとかスプーンをすくう方向も決まってるとか……そんなことに神経回すくらいなら味覚に回したいです。

狼さんの手の中で、私が投げたスプーンは狼さんの手の力に負けてぐにやりと形を変えました。

「言いたいことはそれだけかい？ ……もう一度やり直した。ちゃんと正しいマナーでスプーンを飲めるようになるまで君の食事はスプーンのみだから、そのつもりで」

ひどいです。ひどすぎます。せめてパンもぷりーずです。

メイドキャサリンが代わりのスプーンを持ってきました。そして狼さんの手の中のぐにやぐにやスプーンを回収していきます。

狼さんは、容赦なく言いました。

「さあ、続けなさい」

マナーなんて大嫌いです。

狼さんの家にやってきて、今日で3日目です。

昨日は朝にパンを食べて、そのあとおやつを食べて、そして……
本当にスーブしかもらえませんでした。

お腹はグーグー鳴っています。こけーぶつがほしいです。腹にたまるものがほしいのです。噛みごたえのあるものを食べたいのです
っ……………！

ハラペコのあまり超・早朝に目が覚めてしまいました。

お腹すきました。

お腹すきました。

お腹すきました。

…………… 今日もスーブ特訓なのでしょうか。嫌です。嫌すぎます。美味しいですけど！

そういえば、とふと窓を見て思い出しました。庭に出るのは門までなら自由にしていいたと言われたのです。どうせ君は食事の時間には忘れず戻ってくるだろうしなと言われました。狼さん、どうしてあなたは私のことをそんなに理解しているのですかと聞いたたらあきれた目で見られました。なぜでしょうか。

ともかく体を動かせば気がまぎれるかもしれません。私は、ちょっと外に出てみることにしました。

そして今、私は朝露にきらめく庭の中でため息をついています。

ちよつと散歩してみました。走ってみたりしました。木登りもしました。…………… お腹がすく一方です。

村にいたときは我慢できなくなったら村の外で適当に木に生っている実とか、食べられる草を探しました。盗んだりはしていません。私はいいい子なのです。

でも、この庭から食べられる物を探して食べたら、盗みになってしまうのでしょうか。

…………… でも、よく考えてみます。

この庭のものは、狼さんのものです。この庭のものを私が食べま

す。私は狼さんに食べられます。つまり、狼さんが狼さんのものを食べます。……無問題です。

私は目を凝らして庭を見渡しました。見たことのない植物がとも多いです。でも、見覚えのあるものもちよっとだけあります。きつと、食べられるものもあるはずです。

私は探しました。死に物狂いです。空腹マックスです。ハラペコなのです。

……ありません。

なぜですか。なぜなのでしょう。これだけ植物があつて、木があつて、草があつて、花があるのに！

泣きそうです。

私は、村にいた頃を思い出しました。たった三日。されど三日。村の外の食べ物が沢山ある山が、森が、懐かしくて仕方ありません。

そういえば私が食べられるものと食べられないものの区別がつかなかった頃、空腹に耐えかねた私は山に入り、そこに生っていた実をたらふく食べました。……お腹を壊しました。先生には、お腹を壊すだけで済んだのは奇跡だといわれました。そうです。私は奇跡を起こす女。

私は毒々しいまだら模様の実に目を向けました。いかにも毒がありそうです。でも食べられそうな気がします。奇跡を信じて、私はその実に手を伸ばしました。

「あら、赤ずきん様」
どきーん。

心臓が飛び跳ねました。寿命が縮まりました。でも寿命まで生きる予定はないので問題なしです。無問題です。

「おはようございます」

キラキラと輝く朝の陽ざしの中で、メイドキャサリンもまたキラキラと輝いていました。そういえば魔界のくせにやたら健康的な朝の光景です。

「どうかなさいました？ ……それが気になるのですか？」

手こそ引つ込めたものの、体の向きは変え損ねました。私がそのまだら模様の実を食べようとしたことはばれていませんよね？ よね？

「それは実に見えますが、本当はつぼみなんですよ？」

「つぼみ、ですか？」

「実じゃないんですか！ ……でも食べられる花もあつた気がします。」

「もう少ししたら綺麗な花を咲かせてくれますよ。ちなみにその花びらには毒性があり、口に入れば三日三晩悶絶のち死に至るそうです」

「どうやら食べられるものではなかったようです。セーフです。メイドキャサリンはそのまだら模様のつぼみに愛おしそうに手を滑らせました。」

「ちよつと最近調子が悪かったようなので心配していましたけど、ここ数日でまた元気になってきたみたいで」

メイドキャサリンは常に浮かべているものとはまた違う、ほっと息を吐くような微笑みを浮かべました。

「……よかった」

私はその微笑みに一瞬見とれてしまいました。

まるで『お母さん』が子供に向けるような愛情をメイドキャサリンから感じます。

「……メイドキャサリンは、この庭の植物の世話をしているのですか？」

「ええ。でも、私一人で、ではありませんよ？ 赤ずきん様とはまだお会いしていないかもしれませんが、庭師もおります」

庭師さんいたのですか。初耳です。

でも、そうだとしても、です。

「本業に差し支えない範囲で、配置を考えたり、新しくどんなものを植えるか考えたり、そういったことにも携わらせていただきます」

したので、どうしても気になって……」

ふふ、と少女のようにメイドキャサリンは笑います。

……あきらめるのかなさそうです。

「このつぼみは、いつ咲くのですか？」

「二、三日中には。咲きましたらお知らせしますね」

「はい」

では、私は朝食の用意がありますので、とメイドキャサリンはしずしずと去って行きました。

うーん。

いくら狼さんのものとはいえ、育てたのはメイドキャサリンと庭師さん。しかも、その成長を楽しみにしている……これはとりあえずそこら辺のものを、と食べるわけにはいきません。危険度も、人界と魔界ではけた外れのようにですし。

……は、しまった。メイドキャサリンに頼み込んでつまみ食いをさせてもらえばよかったのでは。

でも、メイドキャサリンはメイドさん。狼さんに怒られてしまう可能性もあります。だめです。メイドキャサリンに迷惑はかけられません。あんな奇跡の料理を生み出す人に迷惑をかけるだなんて……絶対にだめです。

私は考えました。考えました。考えました。

考えながら歩きました。深く考えるために目を閉じていました。

……転びました。

そして目を開いたとき目に飛び込んできたのは　カタツムリ。

ごくり。

そういえば、始めてこの家に来た日の晩御飯で、エスカルゴという料理が出ました。カタツムリでした。カタツムリ、食べられるものらしいです。はい。カタツムリ、食べられるのです。

お腹がすいているのです。ハラペコなのです。カタツムリは食べられるのです。無問題なのです。

私はカタツムリをつかみました。おもむろに口を開きました。

あーん。

「やめろーっ！！」

そのとき、どこからか狼さんの怒声が聞こえてきました。びつくりして周りを見ると、ものすごい勢いで狼さんが走ってきます。狼さんは勢いのまま私の傍まで来て手の中にあつたカタツムリを奪い取り、そして　カタツムリは、星になりました。……たぶん星になりました。朝なのでよく見えませんが。

「この馬鹿っ！！　何を考えているんだ君はっ！　意地汚いとは思っていたが、まさかそこまでとは思わなかった！」

青いんだか赤いんだかわからない顔で狼さんは怒鳴ってきます。耳が痛いです。

「お腹すきました」

「だからってカタツムリを食べるなっ！　あれは食べ物じゃない！」
「食べ物じゃないんですか？」

びつくりして狼さんを見ます。だって確かに食べていたじゃないですか。

「なぜ驚くんだ。確かにエスカルゴという料理はあるが、あれは寄生虫がつかないように養殖されたもので、そこらのカタツムリは断じて食べ物じゃない。それと……魔界の寄生虫は宿主の魔力を自分のものとした挙句、最終的にはその体を自分のものとして操る。つまり、寄生虫に取り付かれれば最終的に死に至る」

「そうなんですかー」

勉強になりました。

「だから、もう二度と食べようなんて思わないように。まったく、君が庭にいるとキャサリンから聞いて嫌な予感がしてきてみれば、まさかカタツムリを食べようとしてるなんて……もっと厳しく、マナーというよりも常識を教える必要が……」

「狼さん、お腹すきました」

ぐい、と話途中の狼さんの服を引きます。

「……君ね」

「お腹すきました」

ぐーぐーとお腹が鳴ります。

狼さんは、はぁーと溜息をつきました。

その日は、肉料理の特訓でした。成功するまで、ずーつと練習でした。激うまでした。幸せでした。

マナー、好きになれそうな気がします。

第8話 庭師さんをお願い

カタツムリ事件から3日後、私はメイドキャサリンに連れられて例の実のような花を見に行くことになりました。

毒々しくとも、わりと食べられそうに見えたつばみがどんな花なのか興味があります。美味しそうな花でしょうか。食べられないことは分かっていますが、見たくなるのが人情です。

そういえば、結局この庭に食べられるものはあるのでしょうか。いえ、食べません。メイドキャサリンと庭師さんが丹精こめて作った庭です。食べません。食べませんよ。でも、知りたくなるのが人情です。はい、ところで人情ってどういう意味でしたっけ。

メイドキャサリンの後ろ頭を見ながら迷います。「ここに食べられる草とか花とか果実とがありますか」と聞いても大丈夫でしょうか。聞くだけならアリな気がします。だって聞くだけです。食べません。食べないんだからきつと大丈夫です。

意を決して口を開いたその瞬間、メイドキャサリンは足を止めました。慌てて止まろうとして舌を噛みそうになりました。大変です。舌を食べてしまったら味がわからなくなります。

「こちらです」

メイドキャサリンの指し示す方向を見れば、見覚えのある毒々しいまだら模様ではなく、真っ白な花がたくさん咲いている木がありました。そういえば、こんな大きさの木でした。登らなくても手が届く範囲に実が生っている木でした。この木は、私の手の届く範囲に花が咲いています。

……もしかしてこれですか。

メイドキャサリンは、私の驚きを見透かしたように言葉を重ねます。

「つばみのうちと違い、とても綺麗な色ですよね。でも、毒は比べ物にならないほど強力になっているんですよ」

メイドキャサリンは立派に咲いた花を見ながら嬉しそうに笑います。それにしても、見れば見るほど不思議な花です。ちよつと違和感があると思つて見てみれば、なんと私の顔よりも大きい花もあれば、私の手のひらよりも小さい花もありました。

「これが全部同じ花なんですよね」

「はい。同じ木から全く大きさの違う花が咲くのが、このテイルグの特徴なんです。大きな花からの方がもちろんたくさん毒が作れますが、小さな花の方がもっと強くて繊細な毒を作ることが出来ます」

「要は毒らしいです。食べられません。綺麗ですけど食べられません。残念です。」

「本当はもっと魔素の多い場所でないとか咲かないんですよ。うちの庭師の腕は最高です」

「もつたいないお言葉ツス」

木が喋りました。違います。木の陰にいた人が喋りました。麦藁帽子をかぶったひよる長い男の人です。手にじょうろを持っています。ハサミも持っています。ザ・庭師つて感じですよ。

「あら、そこにいたんですね」

メイドキャサリンはまったく驚いた様子もなく微笑みました。

「赤ずきん様、こちらが我が家の庭師です」

「はじめましてツス」

庭師さんが深々と頭を下げました。下げた頭がちよつと私の目の前にあります。私も負けじと頭を下げます。私の頭はきつと頭を下げた庭師さんの目にも見える低さになっているでしょう。

「赤ずきんです。はじめましてです」

「よろしく願いますツス」

「こちらこそよろしく願います」

「……………」

「……………」

「お二人とも、いつまで頭を下げていらっしゃるんですか？」

私はちよつとだけ目をあげました。頭を下げつつ私を見下ろしている庭師さんと目が合います。私たちはいつせーのせで頭をあげました。引き分けです。やりますね、庭師さん。

メイドキャサリンはあらあらとちよつと首を傾げてから、庭師さんに声をかけました。

「さすがね。とても立派なティルグだわ」

「恐縮ツス」

庭師さんは麦藁帽子の上から頭に手をやります。それにしてもひよる長いです。というか、大きいです。首をかなり曲げないと顔が見えません。

なんだかよじ登りたくなります。

いけません。ひよろつと細くても木じゃないんです。登るなんてダメです。でも、登りたいです。

ものほしそうに見てしまったのでしょうか、庭師さんが「どうかしたんツスカ」と私の前にしゃがみこみました。そして、ああ、とそのまま後ろを向きました。

「どうぞ」

「はい？」

「肩車でもおんぶでも」

私は登りたいのであって、高い所に行きたいわけではありません。おいしいです。おいしいですが、自力で上まで登りたいのです。

「立ってください」

庭師さんは「あれ？」と私を見てから慌てて立ち上がりました。

「あ、すみませんツス。姪っ子がよくやりたがってたもんで、てつきり……」

もう、私は自分を抑えきれません。肩車でもおんぶでもいいならよじ登るのだってきつといいんです。許してくれます。

「動かないでください」

「え、うわっ」

私はがしつとしがみつぐんぐんと登ります。さすがに木とは違

うので頂点はすぐだと思いきや、微妙に体勢が変わったり動いたりされて登りにくいです。燃えます。

「え、ちょ、ええっ!？」

ぐい、と腕の力で自分を引き上げ、たどり着きました。はたから見たらただの肩車でも、決して同じではありません。これは私が自分の力でつかみ取った肩車です。

達成の余韻に浸る私に「おめでとうございます」とメイドキャサリンが祝福してくれました。庭師さんはまだ変な声を出しながらも、私の体を支えてくれます。

いつもよりもずっと高い位置からの風景は最高です。テイルグも、いっそう綺麗に見えました。

食べられないことだけが、本当に残念です。

第9話 二人のお茶会

狼さんの家にきて、もう10日は経ちました。

連日のマナー特訓にもようやく慣れてきて、最近では『ふるこーす』で食べれます。途中で失敗することもあります、幸せです。

それにしても狼さんは、いつになったら私を食べるのでしょうか。

思い立つたら即実行。でないと忘れてしまいます。

私は優雅にお茶を飲んでいる狼さんに尋ねました。

「狼さんは、いつ私を食べるんですか」

狼さんは変な音を喉から出しました。器用です。

「げほっ……君ね、そういうことをサラッと聞くのはやめなさい」

「どうしてですか。あと、いつですか」

新たな疑問を付け加えつつ、テーブルの上にあるお茶菓子に手を伸ばしました。はたき落とされました。ケチです。

「そのケチと言わんばかりの目をはなんだ」

「ケチ」

「口で言えと言ってるわけじゃない」

狼さんは聞えよがしにため息を吐きます。村一番の美少女ルーシーが、最近父親がウザくてたまらないと言っていたことを思い出しました。なーんかイラッとするのよねー。

イラッときます。

「君は食べられることは怖くないと言っていたな。今の発言も、いつ食べられるのが分からず怯えているというよりは、私が食べるのを待っているようだ。君はもしかして 死にたいのか？」

狼さんはとても真面目な顔です。本気でそう思ってるみたいです。馬鹿馬鹿しいです。狼さんは馬鹿です。

死にたいわけなんてありません。

「まさか」

「ならばなぜ」

狼さんはそこまで行って言葉を切りました。

「いや、いい。聞いても仕方ないことだしな。君を食べるのがいつ、というなら今みたいな手癖の悪さをなくして、もう少し見目がよくなる程度に太った後だ。今食べても、そんなやけっぱっちじゃほとんど食べるとがないし絶対に美味しくないし、そもそも何食べてるのか分からないような人間を食べたくない。特に先日のカタツムリの件を思うと……」

狼さんは口元を手で押さえました。

「……あれから食べたりにしてないだろうな？」

「食べてません」

食べられないものだとかればさすがに口に入れたりはしません。お腹がすいているときはチャレンジ精神が芽生えやすくなるのです。そうです、あれはチャレンジなのです。低くともゼロではない可能性に賭けているだけなのです。赤ん坊のようになんでも口に入れると思われるのは心外なのです。

「それにしても、君はこれだけ食い意地が張っているのにずいぶん痩せているな……あまり食べさせてもらえなかったのか」

「無駄に消費できるほど食料に余分はないと言われました」

「確かに君はやたらと食べるからな」

なんだかとても納得されました。私はただ、生きている間に幸せをかみしめたいだけです。何かを食べている時間というのはとても幸せなのです。私は常に幸せを追求する人間なのです。

「まあ、好き嫌いが無いのは長所と言えなくもないか」

「狼さんはあるんですか？」

「嫌いというより、一流のもの以外食べたくない」

「わがままですね」

そんなことにこだわらなくても、美味しいものは溢れています。

「食事に関してはわがままになることを自分に許している。食べる

ことは、すなわち生きることだしね。どう生きるかは何を食べるか、にも通じてくる」

狼さんは私の前にお茶菓子であるマドレーヌを差し出しました。はじめて出会ったあの日以来、ふぉーりんらぶです。大好きです。私はすぐに受取り食べはじめます。狼さんはそんな私の頭に手をおせて軽く叩きます。痛みを感じるようなものではなく、むしろ先生によくできましたと撫でられる時の感覚に似ていました。気持ちいいです。美味しいです。

幸せです。

「……すべての生き物は生に対し貪欲なものだ。けれど君は」
狼さんの手が私から離れました。

「君は、どうしてそうなんだだろうな」

狼さんは私を椅子に着くように促しました。そして、メイドキャサリンを呼んで新たなお茶とマドレーヌを用意するように言います。新たなマドレーヌげつとです。

でも、心が少し重いです。幸せが、少しばみしました。

『赤ずきん』は食べられることが役目なのです。そのために生きてきたのです。生きるために、たくさん食べてきたのです。幸せをもらってきたのです。

それだけの話なのです。

ちよつと無言で重苦しいお茶会です。ちゃんとマナーに気をつけつつ、注意を受けつつ、でも静かなお茶会です。

マドレーヌを味わいながら、最近違いがわかるようになってきたお茶の名前とかを教えてくださいます。

狼さんは、マナーにさえ気をつければとてつもなく親切な人です。ご飯もくれるし寝るところもくれるし着る服もくれます。

ふと、先生を思い出しました。村では私の保護者のような人でした。色んな事を教えてもらいました。元気でしょうか。殺しても死

ない気がするのできつと元気です。でも、ちょっと足が悪いので不自由をしているかもしれません。普段は私をパシリにしていますから。

……魔物溢れる山とか森とかによくお使いに行かされたものです。「そういえば、見回りついでに先日君の村を見てきた」

タイミングばっちりな話題にちよつとビクツとしてしまいました。「様子を見るだけのつもりだったのに、感知能力が高い人間がいて気づかれてしまった。君のことを聞かれたので、確かに受け取ったとだけ伝えておいたけど」

「そうですか」

それなら一安心です。

「狼さんは、村を守ってくれるんですね？」

「ああ、あそこは私の領地だしな。お婆様の形見でもある」

オバアサマ……おばあさんのことですね。そういえば、おばあさんが亡くなったから私は狼さんに食べられることになったのです。おばあさんが亡くならなかったら、私はもうとくに食べられていたのでしょうか。食べてもらえていたのでしょうか。

「珍しいな、今日は食べるのがずいぶん遅い」

ようやく5個目のマドレーヌに手をつけた私に、狼さんが目を瞬かせます。

私にだってそんな日があるんです、と私はお茶を飲み干しました。

第10話 開いた扉にご用心

お腹いっぱい大満足でマナー特訓もひとまずお休みです。
さて、と困りました。

ヒマです。

やることはありません。

ヒマです。

メイドキャサリンにお手伝いを申し出ました。皿洗いとかできません。

「赤ずきん様はゆっくりなさっていてください」

断られました。

庭師さんに食べられる雑草とか教えてくださいと頼みました。草むしり手伝います。

「あー、食べたなら死にそうなものしかないツスね」

がっかりです。

狼さんにヒマですと訴えました。遊んでください。

「変なものを食べず、大人しくしてなさい」

逃げられました。

ヒマです。

ヒマなので、探検することにしました。この家は広いです。だだっ広いのです。言ったことのない場所がたくさんあります。きっといいヒマつぶしになります。

れっつごーです。

迷いました。

同じようなドアが並んでいるのがいけないんです。階段がたくさん

んあるのがいけないんです。人がいないのがいけないんです。わかりやすい目印がないのがいけないんです。

迷いました。

まあ、上に登れば屋上に出ます。窓から下りれば庭に出ます。この二つが分かっていたらどうかなる気がします。不安はありません。でも、ご飯までに食堂に戻るかどうか心配です。私の腹時計は、そろそろ引き返した方がいいと告げています。引き返すにはどっちへ行ったらいいのでしょうか。困りました。

とりあえず、歩きまわってみます。色んな部屋がありました。絵とか飾ってありました。私の部屋とほとんど同じ部屋がありました。鍵がかかっていて開かない部屋もたくさんありました。本がたくさんある部屋がありました。ためしに何冊か開いてみたら結構読めました。またヒマになったら、狼さんに頼んで読ませてもらおうと思いました。歩きまわっているうちに、目的地である食堂は一階にあるのだから、つまり下へ行けばいいんだと気付きました。今何階にいるのかはわかりませんが、とりあえず下へ下へと降りていきます。さて、一番下へ到着です。なんだか薄暗いです。今日は曇り空なのでしょうか。

とにかく歩きます。今どこかわかりませんが、とりあえず歩きます。暗いです。どんどん暗くなっているのは気のせいでしょうか。心なしか空気も重苦しいです。そういえばさっきから窓を見かけません。

歩いているうちに行き止まりについてしまいました。ドアがあります。なんだか入りたくないです。引き返すべきでしょうか。でももしかしたらこのドアの向こう側に新たな道があるのかもしれない。

迷った時はチャレンジです。どんなに不味そうなものでも食べてみたら意外とイケるなんてよくあることです。まずは挑戦してみることから始まるのです。

意を決してドアに手を掛けてみました。ガチャ。ガチャガチャ。

鍵がかかっているようです。残念！

これはもう戻るしかありません。それにしてもちよつと疲れしました。そんなに動いていないのに、年でしょうか。先生がよく言っていました。僕はもう年だから少し動くとすぐ疲れてしまうんだ。だから、若い君がその分動くべきだよ、と。私もどうやら年のようです、先生。だって、そんなに動いていないはずなのに疲れてしまつたんです。まるで体中から力が吸い取られているようです。

なんだかグタッとドアにもたれかかつて座り込んでしまいました。本当に力が入りません。なんででしょうか。頭がくらくらしています。

あきらめて体から力を抜くと、ぱたつと、後ろに倒れてしまいました。

……あれ？ ドア、開いてしまったようです。

重い体を起こして中を覗き込みました。薄暗い部屋に、ぼんやりとした明かりが灯っています。部屋の中心にあるのは魔方陣でしょうか。うつすらとほこりを被った家具の中で、部屋の奥に飾られた絵だけが異彩を放つように鮮やかな色をしています。人が描かれているようですが、光が届いていないようで誰だかわかりません。

とにかく、私はこの場を立ち去ろうと体を起こしました。ここにいるのは嫌だと思いました。なぜかはわかりませんが、嫌でした。恐ろしいような、悲しいような、そんな感情が自分の中に渦巻いているのがわかるのです。

ふらふらと来た道を歩きます。背後の明かりが消えて、廊下はまた暗くなりました。パタンとドアがしまる音がしました。でも振り返る気にはなりませんでした。

カタツムリよりも遅い歩みで歩いていると、正面から、バタバタと足音が聞こえてきました。ほっとすると同時に膝をついてしまいました。駆け寄ってきた人に手をのばして、そのまま私は気を失いました。

目を開けると、もう見慣れた部屋でした。ふわふわのベッドが気持ちいいです。

「大人しくしていると云っただろう」

ベッドの脇に座っていた狼さんはしかめっ面で腕を組んでいます。怒っているようです。

「それにしてもいったい何があったんだ。そんなに衰弱して……とにかく、今日はゆっくり休みなさい。キャサリンがおかゆをもってくるから、それを食べたらすぐに寝ること。いいね」

狼さんには私に布団をかけ直してくれました。そして、そのまま腕を組み直し私をじっと見ています。落ち着きません。

「……………」

「……………」

無言です。観察でもされている気分です。私なんか観察しても面白くないこと請け合いです。

でも、狼さんはじっと見ています。落ち着きません。

見られているから落ち着かないのなら、見ている側なら落ち着くのでしょうか。

私は狼さんをじっと見つめました。目が合います。見つめます。

狼さんのこげ茶色の髪とか、鋭い金色の眼とかをじっと見つめます。

「……なんでそんなに私を凝視するんだ」

「狼さんが私を見るからです。でもせつかならあの眼福な狼の姿をした狼さんを見たいです」

「あっちの姿、ねえ」

狼さんはちよつと考え込んで私から視線をそらしました。私はそんな狼さんを見続けます。

「私のあちらの姿、そんなに好きかい？」

「大好きです」

即答しました。悩む余地ありません。今も夜になると狼さんの姿をしていないかと時々突撃するのですが、いつも人の姿です。悲

しいです。何度も頼んだりしてみましたが、すげなく断られてばかりだったのです。

もしかして、脈ありなのでしょうが。

「そうだな……」

狼さんが考え込みます。期待に胸が高鳴ります。わくわくのドキドキです。

「いけません」

しかしそこにばつどたいみんぐ。メイドキャサリンがおかゆを持って現れました。そういえば、今はいつでしょうか。部屋の中は明かりがついていますが、外はもう暗いようです。……ご飯、おかゆだけなのですね。

「赤ずきん様はとても弱っていらつしやいます。カーティム様が魔素を動かすことでどんな悪影響が出るかわかりません。今はとにかく休息が必要なのです」

いつもの笑顔でメイドキャサリンはさりげなく狼さんを追い立てます。

「カーティム様がそばにいらつしやるだけでも、弱っている赤ずきん様には負担になるかもしれません」

「そ、そうなのか？」

「そうですね。今日はカーティム様も、もうお休みになられるのがよろしいかと」

ほんのりと混ぜられたやや強めの口調は提案というよりも強制しているようでした。メイドキャサリン、なんだか少し怖いです。

狼さんが部屋を出て行くとメイドキャサリンは私に声をかけました。

「起きあがれますか？」

その言葉に体を起こそうと力を入れます。ちよつとへなつとなりかけましたが大丈夫です。メイドキャサリンが手を貸してくれて、背もたれも作ってくれました。いたれりつくせりです。

「どうぞ」

差し出されたおかゆを受け取って、食べます。おいしいです。食べはじめると、お腹がどんどんすいてきました。差し出された分はあつという間に空になりました。足りません。

「……おかわりは」

「そのような状態では食べすぎるのはよくありません」

食べすぎなんてとんでもないです。足りません。

視線で訴えますが、メイドキャサリンはさらっとシカトです。にっこり笑って、お薬ですといかにも美味しくなさそうな液体を差し出してきました。不味そうです。臭いもヤバい感じです。飲みたくありません。だってお薬です。私の経験的に、お薬ですと差し出されたものが美味しかったためしがないのです。でも、お腹がすいています。お腹の足しがほしいです。液体でもほしいです。でもごく不味そうです。

「……………」

「……………」

葛藤の末、メイドキャサリンの圧力、そして空腹に敗北です。私はその液体を飲み干しました。すぐに吐きたくなくなりました。もちろん吐きません。もったいないです。でも不味いです。先生が作ってくれた薬並みに不味いです。泣きそうになる私にすかさずメイドキャサリンが「どうぞ」とクッキーをさしだしてきました。口に入れます。おいしいです。

「もう一枚……」

「だめです」

ぴしやりと取り付くしまもありません。メイドキャサリン、意外と厳しいです。

クッキークッキークッキーと未練たらたらでメイドキャサリンの顔を見つめます。メイドキャサリンはそんな私の心の声を無視して私をベットに横たえました。横になるとあつという間に眠くなってきました。

「赤ずきん様、もうあの部屋へ行っではいけませんよ」

子供に言い聞かせる口調です。でも、怖いほど真剣な声でした。

「あの部屋は、終わりの部屋。近づいてはいけません」

優しい手が、赤ずきんの中に入り込んで、私の髪を直接撫でました。

「ゆっくり眠って、明日にはまたご飯をお腹いっぱい食べてください。それが、今のあなたの役目」

静かな声が心地よく私は夢の中でその声を聞いていました。

「おやすみなさい。どうか、あなたが悪い夢につかまりませんように」

第11話 侵入者は雨とともに

口元をそつとナプキンでぬぐいます。

「とてもおいしかったです」

につこり笑顔も忘れずに。

「……完璧だ」

「素晴らしいです、赤ずきん様」

ぼうつとしている狼さんと、惜しめない拍手とともに褒め称えてくれるメイドキャサリン。

「あれだけどうしようもなかったのに、まさかここまでちゃんと…」

狼さんは不意に言葉を切って目元を抑えました。

「カーティム様、よかったですね」

メイドキャサリンがさりげなく白いハンカチを差し出します。狼さんはそれを身ぶりだけで断ると、私に向きなおりました。目がばつちり赤いです。

「よくやった、赤ずきん。本っ当によくやった」

なにも泣くほどのことでしょうか。確かに私はがんばりました。いくらでも褒めてください。称えてください。でも泣かれるとちょっと引きます。

連日のマナー特訓の成果は、今日ようやく狼さんに認められるレベルに達したようです。

「ああでもよかった。間に合って」

狼さんがぼつと息を吐きます。

「……間に合う？」

いったい何のことでしょうか。

私の頭の上のはてなマークが見えたかのように、狼さんはくすりと笑いました。狼さんが笑ったのを見るのはとても久しぶりな気がします。初めてかもしれませぬ。レアです。ナマ焼けではありません。

ん。レアです。

「明日、私の知人が訪ねてくるんだ。どこから聞きつけてきたのか赤ずきんを見たいと言ってきていてね。最低限のマナーくらいは身につけておいてもらはないと困るところだった。君は一応かわいらしい顔立ちをしているのだからあとは黙って余計な事をしないでいてくれさえすれば何の問題もないはずだ」

今、私は褒められたのでしょうか。けなされたのでしょうか。

「キャサリン、明日はあいつが来る前に赤ずきんに何か食べさせておいてやってくれ。空腹だと何をしでかすかわからない」

「かしこまりました」

けなされている気がします。

「さて、赤ずきん。注意しておきたいことがいくつか……いや、かなりある」

……なんかいやーな感じです。

まるでお説教される直前のような感じがあります。聞く前からもういいですーと言いたくなってしまいます。

「それでは、お茶の用意をさせていただきます」

いつの間にか机の上の料理はちゃんと下げられていました。目にも見えぬ早業！ さすがはメイドさんです。

「クッキーもお願いします！」

「申し訳ありません、今日の用意したのはマドレーヌなのですが」「大歓迎です！」

それではお持ちしますねと微笑み、メイドキャサリンは去って行きました。わくわくです。マドレーヌ楽しみです。わくわく、そわそわ、わくわく、そわそわ。

「君、今しがたフルコースを食べきたばかりだったはずだけど……いや、私としたことが愚問だった」

「ぐもん？」

甘いものは別腹のことでしょうか。もちろんこれは物の例えです。甘くなくとも、おいしいものはもれなく別腹です。常識です。わく

わくです。ときどきです。期待に胸が膨らみます。そわそわします。
「では赤ずきん、心して聞くように」

……マドレーヌのためだと思えば、耐えきれはずです。

それから狼さんの注意事項を右から左へ華麗に受け流し、晩ごはんをお腹いっぱい食べさせてもらい、お風呂に放り込まれ、ようやく一息、明日のためにもゆっくりと寝ましようとしてベットにもぐりこみました。

夕方辺りから雨が降り始めて、窓に水滴がたくさん流れています。そういえば晩ごはんの時に魔界は雨は血の雨だと思っていましたと言ったら、そんなことあるわけがないと言い切られてしまいました。また一つ幻想が消えてしまいました。血が降ってきたらお掃除が大変ですとメイドキャサリンが言ったので、普通の雨でもよしとすることになりました。

うとうとしていると、窓がコンコンと音をたてた気がしました。どうせ雨音でしょう。眠いです。

ガンガンガンと音が大きくなりました。雨がひどくなってきたみたいです。うるさいです。眠いんです。

ガンガンゴンゴン……ガッシャーン。雨、ひどくなりすぎです。風が吹きこんできました。ちよつと寒いです。でも眠いです。眠いったら眠いんです。村にいたころは外で寝たこともいっぱいあります。ここは屋根の下。ベットにふわふわ掛け布団付きです。余裕です。寝れます。眠いです。おやすみなさいです。

唐突に眠りの世界へ旅立とうとした私の首根っこをつかむように部屋の中に誰かが入ってくる音がしました。魔力を感じます。狼さんじゃありません。多分知らない人です。

ごろんと転がって窓のほうに目を向けてみます。やっぱり知らない人です。

「おい、そこのお前！」

びしつと指を突き付けつつ、得体のしれない侵入者はとてもよく通る声をしていました。とてもとてもです。眠い頭にだつてばつちりです。すごくよく響きます。それはもう嫌になるくらいです。

「赤ずきんか？ そうだろ、当たり前だろ。その赤い頭巾が何よりの証拠だ！」

「……その通りですが」

「だろ？ さすが俺！」

侵入者は子供のように無邪気満面の得意な笑みを浮かべます。

……用が終つたのなら眠りたいです。いいですよ。いいに違いません。

「おやすみなさい」

「は、何言ってるんだ！ 俺は客だぞ。そんでお前はカーティのペツト……だっけ？ 食うんだから家畜か？ あーでも色々教えてるって言ってたから……とにかく、カーティの赤ずきんだろ？」

「……はあ。確かに私は赤ずきんですが」

ペツトだか家畜だか知りませんが、私は赤ずきんです。でも、カーティってどなたでしょうか。

私が疑問を口にする前に侵入者は私の方へズカズカと歩み寄ってきます。

「なのに俺を放って寝るなんてダメに決まってるだろ！」

なぜですか。

「俺も寝たい！」

納得です。

そう言うなり侵入者は私の横に寝っ転がってきました。布団の中に入ってきたわけではなく掛け布団の上に乗ってきたので私は押しつぶされないように横に転がりました。ゴロゴロゴロ。三回転して落ちました。ふぐ、と変な声をあげてしまします。真ん中から転がったのが敗因です。

「何やってるんだ？ お前馬鹿なのか？」

馬鹿なのでしょいか。そうでないと信じています。私だけは私の

ことを信じてあげるのです。

私はベットにより登りました。侵入者とは違い、ちゃんと掛け布団の中にもぐりこみます。本来なら私が六回転できるベットなだけはあるって大の大人と私が寝ころんでも余裕です。さすがです。一回転ゴロリと転がってベットの淵から生還です。ベストポジション確保なのです。

侵入者はそんな私をおもしろそうに見ながら枕を引き寄せ、その上に頭を置きました。

「準備できたな？ よし、許可する。寝てもいいぞ。俺も寝るからな」

そう言った3秒後に侵入者は寝息を立てはじめました。私はびっくりして侵入者の寝顔にしか見えないツラを見ます。だって、寝るの早すぎです。3秒ですよ、3秒。本当に寝ているのかと鼻をつまんで確かめたいです。ついでに口も押えれば永遠の眠りへ直行です。でも、この際、対象が動けないようにしておかないとほぼ100%起きちゃいますよ、気をつけて。と私の記憶の中で先生がお茶目に囁きます。深呼吸です。すーはーすーはー……好奇心よ、鎮まるのです。我慢です。我慢。

そんなことよりも、睡眠です。これで私の眠りを妨げるものは何もないのです。起こしたら私の眠りが遠ざかります。優先すべきことはちゃんと見極めなきゃいけないのです。私は今とても眠いのです。

割れた窓から吹き込んでくる雨音はとても眠気を誘います。眠いです。入ってくる風が冷たいです。

でも……温かいです。

自分でない者の体温は、とても温かいです。ほかほかします。ぬくぬくです。

おやすみなさい。

第12話 朝一番のお説教

朝の目覚めは最悪でした。

まだ外も明るくならないうちにいきなり狼さんが部屋に怒鳴り込んできたのです。しかも窓から。人にはマナーとかうるさいくせに、窓から入ってくるなんてひじょーしきです。そして眠いです。

狼さんはまだ寝こけている侵入者さんの襟首をつかみ揺さぶりつつ色んな事を怒鳴っていました。ぼーっとそれを見ていると、矛先は私の方にも向いてきます。私は侵入者さんともどもベットのの上に座らされて色々言われました。が、何を言われていたか覚えていません。

メイドキャサリンが現れ、狼さんと何か話した後、いつもお茶を飲む部屋に連れて行かれてそこでおいしいお茶を飲まれた辺りでようやく目が覚めました。

そして、狼さんの眉間に深く刻み込まれたを認識した次第です。はい。

「君が礼儀知らずだということは知っていたがさすがにここまでだとは思わなかった。人の家を訪ねて来て、寝静まっているようだったから窓を割って入るなんて……常識的にありえないだろう」

狼さんが眉間にしわを寄せて完全お説教モードに突入しています。でも、侵入者さんはびくともしていません。

「なーなー、俺、ジグザ。赤ずきんは？」

「赤ずきんです」

「俺、ワーウルフ。赤ずきんは？」

「赤ずきんです」

それにしてもなんて、マイペースな人でしょうか。狼さんを完全シカトするなんて。

「赤ずきん、何か好きなもんある？」

「食べられるものが好きです」

「俺も好き。同じだな。あと、面白いのも好きだ」

侵入者さんはにっと笑いました。あ、狼さんの額に青筋が。

「……君もだ。真夜中に窓を割って見知らぬ者が入ってくれば、いくら君でも変だとわかっただろう。その時点で私かキャサリンに報告するべきだったのに、そのままそんな不審者と同じベットで朝まで寝こけているなんて」

「眠かったんです」

「眠かったって……！」

狼さんが目を剥いて頭を抑えました。侵入者さんがソファの上でふんぞり返って大きく欠伸をしました。開いた口から、人には不似合いな鋭い牙が見え隠れします。

「もういいだろ？ 窓はちゃんと弁償するって。でもお前だって悪いんだぞ。せつかく俺が訪ねてきたのに出てこないんだもん！」

「しょうがないだろう雨のせいで音も匂いも分からなかったんだ！ だいたい空き部屋はいくらでもあったのにどうしてよりもよつて赤ずきんのいる部屋を狙って侵入したんだっ！」

「お前なら俺が来たことに気づいてくれると信じてたのに全然でムカついたから。傷ついてついついぬくもりを求めたんだよ。わかるだろ、この気持ち」

「全然わからない！ だいたい、なんでこんなに急に訪ねてくるんだ！ 君が来るなんて聞いてない！」

あれ、と首を傾げました。この侵入者さんが狼さんと仲良しなようなのでてつきり今日来る人はこの人なんだと思ってました。どうやら別口のようです。

「いや本当はファーと一緒に来ようと思ってたんだよ。でも、あいつ俺のこと連れて行かないとか言いやがってさ。仕方ないからあいつよりも早めに出てきたってわけ」

「なんでそうなるんだ……私が招待したのはファラだけだ。君を迎える準備なんかまったくしてない」

「寝るところは赤ずきんと一緒にいいし、食いもんはお前の分をく

れば十分だから気にすんな」

「君は何様だ！」

狼さん、いつもよりもだいぶ機嫌が悪そうです。でも楽しそうにも見えます。

「カーティム様」

メイドキャサリンがいつの間にか部屋に現われていました。

「お客様がお見えです」

「ああ、通してくれ」

狼さんは疲れ果てたように椅子にどさりと腰をおろしました。メイドキャサリンが部屋を出ると、侵入者さんはそろっと窓に近づきました。

「どこへ行く」

すかさず狼さんが引きとめます。

「俺、怒られるの嫌いだ」

「だったら怒られるようなことをするな」

もっともなことを言いつつ、俊敏な動作で立ち上がり、侵入者さんをつかまえようと手を伸ばします。しかし、侵入者さんは目にもとまらぬ速さで窓を開け放ちそのまま飛び出していきました。人間とは思えない早業です。あ、人間じゃありませんでした。さすが魔物な速さです。

「くっ、逃げられた」

狼さんは悔しそうに窓の外に目をやります。私もその後ろから覗き込みましたが、侵入者さんの後姿すら見えません。本当に素早いんです。狼さんは後を追うか迷っていましたが、諦めて深く深くため息をつきました。

「赤ずきん」

「はい」

「君は部屋に戻りなさい。後でキャサリンを寄こすから、身支度を」
そういえば朝に狼さんが怒鳴り込んできてからずっと説教をされていたので寝巻のままです。朝ごはんも食べていません。お腹すき

ました。

「ご飯は……」

「あつ……」

しまったと狼さんが顔を歪ませます。そういえば昨日、お客様が来る前になんか食べさせとけみたいなことをキャサリンに言っていました。お腹がすいていると変な行動をしかねないとか何とか。

別に变なことなんてしません。ただ、部屋の隅に飾ってある綺麗な花が気になります。あと、台所を探検したい気分です。

狼さんはさまよう私の視線を遮るように前に立ちました。なにか、と問いかける間もなくひよいと抱き上げられます。

「……準備はしてあると思うんだ。後でそれも持って行かせるから、とにかく部屋に。キャサリンが客を連れて戻ってくる」

すたすたとドアの外まで連れて行かれて廊下に押し出されました。仕方ありません。戻るとしましょう。

部屋に戻る道はもう覚えています。一人でも大丈夫なのです。それにしても力が出ません。最近、一日三食おやつ付きの生活なので体もそれに慣れてしまっています。贅沢三昧です。狼さんはいい人です。あれ、人でよかったですつけ。いい魔物というべきでしょうか。ワーウルフとか言ってたので、いいワーウルフですというべきでしょうか。でもワーウルフは人狼のことだと言っていました。見た目は狼でした。……じゃあ、狼さんはいい狼さんですということ。

……なんか変です。やつぱりいい人です、でいいです。わかりやすいのが一番です。

そんなことを考えながらとこと部屋まで戻ると、なんと侵入者さんがいました。

「よお」

片手を挙げて挨拶されます。ぺこりとお辞儀をして挨拶を返しました。

「おはようございます」

「なんか違うかい？」

間違っています。今は朝です。狼さんが侵入者さんに気づいて乗り込んできたのは早朝でした。とても早朝でした。なので狼さんのお説教を聞いてなお、まだ朝です。まだまだ眠いです。侵入者さんが寝そべっているベットにふらふらと引き寄せられてしまします。

「お前も寝るか？ 俺は寝るけど」

「……朝ごはんを食べるまで寝ません」

むしろ寝れません。今の私には睡眠よりも食事が必要です。

「そうか。俺も腹減ったな。この部屋には何かないのか」

「ありません」

断言です。あつたらとつくに私が食べ尽くしています。隠されていたとしても今の私の鼻なら見つけ出せるはずなのです。

「じゃあ、お前食べていい？」

一瞬思考が止まりました。不覚です。

「ダメです」

私は狼さんに食べられるのです。侵入者さんに食べられるわけにはいかないのです。

「ケチ。ま、いーけどな。お前割と気に入ったし。食べるよりは遊びたい」

そうしてください。

「というわけで優しい優しい俺からの忠告だ。ファーに気をつけろ。あいつえげつないから」

ふぁー？

どういうことですか、そもそもふぁーってなんですか、と聞く前にドアがノックされました。

「赤ずきん様、お着替えと食事を持ってきました」

「はい！」

待つてましたと扉に向かいます。

ようやくご飯の時間です。

そんな私の頭から、つい今しがたの侵入者さんの忠告はスポン

と抜けてしまっていたのでした。

第13話 譲れないものがある

すっかり二人分あった朝食を侵入者さんと熾烈な争いを繰り広げながら食べた後、ごろりとそのまま横になろうとした侵入者さんをメイドキャサリンが追い出し、そのままお着替えタイムとなりました。

本当ならお風呂の用意もしてあったんですけど時間がないので、とメイドキャサリンはちやくちやくと私の身支度を整えていきます。自分ですべきなのでしょうが、準備された服は私が一人で頑張るのは無謀だとは思えないほどリボンとかボタンとかいろいろなものがかくっついているのです。

しばらく案山子のようにじっとしているとようやく着替えが終了しました。

準備完了です。

完了です。

完了なのです。

完了したら完了なのです。準備カンペキおーけーなのです。

「赤ずきん様……」

「では、行きましょうか」

ドアへ向かおうとするとメイドキャサリンが立ちふさがります。

……メイドキャサリンの必殺技、無言の圧力、発動です。けれど、私も負けません。

どれほどの時がたったのでしょうか。ほんの数秒だった気もしますし、丸一日ほども経っていたような気がします。ともかく、私とメイドキャサリンの一騎打ちに終止符が打たれました。

「まだ準備できていないのか」

ドアの向こう側から狼さんの声です。メイドキャサリンは困った

顔をしつつドアを開けました。狼さんは私を見て一言。

「なんだ、もうできてるじゃないか」

.....。

思わず無言になるメイドキャサリンと私です。

「ほら、あまり客を待たせたくない。キャサリン、早く連れてきなさい」

狼さんは、そう言ってまた戻ろうとします。その後ろ姿にメイドキャサリンが声をかけました。

「このままでよろしいのですか？」

「何を言っているんだ。ああ、あと、お茶の追加も早くしてくれ」
狼さんは振り返りもしません。

メイドキャサリンと私は顔を見合わせました。

「.....このままで」

メイドキャサリンはちよつと首を傾げた後、では行きましようかといつも微笑みを浮かべました。

ところで、慣れる、というのは恐ろしいことです。偉い人は毒殺されるのを避けるために日常的に毒に体を慣らすこともあるそうですが、それにより寿命が縮むこともあるそうです。慣れによって死に至ることは避けられても、毒はじわじわと体を弱らせてしまうそうです。だから、いつかは普通に食べられるようになると信じて毒性のあるものを食べるのは絶対にやめなさいと先生は言っていました。そう、慣れるということは、とても便利なことですが、恐ろしいことでもあるのです。

と、いうわけでお客様とご対面です。

狼さんの入りなさい、という言葉とともにドアを開けた途端、思いっきり目が合いました。

長い髪綺麗な女の人です。お洒落です。じょうりゆうかいきゅうの匂いがします。狼さんと同じ金色の瞳の美人さんです。

「ファラ、見たがつていただろう。それが赤ずきんだ」

それ呼ばわりされました。傷つきました。甘いお菓子を食べずし

てこの傷はふさがりません。

お客様のカップは空ですが、お茶菓子はまだ残っています。おいしそうです。じゅるり。

私の視線がどこへ向かっているか気づかないまま、お客様は私を見つめています。じいっと見つめています。そして、戸惑ったように首を傾げました。

「え、ええっと……」

お客様は目をぱちぱちさせてから、目をこすり、私を再び見ました。

「……あの、私、流行に疎いから分からないんだけど……頭巾とドレスの組み合わせが、最近の流行りなの？」

狼さんは一瞬止まり、それからギギギ、と音のしそうな動作で私の方を見ました。そして、顔をものすごい勢いでひきつらせました。

「……っ、キャ、キャサリン、キャサリン！」

「はい、なんでしょうか」

メイドキャサリンはいつものごとく、どこからともなく現れました。手には準備完了の追加お茶セットがしっかり装備されています。お菓子の追加もばっちりです。でも、今の狼さんの目には入らないようです。

「どうして頭巾を……っ」

「カーティム様がこのままでよいと」

狼さんは口をぱくぱくと開けたり閉めたりしています。でもそこから言葉は出てきません。そしてついにメイドキャサリンのパーフェクトな笑顔の前に敗北しました。

「見慣れていて気付かなかったっ……！」

一生の不覚と狼さんは顔を手で覆います。最初の数日は頭巾にさんざん突っ込みを入れていた狼さんですが、ここしばらくはまったく何も言ってきていませんでした。やはり慣れてしまっていたようです。慣れとは恐ろしいものです。はい。

「力、カーティ？」

お客様はうるたえたように狼さんの肩に手をかけます。しかし、狼さんは顔を上げようとしません。

「あ、赤ずきんだものね、頭巾を被ってるのは当たり前ね！」

「はい。当たり前です」

全面的に肯定です。お客様、わかってますね。

わかっていない狼さんはお客様の言葉にさらに肩を落としていきます。まるで追い打ちをかけられたように、空気の重さが増しています。何をそんなに落ち込むことがあるのでしょうか。お客様は納得してくださったというのに。

「ほ、ほらおいで、赤ずきんちゃん、お菓子食べる？」

「食べます」

なんていい人！ いえ、魔物でしょうか。とにかく素晴らしい方です。

お客様がお皿ごと差し出してくれたお菓子に、私は手を伸ばしました。けれど、その手は届きませんでした。

「……狼さん」

がっしりと掴まれた手首はどうがんばってもびくともしません。

「……頭巾を取りなさい」

「お断りします」

即答です。考える必要なしです。

「私としたことが、不覚だった。ドレスに頭巾なんてありえないんだ。ありえるわけがないんだよ……」

狼さん、ぶつぶつとちよつと怖いです。ホラーです。狼さん、いつもの紳士ぶったさわかさはどこで落としてきたのですか。

それにしてもここまで追い詰められている狼さんを見るのは初めてです。ここは私が妥協すべきでしょう。

「わかりました。ドレスを脱ぎます」

有言実行です。とりあえず手に届くところのリボンから外しはじめます。

……でも一人で脱げるでしょうか。

がんばります。

結び方が複雑すぎてなかなかほどけません。ボタンもいくら外してもきりがありません。

でも、がんばります。

「……って脱ぐな！」

それなのに狼さんはせつかく外したボタンやリボンをどんどん戻していきます。なんて手際の良さ。私の努力があつという間に水の泡です。どうしてくれるんですか。

「なにするんですか。狼さんが言うから頑張つて脱いでいたのに」「誤解を招くことを言うな！ ドレスを脱げなんて一言も言っていない。頭巾を取れと言ったんだ！」

「頭巾は私の一部です。狼さんは私の一部をはぎとろうというんですか、はぎとつて食べるんですか」

「食べてたまるか！ …… ああもう、わかった。君がそのつもりなら仕方ない」

ひーとあっぷしていた狼さんが突然冷静な口調になりました。でも目はまだ怒っています。ものすごく怒っています。

しかし、まだ私は狼さんの怒りを甘く見ていたのです。狼さんの瞳がギラツと光りました。

「頭巾を脱ぐまで、食事は抜きだ！ …！」

ガーン！ と頭に石をぶつけられた時のような衝撃が走りました。

第14話 確保せよ！

状況を見極めて、素早く行動をすること。

とても大事なことです。

だから私は、駆け出しました。とにかく走りました。

目指すはただ一つ 台所です。

「ちょ、待てどこへ行く！」

食事抜きと言われたからには何をにおいても食料を確保しなければなりません。この家において食糧があると思われるのはそこだけなのです。庭には食べられるものがないのです。あるかもしれませんがわからないのです。村にいたときのように食事を抜かれたからと言って自力調達ができないのなら、屋敷の中からちよいといたたくしかありません。大丈夫、本来なら私が食べるはずだったものをちよつともらうだけです！

後ろから追いかけてくる足音と、それを止める声。そして足に絡みつくドレスのせいで転んでしまった痛みも完全無視の全速力で台所に到着です。

「よお」

侵入者さんがいました。

さすが侵入者さん、と思わず唸ってしまいます。

「どうしたんだ、お前もやっぱり足んなかったか？」

これ食うか？ と食べかけのパンを差し出してきます。それは素直に受け取り、まだ何かないかと思渡します。

「……どしたんだ。腹減ってるならそれ食べればいいだろ。なんか探してるのか？」

「さらなる食料を探しています」

ワイン発見です。重いのでいりません。水はたぶんもらえる気がします。パンさらに追加でゲットです。チーズも見つけました。

「あ」

「どした」

……しまった。盲点でした。

「これ以上、持てません……」

どうして私の手はこんなに短くて小さいのでしょうか。ドレスのすそをつまんでみても、やっぱり大した量はもてなそうです。でも、出直す時間があるとは思えません。

「おい、何泣きそんな顔してんだよ」

「……侵入者さん」

「それ俺のことか？ ジグザって名乗っただろ」

「私、餓死してしまうかもしれない」

私が望まない死に方堂々の第一位です。そうなる前に狼さんに食べてもらうしかありません。こうなったらいさぎよく諦めて、私の美味しさを狼さんにアピールしていくべきでしょうか。食べたことないので美味しいかどうかわかりませんが。

「餓死ってお前、パン抱えて何言ってんだ。……ん？」

いきなり鳩尾に圧迫感。と思えばなぜか侵入者さんの肩に担ぎあげられていました。

「……なんですか？」

「カーティが来る。逃げるぞ。あいつ盗み食いにはうるさいんだ」それは大変です。食事抜きと言われたばかりで食べ物を取りに来たとばれれば、頭巾をとつても食事抜きかもしれない。いえ、取りませんけど何があっても。

侵入者さんは素早い動きで庭へとつながる扉へ動きます。お腹が侵入者さんの肩に当たって苦しいです。もつと持ち方を変えてくださいと頼もうとしたら舌を噛みました。痛いです。泣きそうです。

侵入者さんが扉から出ると同時に狼さんが現れました。私たちを見るなり顔をひきつらせ「何をしているんだ！」と叫びます。逃げようとしている以外の何に見えるのでしょうか。

「捕まってるよ！」

無理です！

舌が痛くて返答できない代わりに心の中で叫びました。だって、私の手にはパンが握られているのです。私の生命線です。チーズは落としてしまいました。せめてこれは死守しなければいけません。侵入者さんは私の心の叫びを聞いてもくれず、すごいスピードで走り抜けていきます。狼さんはあつという間に見えなくなっていました。それでもまだ走り続けます。とても揺れます。私はパンを離さないように必死です。怖いです。本当に怖いです！

しかしその恐怖は唐突に終わりました。

侵入者さんではない人の手が私の体を掴み、引き上げたのです。侵入者さんはそのまま駆けていきました。ちよつとは気付いてください。

「大丈夫ツスカ」

私を救ってくれたのは庭師さんでした。高めの木に登っていたところらしく、上からひよいと持ち上げてくれたようです。助かりました。本当に助かりました。

「ありがとうございます」

感謝のしるしに、パンを少しちぎって差し出します。今の私にはこんなことしかできません。でも、最大限の感謝を示したいのです。だってもう少しで私はこのパンを手放す選択をするところでした。恐怖のあまり。

「いえ、結構ツス。ところで何してたんツスカ。赤ずきん様が今にも死にそうな顔をしてたんでつい引き上げちゃったんツスけど、よかったんツスカ？」

「全然大丈夫です。命の恩人です」

庭師さんに遠慮されてしまったパンをかじります。命の味がします。

「はあ……」

庭師さんははて、と首を傾げていましたが、ならいいツスけどと言いながら木から飛び降りました。ちよつときよつとします。どれだけ高さがあると思っっているんでしょうか。庭師さんは危なげなく

着地して、私に手を伸ばしました。

「赤ずきん様も飛び降りてくださいッス。受け止めるんで」
「わかりました」

私はえいや、と庭師さんの上に飛び降りました。地面に飛び降りる勇氣はありませんが、庭師さんに飛び降りるなら大丈夫です。高さの差がありませんのです。つくづく庭師さんは大きい人なのです。庭師さんはあっさりと受け止めてくれました。侵入者さんのようにぐえ、となるようなことのない持ち方に感動です。

「ところで庭師さんは何をしていたんですか？」
「ちよつと休憩ッス。そろそろ昼飯の時間なんで」

……お昼ごはん。

私はパンを見つめました。私はこのパンで何食分耐えなければいけないのでしょうか。悲しいです。切ないです。

「どうしたんツスカ？」

黙り込んだ私を気遣い、庭師さんは私の顔を覗き込みます。

「ごはん……」

「はい？」

「私、食事抜きなんです……」

ええっ！？、と庭師さんは飛び退りました。そして、えーえー、と声を上げます。

「赤ずきん様が食事抜き！？ 無理じゃないッスカそれ。ていうかならそのパンはいつたい」

「庭師さんはこれからお昼ごはんなんです……」

「え、ええ。まあ」

「ごはんなんです……」

「……」

「……」

「……えーつと」

「……」

「……俺も、腹減ってるんツスけど」

「……………」

訴えるように見上げると庭師さんは視線をさまよわせた挙句、昨夜とは打って変わって晴れ渡った空を見上げてため息をつきました。
「ちよつとだけツスよ？」

庭師さんはお人よしです。

食事を取りに行くという庭師さんに手をひかれながらパンを少しずつ齧ります。

「赤ずきん様、いったい何したんツスカ？ メシ抜きなんて」

「頭巾を取れと言われました」

「取りやいいじゃないツスカ」

「絶対嫌です」

つないでない方の手で頭巾を押さえます。取られてしまうんじゃないかと不安になりました。

「……仕方ないツスけど。つて、あ」

庭師さんの声に顔をあげると、なんと侵入者さんが見えました。そしてその後ろを猛烈な勢いで追いかけているのは……狼さん！

「待てー つー！」

「誰が待つかー つー！」

すごい勢いで通り過ぎていきます。その後ろ姿を眼で追っているとふと狼さんが振り返りました。目が、会いました。

「……っああー！」

そういえば、私も逃亡中の身でした！

まだ手の中に残っているパンをとつさに隠し、そのまま庭師さんの手を振り払って逃げ出します。だって狼さんが路線変更して私の方に来たら大変です。

庭師さんの呼びとめる声がしましたが、それを振り切って走り回ります。走って、走って、走りました。

びたん、と転びました。パンは死守です。

体を起こして狼さんの気配を探りますが、どうやら近くにはいないようです。ほっとしました。ほっとしたら膝が痛くなってきまし

た。急ぐ必要もないので地面に座ったまま周りを見回します。

目の前に広がる景色にはまったく見覚えがありませんでした。どうしましょう。

適当に大きな木を探してよじ登ればたぶん大丈夫だと思うのです。でもそれは狼さんに見つかるという危険もあるということです。

どうしましょう。

私は途方にくれました。

しばらく、じっとしていました。誰の声も聞こえません。風の音だけ聞こえていました。

ふと、風の音の中に違う音が混ざりました。これは……誰かの足音！？。

狼さんが追いかけて来たのでしょうか。逃げるべきでしょうか。ああでも、距離的に無理です。それにもう走りたくありません。膝がジンジン痛いです。

私は深呼吸を一回、パンを千切って一口食べて、覚悟を決めました。そしてそっと振り返った先にいたのは、狼さん。ではありませんでした。

そこにいたのは、金の瞳と、茶色の長くて綺麗な髪の毛の。

「こんにちは、赤ずきんちゃん」

やわらかく微笑む、お客様。

第15話 赤ずきんとお客様

「どうしたの、こんなところで」

お客様は座り込んでいる私の前にしゃがみこんで、ん？ と首をかしげます。

「……狼さんは」

「狼？」

お客様は首を傾げました。通じていないようです。私は記憶の底をさぐりさぐりさぐり。

「……カティームさん？」

「カティームのこと？」

惜しいです。

「はい。カティームさんは、その……怒ってましたか？」

先ほどの様子を見れば聞くまでもないのですが、見間違いだったりしてほしいという願望から聞いてみたりしました。

お客様は困った笑いを浮かべました。

「あー、そうね。怒って、た、かも？」

お客様、笑顔がひきつっています。優しさはときに痛いのです。

狼さん、まだ怒ってるみたいです。潔く出頭するべきでしょうか。その方がご飯を食われる可能性は高くなるでしょうか。

「で、でも大丈夫！ カティは優しいから！」

お客様、とっても意気込んでいます。力いっぱい力説です。

「私ね、カティと幼馴染で昔はよく一緒に遊んだの。ちよつと怒りっぱいところもあるけど、いつだってちゃんと理由があるし、謝ったらすぐ許してくれるの。それに、とっても優しいの。小さい頃なんてね、私がちよつと危険な場所にある花を取りに行こうとして失敗して怪我しちゃったときなんか、ジグザは自業自得、なんて笑っただけだったのにカティはそんなジグザを怒って私の怪我の手当てしてくれたし、自分にも取りに行くのはちよつと無理そうだから

ごめんって謝ってくれたの！ 私それを聞いて花をほしがってたことなんてどうでもよくなっちゃった！ だって私、花なんかよりもカーティの方がずっと……ってキヤー！ そ、そんなことは思っただけで言えなかったんだけどとにかくね、カーティはすっごく優しいから大丈夫よ！」

お客様、いきなりハイテンションです。正直ついていけません。「ね？」

につこり、とお客様は微笑みました。魔素が集まり、空気がピンク色に染まっています。無意識に魔力を発動させているのです。空気の色を変えるほどの魔力を。

村にも感情が高ぶると魔力を暴走させてしまう人がたまにいました。未熟だということでもありますが、明らかにここまで魔素が色を変えるほどの魔力を無意識に、というのはなかなかありません。恐るべし、お客様。

それにしても。

「大好きなんですネ」

お客様は、狼さんのことが。

言葉にしなかった部分は間違いなくお客様に伝わったようで、お客様は顔を真っ赤にしました。ピンク色が強まります。目に毒です。「う、うん。なんていうか、初恋？ でも、初恋は実らないっていうけど、そんなことないよねって思ったり、思わなかったり……」

きゃーと、何の前触れもなく声を上げるお客様をぼーっと眺めます。

好き。大好き。

私も、狼さんが好きです。狼姿の狼さん、大好きです。

でも、この方は、狼さんが好きらしいです。

きつと、狼姿じゃない方の狼さんも。

「……狼さんも、きつとあなたのことが好きです」

「そ、そうかなっ!？」

きゃーっ！ とまた声を上げるお客様。空気はもうピンクを通り

越してドピンクとしか形容できません。むしろ毒々しいほどになっています。毒ピンクです。

「でもでも、私、あんまり血筋よくないし、カーティはあの方の直系だし。結構頑張って強くなったつもりだけど、ワーウルフにとっては強さと同じくらい血統も重視されるし、でも、そんなのどうしようもないから、もつともつと強くななきゃって思ってるの。もつと、もつと、もつと　もつと」

「もつと、ですか」

すでに十分すぎるほどの気がします。

そう言おうとしたとき、お客様のまとう空気が変わっていることに気が付きました。

「そう、もつと。もつとなの、赤ずきんちゃん」

すつと、お客様の手が私の顔に伸びてきました。頬を包み込むようになでられます。

なぜか、ぞつと背筋に冷たいものが走りました。咄嗟に飛びのきますが、それよりも早く動いた手が私の腕を掴みます。長く整えられた爪が肌に突き刺さりました。

「細い手ね。でも、とても柔らかい。ねえ……少しだけなら、いいかな？」

食べても。

先ほどの狼さんのことを語っていた時の幸せそうな顔のまま、けれど何かが違う顔でお客様は私の腕を引きます。私はとっさに魔力を強め、魔素を集めて抵抗しようしますが、すでに辺りの魔素はお客様に引き寄せられていて、なかなか私の元に来てくれません。

お客様の目が、もうなんと言いますか、危ない感じです。

「よくありません、離してください」

「いいじゃない、ちよつとだけ。ね、私、知ってるのよ。『赤ずきん』のこと」

赤く染まった唇から、鋭い牙が覗きます。人ではありえない、鋭い牙。

「私、強くなりたいの。少しでも、もつともつとたくさん。カーテ
ィに釣り合うようになりたいの。ふさわしくになりたいの。ねえ、い
いでしょう？」

焦りながら、魔力を高めていきます。

間に合うでしょうか　ああ、間に合わない。油断、です。油断
しました。

必死で抵抗します。でもまったく歯牙にもかかれません。相手
は細身の女性に見えても魔物で、私は赤ずきんとはいえただの人間
の子供です。あまりにも差が歴然としています。

血のにじむ腕にお客様が顔を寄せて、ぺろり、となめました。う
ふふ、と無邪気に顔をほころばせるお客様は、きつととてもおいし
いものを食べたときも同じ顔をするのでしょうか。

「離してください」

私は、赤ずきんです。

魔物さんに食べられるための、赤ずきんです。

村を守ってもらう代わりに、食べられる、赤ずきん、です。

だから、私は。

「あなたに食べられるわけには　いきませんっ！」

集めた魔素をそのまま力の限りぶつけました。反動で私も後ろに
飛ばされます。本当なら魔術として組み上げるものなのですが、そ
んな余裕はどこを探してもないので。痛みをこらえて立ち上がる
と、お客様は顔をしかめて私を見ていました。

「痛いじゃな　っ」

お客様が何かを言いかけたその瞬間、空から人が降ってきました。

お客様の、真上に。

高い所から人が落ちてきたとき、犠牲になるのは下の人なんだよ。
だから受け止める準備のない相手めがけて落ちてくるなんて絶対に

いけないことなんだよ、とすっかり木から落ちた時に下敷きにしてしまった先生から言われたことを思い出しました。

お客様、下敷きです。

「つつー、着地失敗したー。って、赤ずきんじゃん、やべ、大丈夫だったか？」

「全然大丈夫です」

むしろナイスです。

ぐつと親指を立てる私に、侵入者さんはキョトンと首を傾げました。

第16話 追いかけて、終了

「つて、あれ？ ファーじゃん」

侵入者さんは自分の下にいるお客様に気づき、あ、と私に目を向けてました。

「もしかして、お前ヤバかった？」

「はい」

かなりヤバかったです。

「やっぱファー、赤ずきんのこと狙ってたんだな。こいつカーティのことで頭いっぱいだから時々すげえ馬鹿になるんだ。お前を勝手に食ったらカーティに怒られるどころじゃすまないってことくらい考えればわかることなのにな」

侵入者さんはお客様の上からどくと、私の前にしゃがみこみました。

「つかさ、俺、お前担いでたよな。途中で気がついてさ、どっかに落としたかと思ってたんだけど」

「大丈夫です。親切な庭師さんに拾われました」

「そっかー、そりゃよかった」

がしがしと頭巾ごしに頭をなでられます。さっきまでちょっとした危機的状況だったのでとてもなごみます。

そんななごみの時間に剣呑過ぎる声が割り込んできました。

「ジーグーザーっ！ ようやく見つけたぞ、赤ずきんもっ、いい加減観念しろっ！」

狼さんの登場です。

いつも整えられた服装は皺だらけでところどころほつれています。さらさらの髪もぐちゃぐちゃで木の枝が絡まり、葉っぱも引っかかっています。いつもの紳士然とした面影はありません。でも、あの怒った顔は間違いなく狼さんです。なんだかほっとしてしまいます。狼さんはずかずかと近づいてきて侵入者さんを見下ろしました。

なんだかわくわくしてしまいます。狼さんのお説教を心待ちにする日が来るとは思いませんでした。胸を高鳴らせる私をよそに狼さんはおもむろに口を開き、そのまま閉じました。

ふと何かに気がついたように私の方をじつと見下ろしています。侵入者さんよりも私を怒るのが先ということでしょうか。いいです。受けて立ちます。私はもう逃げも隠れもしません。大人しく怒られます。逃げ回るよりもそっちのほうで絶対にマシだと学習したのです。何より今は狼さんに怒られたい気分なのです。

いつでもどうぞと構える私に狼さんは眉を寄せました。いかにも不機嫌そうな顔です。

「怪我をしているのか」

「……はい？」

怪我。そういえばしています。さきほどお客様に引っかかれたのもありますし、その前にも転んだり転んだり引っかけたり転んだりでわりと傷だらけです。でも舐めときや治るレベルです。

……さきほどお客様に舐められたことを思い出してしまいました。そういえば先生が、舐めて消毒するくらいなら清潔な水で洗った方がいい。口の中は決して清潔じゃないんだ。今日食べたものを思い返してみればわかると思うけど。せめて口を洗ってからにしない。悪化させないためにも、と以前怪我した時に言っていました。

とにかく、今はあんまり傷口舐めたくない気分です。ここは先生の言うとおり水で洗った方がいいのでしょうか。でもここに水はありません。

どうしようと考えた私を狼さんは顔をしかめたまま抱きあげました。今日はよく抱きあげられる日です。村ではこんなことほとんどされたことがないので、落ち着きませんがちょっと面白いです。「……とにかく手当て」

そのまま狼さんは歩きだします。狼さんの抱き方はお母さんが子供を抱き上げる抱き方にそっくりです。狼さんの首を回してぎゅつと抱きつきます。安心します。ドキドキします。不思議な感覚です。

が、なんだか嬉しくなりました。

「なー、カーティ。ファアはこのまま置いてくか？」

「……ファラ？」

狼さんはくりと振り返り、そしてビックリしました。心臓の鼓動がこつちまで伝わってきます。バクバクです。面白いです。

「ファラっ、いったい何が！？」

「俺の着地点になぜかいたんだ。なんで避けなかったんだろうな」「それはたぶん私に意識が集中してたからだと思います」

私と侵入者の言葉に狼さんはため息をつきました。

「とにかくこのままにしておくわけにはいかないだろう。ジグザ」侵入者さんは面倒くさそうに首を鳴らしてお客様を担ぎました。

お客様、お腹が苦しそうです。

「っーか、走りまわって腹減った」

私もです、と言おうとして狼さんの顔を窺います。お腹はすきました。久しぶりに魔力を使ったのでもう背中とお腹がくつつきそうです。本当にお腹すきました。ご飯食べたいです。

でも、今狼さんの機嫌を損ねたら下ろされてしまうかもしれないせん。

私は狼さんにぎゅう、と抱きつきました。

お腹がぐう、と鳴りました。

「……」

「……」

「……」

私は狼さんから身を離して顔を合わせます。

私のお腹はまたぐう、となりました。

「……わかった。わかった。食べてもいいからそんな泣きそうな顔で見ないでくれ」

侵入者さんの笑い声が耳に響きました。

第17話　ここがいい

屋敷に戻ると、メイドキャサリンが出迎えると同時に怪我の担当でと食事の用意とお風呂の準備はできております、とにつこり笑いしました。さすがメイドキャサリンです。

部屋に入り、椅子に下ろされると、メイドキャサリンが私の傷を丁寧に確認していきます。一つ一つ痛みがないかなど聞かれ、やさしく触られます。

一通り終わると、メイドキャサリンは様子を見守っていた狼さんに笑いかけました。

「今すぐ手当が必要な傷はないようなので、まず先にお風呂で泥などを流す方がよろしいかと思います」

改めて服を見ると、着たときはキラキラさらさらふわふわだったドレスはビリビリぼろぼろグチャグチャです。砂だらけ泥だらけです。でも、私を抱き上げている狼さんも似たようなことになっています。侵入者さんもです。

「俺も風呂入りたい」

「申し訳ありませんが、お風呂はひとつしかご用意できませんでした」

メイドキャサリンは侵入者さんに深々と頭を下げます。この屋敷にはお風呂がいくつかあるみたいなのですが、村ではお風呂があるのは村長さんの家だけでした。つくづく変です。

「じゃ、一緒に入るか」

「そうですね」

そうです。お風呂が二つも三つも四つもある必要はありません。みんないっぺんに入ってしまうばいいのです。ただでさえ、ここのお風呂は私がいっぱい入れそうなくらい広いのですから。

名案と私と侵入者さんがうなずき合うのをよそに、狼さんは私をメイドキャサリンに押し付けて侵入者さんの首根っこを掴んでどこ

かに行こうとします。

「おい、どこ行くんだよ。風呂はそっちじゃないだろ」

「当り前だ。女性と同じ風呂に入ろうだなんてよく言えるな君は」

「女性って、ガキだろうが。しかも人間だし。意識する方がおかしいって」

「なんと言われようと私の主義に反する。ところでファラはどうしたんだ」

「適当な部屋に寝かせてきた。あいつ頑丈だからすぐ回復するだろう、とちよつと体がこわばります。それに気づいたメイドキャサリンが視線を向けてきますが、なんでもありませんと首を振りしました。」

「すぐ回復する、ということは屋敷の中とはいえ油断は禁物ということです。次も侵入者さんが都合よく表れてくれるとは限らないのです。」

口を引き結ぶ私の頬を、いつの間にか近寄っていた侵入者さんが引っ張りました。

「……ひたひでふ」

「ガキのほっぺはよく伸びるな」

「何やってるんだ君は……」

面白がる侵入者さんと呆れる狼さん。そして見守るメイドキャサリン。緊張感が薄れます。

侵入者さんの手をぺちぺち叩いて抗議すると、侵入者さんは頬を引っ張ったまま私に顔を近づけました。

「大丈夫だから、安心しとけ」

ふへ、と言葉にならない声が漏れました。

無事お風呂と手当と晩御飯を済ませた後はもう寝るしかありません。

思いのほか手間取った手当と、疲れた晩御飯でした。

「赤ずきん本当によく食うな」

「侵入者さんもです」

「私に言わせれば二人とも食べすぎだ」

侵入者さんの食欲は私の陣地を侵さんばかりの勢いだったもので、思わず私も真剣になってしまいました。真剣になるあまりここ数日のマナー特訓が頭から抜けかけて二人揃って狼さんに怒られたり、とても疲れました

「赤ずきん、俺はジグザだつて」

「言うだけ無駄だ。私も何度注意したか」

食後のお茶をだらだら飲んで就寝時間です。

おやすみなさい、と解散して部屋に戻ります。部屋に戻ったら一人きりです。ちょっと気を引き締めて部屋に戻りボタンと扉を閉じれば侵入者さんと二人きりです。

あれ？

「じゃ、寝るか」

当たり前のように侵入者さんが言うのでよしとしました。侵入者さんはお客様と違って私を食べる気はないみたいなので、一人にいるよりも安心です。安全です。そういえばさっき言っていた大丈夫は、一緒に寝るから大丈夫ということだったのでしょうか。

ともかくさあ眠ろうと二人揃ってベットに足に向けた途端、今ボタンと閉じた扉がボタンと開かれました。

「ジグザッ！ 部屋は用意してやっただろうが！」

「赤ずきんがどうしても俺と一緒に寝たいって」

侵入者さんはいけしゃあしゃあと嘘を言いました。でも当たらずとも遠からずなので適当に頷いておきます。

「ほら、赤ずきんも頷いてるし」

「な……」

「合意の上なんだから問題ないだろ？」

「変な言い回しはやめてくれ。赤ずきん、なんでよりもよってこ

いつなんだ。一緒に寝たいならキヤサリンに頼みなさい。今はまだ気を失っているが、ファラでも……」

それだけは嫌です。

私はぶんぶん首を振りました。

「お前、人見る目ないよな」

侵入者さんの意見に全面同意です。

「何を言って」

「ともかく、赤ずきんは俺と一緒に寝たいって言ってるの。わかつたらさっさと出てけ。俺たちはもう眠い」

ふあ、とあくびをする侵入者さんにつられて私もあくびが出ました。

「しかし」

「なんだよ、カーティ。もしかして一緒に寝たいのか？ でもさすがに三人はな」

侵入者さんはベットを振り返り考え込みます。

「じゃ、俺が譲ってやるよ。仲良く寝ろよ、おやすみ」

これで万時解決、と侵入者さんは部屋を出て行きました。出て行く時、軽く私の頭をポンポンと叩いて行きました。これで大丈夫、というように。

そして、狼さんと私が残されました。狼さんはちよつと呆然と侵入者さんの後姿を見送っていましたが、はたと私とベットを見比べ、慌てて侵入者さんを追いかけて行こうします。

「私が言いたかったのはそういうことじゃ」

狼さんの言葉は途中で止まりました。私が力いっぱい狼さんに抱きついたからです。

「眠いです」

「あ、赤ずきん？」

「眠いです。一緒に寝てください」

一人じゃ、眠れないのです。今日は。

狼さんは驚いた顔で私を見下ろします。私は狼さんを見上げます。

じーっとじーっと見上げます。いや、でも、しかし、とか色々言っていたが、ひたすらじーっと見上げます。

「……わかった」

狼さんはため息をついて頷いてくれました。嬉しいです。勝利です。

一緒にベットに入って横になります。広い布団は相変わらず二人入っても余裕です。

狼さんにすり寄ります。あたたかいです。眠いです。

狼さんが一緒なら、たぶん安心です。

「今までこんなことなかったのに、いったいどうしたんだい」

狼さんは肘について私を見下ろします。

「……………」

お客様のことを言おうかと考えましたが、それよりも睡魔が勝ちました。

「赤ずきん？」

「おやすみなさいですー」

ほかほかします。幸せです。

いつか私が食べられて、誰かの血となり肉となるのなら、それはやっぱり狼さんがいいのです。

そんなことを思いながら、私は眠りにつきました。

そして少し懐かしい夢を見ました。

第18話 遊ぶ前に、お約束

はた、と目が覚めました。横に眠るは狼さん。すやすやと安らかな寝息を立てています。それはいいのです。それはいいのですが……なにやら鳥肌が。嫌な気配が嫌な予感が。むしろ殺気が……いえ、それともまた違うような、とにかく嫌な感じです。たぶん、あの方です。

「……………」

だらつと冷や汗が流れます。身動きをしないように、目と感覚だけで周囲を探ります。……この部屋の中ではありません。外、です。たぶん、扉の向こうです。

どうしてこの嫌な気配の中で狼さんは眠れるのでしょうか。理解に苦しみます。とにかくこつそりと狼さんの方に手を伸ばし。

「……………つぐえ」

拳を握って力いっぱいお腹のあたりを突きました。うまい具合に鳩尾に入ったようです。さすがに狼さんも目をパチリと開きました。

「あ、赤ずきん、何、を……」

狼さんが声を出すと同時に気配がぱつと消えました。なんという鮮やかさでしょう。とにかくほつと息を吐きました。

「ああ、最悪の目覚めでした」

「それは私の台詞だっ！」

朝早くから、狼さんは今日も元気いっぱいです。

お客様と一緒にのお食事をこわごわ終えて、侵入者さんとお茶をします。狼さんはお客様とどこかに行きました。狼さんが連れて行かれてさびしいような、お客様がいなくてうれしいような……複雑な気持ちです。乙女心は複雑というやつです。そう言ったらメイドキヤサリンがおいしいお菓子をたくさん用意してくれました。

はい、うれしさ120ぱーせんです。

「ああ、慣れつつ怖いよな」

一緒に食べている侵入者さんもご機嫌です。ついでに朝の話をすると、侵入者さんは笑いをこらえるような顔をしました。

「あいつ、すげえ小さいころからフアーに付け回されてるから、慣れちまつてるんだよ。最初こそ怯えてたけどな。あいつお坊ちゃまのくせに妙に順応性が高いから」

「はあ……」

私は慣れそうもないです。慣れるまであんな感覚を感じ続けるなんてごめんです。狼さんを図太い神経を尊敬します。……そういえば先生も時々怖い気配を出すことができました。

ああまつたく、危険を察知する能力を失った動物ほど愚かな生き物はいないね、その筆頭が人間だけど時々それを順応性と勘違いしている馬鹿がいて本当に困るよ。まあ君は違うと信じてるよ？ 本当に危ない気配と冗談も見分けられないような馬鹿が私の生徒だなんて……まさかそんなことあるはずないよね？

あまりにもはつきりとよみがえった記憶にみぶるいします。

そうです、そういえばそんな夢を今日見たのです。機嫌の悪い時の先生は本当に怖かったです。あれは確か村にどつかのお偉い人が来て先生のことを確か……田舎に引っこんでるなんとか魔法使いとか悪口を言ったのです。それで機嫌が悪かった先生が……いえ、もう思い出すのはやめましょう。夢の中のこと、もとい過去のことなのです。

「おい、赤ずきん顔が青くないか？ 今、フアーはいないから大丈夫だぞ？」

いえ、今恐れていたのはお客様ではないのですが。

「ま、あいつ、今日中に帰るはずだから今日さえ耐えれば安心だろ。つーかカーティが連れ出して……つーか連れ出されたおかげで顔合わせなくていいし、俺としても万々歳」

「侵入者さんもお客様が苦手なのですか？」

「口うるさいし、それに昨日あいつ失神させたの俺だし。怒られるの嫌だし、あいつと喧嘩しても楽しくないし。カーティと遊んでると時々睨んでくるし……俺はあのやな感じ、今だに慣れらんねー」
うんざりしたように溜息を吐く侵入者さんは、喋りながらもひよっぱくひよっぱくとお菓子を食べていきます。もちろん私も負けていません。そしてお菓子を補充するメイドキャサリンも負けていません。

「侵入者さんも狼さんもお客様も、知り合ってから長いんですか？」
「まー、お前の人生よりは遥かにな。つーか、ファーに関しては生まれたときからだし。姉弟だからな」

言われた言葉に侵入者の顔をまじまじと見つめてしまいます。
「……言われてみれば似ているような気がしなくもないような気がしなくもないような気が……」

「わけがわからん」

ちよつと混乱してしまいました。はい、確かにまじまじと見てみるとフラッシュバックする記憶と重なる部分があるようなようなようなあるようなないような……。

うっーん。納得できるようなできないような……。

「ま、あいつに関してはさっぱり理解できないけどな。ここ数十年は俺もあつちこつち行つててあんまり会ってないし、会つてもだいたいカーティ絡みだし」

狼さんと繋がる姉弟愛ですか。狼さん、愛されています。大人気です。

「んーしかし暇だ。腹も膨れたし、どっか遊びにいかないか？」

どっかと言われましても、私の行動範囲はこの屋敷の敷地内といちおう決められていた気がします。昨日の今日で狼さんを怒らせるのは得策ではないのです。

「屋敷の中を探検とかいかがでしょう」

私はまだ把握し切れていない場所がたくさんあるのです。でもうつかり一人で探検すると迷子になるのでついてきてもらえたりする

とラッキーです。

「屋敷内を？」

背もたれにもたれかかっていた体を身軽に起こし、侵入者の顔が近付いてきました。その目はとてもキラキラしています。

「いいな、面白そうだ。探検しようぜ、カーティの仕事部屋とかカーティの書斎とかカーティの寝室とか」

話しながらもどんどん顔が近付いてきます。侵入者は、本当に狼さんが大好きです。

「赤ずきん様、ジグザ様。お願いしたいことがあります」

控えていたメイドキャサリンが、今にもくつつきそうな私と侵入者さんの顔の間にクッキーのいっぱい入ったお皿を置きながら言いました。

「まず一つ、鍵のかかっている部屋には入らないこと」

その言葉に侵入者さんは顔をしかめて何か言いかけたがメイドキャサリンの「カーティ様はご自分の部屋に鍵を掛けません」という言葉にあっさり口を閉じました。

「そして二つ目、地下へは行かないこと」

メイドキャサリンは心配そうに私の顔を見ました。そして、少しのためらいの後、続けます。

「以前、赤ずきん様が入られたところです。あそこは、メリナス様カーティ様のお婆様の使ってらっしゃったお部屋で、その……とても危ないのです」

狼さんのお婆様　　ということは、もともと私を食べるはずだった方です。そして、以前私が入った部屋ということは……もしかして、夕食がクッキー1枚になったあの日に入った部屋でしょうか。もぐもぐとクッキーを食べながら思い出しました。1枚だけのクッキーは格別に美味しく、切なかったことをよく覚えているのです。

「……婆様の部屋」

侵入者さんはまるで噛み砕けない種入りの果物を口に入れてしまったときのような顔をしました。飲みこむこともできなくて、でも

吐きだすのももったいない。いつそ飲み込んでしまおうか、でもお腹から芽がでたらどうしよう……そのジレンマ、わかります。

「赤ずきん様には特に危ない部屋ですので　お願いします」

メイドキャサリンは侵入者さんに向かって頭を下げました。

「……わかった」

侵入者さんは珍しく真面目な顔をして頷きました。頭の上で交わされる会話。おいてけぼりです。寂しいです。

「わかりました！」

寂しかったので、シュタツと手を挙げて自己主張です。はい、私はメイドキャサリンを困らせるようなまねはしないのです。それに、自分の身はできる限り自分で守る努力をしなきゃいけないのです。

そんなことは、私みたいな小さな子供でも知っていることなのです。メイドキャサリンは安心したように微笑みました。

「では、最後に　お昼には、ちゃんと食堂までいらしてくださいね」

それはもちろんです。当然です。

私と侵入者さんは元氣よくメイドキャサリンに返事をして、さっそく屋敷内の探検を開始しました。

第19話 探検あんど搜索開始

侵入者さんは歩くのが早いです。ですから、私はちょっと小走りに後を追いかけます。もうちょっとゆっくり歩いてくださいと言おうかとも思ったのですが、また担がれそうな予感がしたのでやめました。あの苦しみと恐怖はこりごりです。

「最初はどこに行くのですか？」

「赤ずきんはいつ食事を止められるかわからないときに、まず何から食べる？」

「一番おいしそうで一番お腹いっぱいになりそうなのを食べます」

「そーゆーことだ。カーティたちがいつ帰って来るかわかんないしな。とりあえず、目当てのところだけでも探しとこうと思ってさ……」

「よし、カーティの寝室」

確かにベットがあります。クローゼットもあります。あと机と椅子もあります。本棚もあります。

「んー、一番怪しいのは……」

侵入者さんは本棚へ近づき、中の本を片っ端から取り出して行きます。何をしているのでしょうか。不思議に思いましたが「ほら、お前も」と言われとりあえず手の届く範囲の本を同じように取り出していきます。後で戻せばいいことです。

にしても本と言うのはかさばって重いです。私の届く場所にあるものは特に大きくて重くて分厚いものばかりだったので、ついつい床に下ろすのが面倒になってきてしまいます。

……えい。

「うおっ！」

ついには持つことすら放棄して本棚から引つ張り出したままその重さに運命を委ねてみたりしました。それを間一髪よける侵入者さん。素晴らしい反射神経です。

「あーかーずーきーんー」

ぐいと赤ずきんの上から頭を押さえこまれて怒られました。はい、了解です。次からは落ちる位置をちゃんと予測して落とします。

そして、下から二段目の本を取り出していると、奥に空間がある場所を見つけました。覗きこむと、なにやら飲み物が入っていいそうな瓶発見です。取り出してみます。

「お、見つけたか」

なんだかとても綺麗な青色です。瓶入りです。こんな色の飲み物見たことはありません。

私の手から瓶を取り上げた侵入者さんは、それを見てニヤリと笑いました。

「よくやった赤ずきん！ これすごい高いし、珍しいし、しかも美味いんだ」

「……そうなんですか？」

それはぜひとも飲みたいです。微かな匂いから察するに、飲んだことはないはずです。未知の味に期待です。

「あいつ食い物に関しては結構こだわりあるだろ？ 絶対、こんな風に隠してると思ったんだよ。台所とかは基本的にキャサリンの領地だしなー」

侵入者さんはウキウキとした様子で飲み物を取り出して、本を戻していきます。

「とりあえずこれは確保。で、他はなさそうか？」

「ちよっと待つてください」

おいしそうな飲み物ゲットで期待が高まります。全神経を集中します。自力で食料調達していたのは伊達ではないのです。さきほど昨日今日で狼さんを怒らせるのはダメと考えたような気がしなくてもないです。ですが、ごめんなさい狼さん。未知への期待には勝てません！

「あの引き出しです！」

ベットの横の机の引き出しから、なんとなく食べ物のある気配がするのです。飛びつくように引き出しを開けると、ちよっとした紙

とかペンの奥に小さな缶がありました。

手に持って見るとカラカラと音がします。開けようとして見ましたが、がっちりと固定されています。それもなんと、魔術で。

「……なんでしょうか」

「貸してみろ」

促されるままに侵入者に渡すと、侵入者はなんと力ずくでその缶を開けてしまいました。腕力だけで魔術を打ち破ってしまったようです。びっくりです。

それにしても勝手に開けてしまったのでしょいか。少なくとも私の常識では、魔術で封印されているものは開けるとひじょーに問題のあるものなのです。もしかしたら魔界では魔術で封印を施すのはごく普通のことなのかもしれませんけど。なにせ魔界ですし。

「……いいんでしょうか」

「いいんじゃない？ ほら」

開けた缶を手元に戻されると、小さな丸いものが入っていました。これが甘い匂いの正体のようです。見たことのない食べ物です。

食べたいです、と期待を込めて侵入者を見ると、侵入者さんはすでにその丸いものを口に入れたところでした。

「ん、食わないのか？」

もちろん食べるに決まっています。

口の中に入れると甘い味が広がります。でもちよつと固いです。ガリガリ噛み砕いていると、侵入者が笑いをこらえるような顔でじつと見つめてきました。

「お前、飴噛んでんのか？」

「あめ？」

「飴。今、食べてるやつ。これ噛むんじゃないで舐めるんだよ」

早く言っただけでした。

すでに粉みたいになってしまった飴を口の中で転がしますが、あっさりとなくなってしまいました。残念です。

「ほら、口開ける」

言われるがままに口を開けると、飴を放り込まれます。

「ほれ、二つ目」

また反射的に口を開けました。二つ目です。

「三つ目」

むぐ。

「んじゃ、四つ目」

「んー、んー、んー」

もう入りません。

バタバタと手を振ると、侵入さんはけらけらと笑いながら、手に持った四つ目となる予定だった飴を自分の口に入れました。ああ……。

もう入らなかったので仕方ないのですが、食べられてしまうと未練が募ります。

「お前、口ちっちゃいなー」

確かに、侵入者さんの口は大きそうで羨ましいです。開いた口から鋭く尖った歯が覗いて、ガリ、と飴を砕きました。

「あ、ぐ」

あ、と声を出しそうになって口から飴が飛び出しそうになりました。慌てて手で押さえて必死で舐めます。美味しいです。美味しいです。美味しいですけど…… 噛むものじゃないといった本人がなんで飴を噛んでるんですかと言いたいのですっ！

「ま、食い方なんて好きにすりゃいいんだよ。自分の好きなように食うのが一番うまい」

その意見には同意です。でも納得いきません。

「人生の先輩として、赤ずきんに正しいことを教えてやっただけ。

飴は噛むものじゃなくて舐めるものってのは本当だ」

「むぐ」

では、と思い噛もうとしますが、口の中が飴でいっぱいいっぱい、でうまく噛み碎けません。仕方なしにコロコロ転がします。

侵入者さんは缶の蓋を閉めて元の場所に戻し、そして先ほど見つけた瓶を手に取りました。

……あれ？

私は再び引き出しの中に戻されてしまった缶と、変わらず綺麗な青色の飲み物を交互に見つめます。

「もうなさそうだし、行くか」

持っていないんですか？ と缶のある場所を指差します。

「あー、あの飴玉はそんなに珍しいもんでもないし、腹の足しにもならないからな」

確かに腹の足しにはならなさそうです。でも、あるのとないのだがある方がいい気がします。

次に、飲み物を指差します。

「こっちは持つてくぞ。貴重だし、うまいし。それにしてもさすがカーティンって感じだよな。絶対つまみが置いてあると思ったのに飴しかないなんてさ」

つまみ？

何かひっかかる言葉です。つまみ、はい。おいしいです。先生がたまに食べていました。一度手を出したところ、丸一日食料調達の土、すべて没収という泣きたくなるような罰を受けました。忘れられない出来事です。でもなぜここでつまみが出てくるのでしょうか。聞きたいです。なのに口を開けようとすると飴玉がぼろっと落ちてしまいそうです。

いつになったら無くなるのでしょうか。ちょっと泣きそうです。

おいしいのは幸せです。口の中に食べ物があるのは幸せです。ただ疑問を口に出せなくて辛いです。

「おい、そろそろ時間がまずいし、さっさと出る」

『いやあああつ！ どこに連れてく気よっ！？』

「……………」

侵入者さんが無言で固まり、私に視線を落とします。私の手は私の口をしっかりと押さえています。はい、私の声ではありません。それに、私の声はこんなに『低く』ありません。

それに今、私は話せないのです、何も聞けないのです。

だから、どうしてその飲み物に先ほどまでなかったはずのものが

口が……いいえ、ぶるぶると震える唇がついているのですかと聞くこともできなかったのです。

第20話 ゲテモノは好き？

突然聞こえた声に、侵入者さんは慌てて辺りを見回しました。

「は、え、どこだ！？」

「そへでふ」

口を片手で押さえながら、瓶を指差します。

「え……はあ！？」

『ちよつと！ 見ないでよ痴漢っ！』

いつの間にか、その瓶には口がありました。プルプルとした、ピンク色の唇です。その上、聞こえてくる声は女性の口調みたいなのに、どう聞いても男性が無理をして高い声を出しているようにしか聞こえません。

ようやく気付いた侵入者さんは慌てて飲み物を手放そうとしましたが、途中で思い直してそつと床の上に置きなおしました。

たとえ呪われていても、いきなり話し始めても、飲み物は飲み物です。高くて珍しくて美味しい飲み物です。乱暴に扱って瓶が割れてしまつて飲めなくなつたら大変ですもんね。さすがは侵入者さんです。

私が侵入者さんの行動に感心している間にも、おかしい声は止まりません。

『あたしをどこに連れてく気！？ いくらあたしが魅力的だからってあんまりだわっ！ あたしは、ここのお部屋の素敵なお金持ちのご主人様に飲んでもらうのよっ！』

「……え、マジで！？ カーティ、ゲテモノ好きだったんだ」

てつきり、俺用のトラップかと思った、と侵入者さんは驚いた顔でつぶやきます。

『ゲテモノお！？ エレガントでビューティフルなあたしのどこがゲテモノなのよ！』

「自覚ないのか？ こんなに気持ち悪いのに」

『ふざけんじやないわよ!!』

話に参加できないので退屈になってコロコロコロコロと口の中の飴玉を一生懸命転がします。だいぶ小さくなったのですが、一個だけなかなかありません。

『ふんだ、あんたなんかご主人さまが来たらぼっこぼこにされちゃうんだから!』

「来たら……って、そうか。早いところ引き上げないと」

そうです。そろそろ私の腹時計がお昼の時間を告げています。お昼となると、狼さんとお客様が帰ってくるかもしれません。憂鬱です。

侵入者さんは、床に置いたままのゲテモノさんを眺めて、さてどうするかと悩み、「あきらめるか」と息を吐きました。

「こんなにいるさくて呪われた飲み物、どこにも隠せねーしな」

それは仕方ありません。

私はコクコク頷き、侵入者さんと一緒に扉へと向かいます。

『はん、もう手遅れよ! あたしが目を覚ました時点で、ご主人さまに伝わるんだから。きつとすぐに駆けつけてくれるわ……そう、あたしをあんたたちの手から救い出すために……!』

救い出すも何も、あきらめると侵入者さんは言っているのですが。ゲテモノさんが恍惚と叫んでいる間にも、私も侵入者さんもすたすたと距離を取りました。

『ちよつと、どこに行くのよっ!!』

ゲテモノさんの言葉を見殺しして、侵入者さんが扉を開け放ちます。そしてその瞬間、ガン! となにやら音が響きました。扉の向こう側で顔を抑えて悶絶しています。どうやら正面衝突してしまったようです。いつからいたのでしょうか。まったく気が付きませんでした。

「あ、カーティ」

『あ、ご主人さまっ!』

きゃあ、とゲテモノさんが歓声をあげました。

『あたしを助けに来てくれたのね!?!』

痛みに悶えていた狼さんの体が急にぴたっと動かなくなりました。かと思えば顔を覆う手を少しだけずらし、そーっと部屋の中を覗き込みます。

『あたしよ、来てくれるって信じてたわ!』

ピンクの唇が感動でプルプル震えています。

狼さんは素早い動きで扉の向こうに姿を隠しました。そしてびつくりするくらいきれいに気配を消します。でも、私と侵入者さんの目にはばつちり見えている上にゲテモノさんも狼さんに気づいているのでまるで意味がありません。

「おい、カーティ……」

「あれはなんだあれはなんだあれはなんだっ!?!」

狼さんは近づいた侵入者さんに押し殺した声で詰め寄ります。なんだか泣きそうな顔をしています。どうしたのでしょうか。

「いや、お前のだろ? お前が本棚の中に隠してた……」

狼さんは顔を思い切りひきつらせました。

「じゃ、じゃあ、あれはやっぱり……」

「なんだ、やっぱり心当たりあるんだな」

「あんな不気味な呪いだなんて知らなかったんだ!」

こそこそとドアの後ろで話す狼さんと侵入者さんに、ゲテモノさんは分厚い唇をとがらせました。

『ご主人さまあ、なんでそんな奴と仲良く話してるのよー! そいつ、あたしを盗もうとしたのよ?』

え、と狼さんは侵入者さんを見て、その肩をがっちり掴みました。

「あれをもらってくれるのか!?!」

「……………」

この上なく真剣な狼さんを、侵入者さんは無言で見つめました。そして、悩むなーと首を傾げます。

「どうしようかなー」

「頼むつ、私の部屋に勝手に入ったことも、物を持って行こうとしたことも見逃すから!!」

狼さん、必死です。そうする間も、ゲテモノさんを刺激しないようにか、ひそひそと声を小さくすることを忘れません。

『ご主人さまってばあ!』

ゲテモノさんの声が聞こえるたびにびくりと狼さんは体を震わせます。

「あんな変な呪いが掛かってるんじゃ、中身の味も変わってる気がするしー」

「大丈夫だ、それは買う時に問題ないことを確認してある」

「でも、わかんないだろ? それともお前が先に飲んで確認してみるか?」

狼さんはとんでもないと首を振りました。

「それにあの調子だと、お前が俺に譲ったって言っても納得しないでうるさく言ってきそうだし。解呪する方法はないのか?」

「解呪……」

狼さんはハッ、と部屋の方へと顔を向けました。

「そういえば……一緒に飴玉も付いてきて、これが解呪の鍵だとか言われたような……」

「飴玉?」

「ああ、だけど部屋の中で……寝台の横の机の引出しに入っているんだが」

部屋の中に入るなんてとんでもないと狼さんの顔が言っています。そんなにゲテモノさんが苦手なのでしょうか。

『もう、何話してるのよ!』

焦れたような声に、狼さんはますますドアに体をひつつけるように身を隠します。侵入者さんはそんな狼さんに、笑いをこらえるような顔をしました。

「引き出しに入ってたってことは、あの奥の方に入っていた缶入りの飴玉だよな」

「君たちはそこまで漁ったのか」

「漁ったな、しかもいくつか食べた」

君ね、と狼さんは顔をしかめながらも首を振ります。

「確か……飴玉といっても、それ自体は飴玉を模倣した魔力石らしいから、舐めても減らないし、君の牙でも砕けないはずだ。食べることでできたなら、それは違うものだろう」

「つまり、つまり本物の飴玉っていうダミーの中に、偽物の飴玉っていう本物の鍵がまぎれていたってわけか」

なるほどと頷く侵入者さんと、その通りという狼さん。そして考え込む私。

舐めても減らない。砕けない。はい、減りません。砕けません。ということとはもしかして。

私は狼さんの服の裾をくい、と引きました。

「ほれって、もひかひてこへでふか？」

私は口をあーん、と開けました。

「……………」

「……………」

沈黙が流れました。

「あー」

見えないのかとさらに大きく口を開ける私の顔を、狼さんがしつと掴み、叫びます。

「赤ずきん、君は、またっ、また変なものを口に入れてっ！！」

わざとではないのです。

「おい、そんな揺さぶって飲みこんだらどうするんだよ」

侵入者さんの静止で狼さんの動きがぴたと止まりますが、時すでに遅く、飴玉もどきは私の喉を通りかけていました。慌てて狼さんが私の背中を叩きますが、ごくりと飲み込んでしまったものは戻りません。

ようやく喋れない不便さから解放された私は、ちょっとごきげんです。狼さんにも素直に謝ります。

「ごめんなさい」

てへ。

狼さんはまるでこの世の終わりのように頂垂れました。

第21話 お酒は大人になってから

「で、どうするよ」

解呪の鍵である飴玉もどきが私のお腹の中に収まってしまったので、作戦会議を開始です。

「そもそも、鍵はどうやって使うものだったんだ？」

使用によつては私のお腹の中にあつても何となるのではと侵入さんが尋ねます。狼さんは目を閉じてうーんと考え込みました。

「……………思い出せない」

「お前なあ……………いつそ、本人に聞いてみるか？」

もしかしたら知ってるかも、と侵入さんが提案します。他に手も思いつきません。名案だと思います。賛成です、と手を挙げた私の横で、狼さんは顔を引きつらせました。

「誰が聞くんだ」

「お前以外の誰がいるんだよ」

「君も、赤ずきんもいるだろう」

「俺たちの話を、『あれ』が聞くと思うか？」

あれ、と指でさした先には、『いい加減無視すんのやめなさいよーっ!』と金切り声……………とは言えない雄たけびをあげるゲテモノさんがいます。とてもご機嫌斜めです。

「……………」

狼さんは絶対に嫌だと首を振りました。

「別にいいけどな。ここ、お前の部屋だし、俺達には別に問題ないし」

侵入者さんは本当にどうでもよさそうです。

「……………いつそ、この部屋ごと消滅させるか」

ぼつり、と狼さんが呟きました。

「おいおい、ここって婆様の形見でもあるんだろ、勝手にぶっ壊していいのか？」

「よくはない、よくはないが……あんな、あんな私の美意識に反するものが私の屋敷の中にあるなんて耐えられない……っ！」

狼さんは床をにらみます。屋敷ごとゲテモノさんを倒すか、本気で考えているようです。

……。

……。

……。

時々、ゲテモノさんの野次が入りつつも沈黙が続きます。狼さんはまだ考えています。考え込んでいます。はい。真剣に考えています。

はい、暇です。

狼さんの邪魔をしないように、侵入者さんに目を向けます。侵入者さんは眠そうに欠伸を噛み殺していましたが、私の視線にすぐに気付いてくれました。

そして侵入者さんは私の頬をむに、と掴みました。

「……」

私もぐに、と掴み返します。そうすると、もう一方もぐに、と掴まれたのでさらにむぎゅ、と掴みます。

「……」

痛いです。

「……君たちは何を遊んでいるんだ」

狼さんを待つていたのです。遊んでいたわけではありません。暇をつぶしていたのです。

狼さんの声と同時に私も侵入者さんもお互い手を外しました。ひりひりします。狼さんはなにやら腹を立てた様子で、侵入者さんに詰め寄りました。

「元と言えば君達が『あれ』を起こしたのが原因だろう！ 私以外の者が動かさなければ発動しない呪いだっただんだ！」

「そんでお前は何にも気づかずにくまいうまいて、『あれ』を飲むことになっただけだ」

狼さんは黙りこみました。

「感謝されてもいいと思うなー俺達。で、行くのか？ 行かないのか？ そろそろ昼飯食いに行きたいんだけど」

「……………」

狼さんは、きっと私がご飯抜きと言われた時にこんな顔をしたんだろうと思えるような顔をしました。でも、結局狼さんはご飯を食べさせてくれたのです。

私はよし、と覚悟を決めました。

「私が行ってきます」

「赤ずきん……………」

もしかしたら、飴玉もどきを飲みこんだ私が近付いたりすることで効果があるかもしれません。無断で狼さんの部屋に入ってしまったことへのごめんなさいも込めて、とりあえず挑戦してみることにしました。

「ダメもとでがんばります」

「ありがとうございます赤ずきん……………」

こんなに嬉しそうな狼さん、初めて見ました。ここで頑張れば狼さんが隠している他の食べ物を分けてくれるかも、とちょっと下心を持ってしまいます。ごめんなさい、私はいけない子です。でも美味しいものは大好きです。どんとこいです。

「では、行ってきます」

すたたたたた、と一気に部屋の中まで走りました。綺麗な青に染まる瓶に浮かぶ、ピンク色の唇がプルプル震えています。

『ふん、今更何の用よ！ さんざんあたしをのけ者にしておいて！』

ゲテモノさんはすっかりいじけていました。とにかく話を聞いてもらうことが先決です。

「ゲテモノさん、話を聞いてください！」

『誰がゲテモノよ！！』

あれ、ゲテモノさんじゃありませんでしたっけ。

部屋の外で侵入者さんが大笑いしているのが聞こえます。

『なによなによ、さつきからあたしをのけ者にしたあげく、ゲテモノ呼ばわりするなんて……あんまりだわっ!』

「すみません、ゲ、ではなく、えっと、もうそんな風に呼ばないの
で許してください」

『今更言つても遅いわよ!』

ますます怒ってしまわれたようです。でも私は諦めません。

それにしてもなぜゲテモノさんと呼ぶと怒るのでしょうか。村に
いたころ、トカゲや蛇を食べる私を見て、よくそんなゲテモノが食
べられるね、君からすればそれはゲテモノでもなんでもないので
うけど、他の人にもそれを求めてはいけないよ、特に私にはね、と
先生が顔をしかめていたことを思い出します。

ゲテモノと呼ばれるものは一般的に人から受け入れられないもの
です。嫌う人も多いでしょう。ですが、それなりに面白く美味しい
味をしているのです。勇気がいるのは最初の一口だけなのです。

さすがにプルプルとした唇にしか見えないゲテモノさんを食べる
いいえ、飲むのはいまだかつてないほどの勇気が必要になるか
もしれません。しかし、そういうところもゲテモノと呼ばれるもの
と同じです。

……どう考えてもぴつたりな名前にしか思えなくなってきました。
でも、ゲテモノさんが嫌なら仕方ありません。人……いえ、相手
が嫌がることをするのはいけないことなのです。はい。

「それに、のけ者にしていたわけではないですよ」

『嘘つき! あたしを一人にしてあんたたちだけでコソコソ喋って
たじゃない!』

「でも、ずっとみんなであなたのことを話していたんです」

ふと、そっぽ向いていた唇がこちらを向きます。え、という形に
開かれた唇が慌てたようにまたぷい、と横を向きました。

『え……ど、どうせあたしの悪口でも言ってたんでしょ?』

ちよっと怒ってる口調ではなくなった気がします。

脈ありです。もう一頑張りです。

「呪いを解いて、あなたを解放しようつてずっと話していたんです。本当です」

ゲテモノさんがびっくりして唇を開いたまま固まりました。

確かに、ちよつとゲテモノさんの呼びかけを無視したりしていましたが、それもこれもゲテモノさんをどうするかについてずっと話していたためです。はい、どこにも間違いはありません。真実です。

「……本、当？」

ゲテモノさんの唇がプルプル震えています。

「ご主人さま、あたしを解放してくれるの……？」

こちらの様子をつかがっていた狼さんは突然話を振られて体をビクつかせましたが、視線をあさつての方向に向けつつ「ああ、そうだ」となんとか返答しました。

「ああ……こんな、こんなことつて……」

声から抑えきれない喜びが伝わってきます。ゲテモノさんも、私も、みんなそれぞれが嬉しいことと思うことが一致するなんて、すごくすくいいことです。

はい、問題ありません。とてもいいことです。

「でもどうやって解けばいいのか分からなくて……わかりますか？」
ゲテモノさんは信じられない、とても言いたげに唇を閉じては開きを繰り返していましたが、ようやく意を決したように唇を開きました。

「封印の鍵になつてる、魔力石があるの、知つてる？」

「はい」

今現在私のお腹の中にあります。

「その魔力石に、このお酒を垂らすの。それで封印が解けるわ」
「……………」

魔力石に、お酒を、ですか。

そういえば、お酒だったんですね、この飲み物。先生にお酒は大人になつてから飲まないと背は伸びないし健康によくないしいいことないんだから、飲んではいけないよ、もし飲んだら最後の一滴

まで吐き出させるからそのつもりでいなさい、と言われたことを思い出します。

魔力石にお酒を垂らす、ということなら飲んでしまうのが一番手っ取り早いのですが……先生は有言実行の人でした。不言実行の人でもありました。とにかく一度言ったことは本当にやる人でした。うーん。

「皆様、どうかされたのですか？」

考え込んでいると、扉の方から声がかかりました。メイドキャサリンです。そういえばもうお昼の時間です。まさかお昼の時間を忘れてしまうなんて、自分で自分にビックリです。しかもメイドキャサリンと、お昼にはちゃんと食堂に行くと約束をしていたのに……一生の不覚です。

メイドキャサリンは扉の向こうの狼さんや侵入者さん、そして私最後にゲテモノさんに目を止め、こちらへ近づいてきました。

「ごめんなさい、約束を破ってしまいました……」

「お気になさらないください。仕方のない状況だったのでしょう……何か私に出来ることはありますか？」

よければ話してください、とメイドキャサリンは微笑みました。

説明を終えると、メイドキャサリンはお任せください、と言ってゲテモノさんを持ち上げて、踵を返しました。メイドキャサリンが扉の近くを通る時に狼さんの押し殺した悲鳴が聞こえました。

メイドキャサリンの後を追いかけてたどり着いた先は台所です。

「少々お待ちくださいね」

そう言っただけでゲテモノさんをコトリと置くと、メイドキャサリンはなにやら準備を始めました。辺りには既に出来上がっている料理の匂いがしています。うっとりです。

『状況がいまいち飲み込めないんだけど、どうなってるの？』

「実はですね」

かくかくしかじかと私のお腹の中に封印の鍵である魔力石があることを伝えました。馬鹿にされました。とても馬鹿にされました。ひどいです。

『じゃあ、あんたがぐいつとあたしを飲んでくれれば済む話じゃない！』

「そういうわけにもいかないのです。子供ですから」

子供はお酒を飲んではいけないのです。一滴たりともためなのです。

「大丈夫ですから、少々お待ちください」

お互いに唇を尖らせた私たちに、メイドキャサリンが笑いかけます。場の空気がなごみます。さすがメイドキャサリンです。

『……あのさ』

「はい、なんでしょうかゲテモノさん」

『だから、誰がゲテモノだったのよ！』

あれ、ゲテモノさんじゃありませんでしたっけ。そう言えばそう言っていた気がします。でも、それならなんと呼べばいいのでしょうか。

「……プルプルさん」

『なんか嫌。あんたネーミングセンスないのね。……ここで、名乗ればいいんだけど、あたし、名前ないのよ』

「そうなんですか？」

『あたしを作った悪魔が付けてくれなかったから。……ゲテモノとかプルプルじゃない、マシな名前を付けてくれるなら、あんたにまかせてもいいかなって思うんだけど……どう？』

照れたような口調で、プルプルさんでもゲテモノさんでもない唇が私の返事を待ちます。

もちろん、返事は決まっていますのです。

『ありがと……嬉しい。あたし、ようやく自分の名前が持てるのね』

そして私たちが無事に食事を終えた後、メイドキャサリンはデザートを持ってきました。

「カーティム様、一応確認しておきたいのですが、あのオルテールの呪を解いても本当によいのですね？」

「え…… ああ、もちろんだ」

オルテールとは、さきほどのお酒のことらしいです。食事しながら、狼さんの侵入者さんが話してくれました。なんでも、珍しい果物を漬けたお酒だそうで、漬け方も色々難しいそうです。私が見る限り果物が入っていなかったのですが、果物自体が目映らないだけで実は入っていたそうです。見つける難しさもさるものながら、あれほど綺麗な青色を出すためにはそうとう難しい技術が必要になるんだ、手に入れるのに苦労した、と狼さんがとても熱く語ってくれました。

そして、それなのに、と頂垂れていました。

「それでは、赤ずきん様、どうぞ」

ことり、と私だけの前に置かれたのは初めて見るデザートです。果物っぽいです。

「グラスのコンポートです」

よくわかりませんがおいしそうです。

「さきほどのお酒を使っています。アルコールは飛ばしてあるので、赤ずきん様でもお召し上がり頂けるかと」

さすがメイドキャサリンです。

「俺のはー？」

「召し上がられますか？」

「当然。カーティはいいのか？」

「…… 絶対いらない」

狼さんはげんなりと『こんぱーと』から目を反らしました。それにしても、この『こんぱーと』はおいしいです。幸せです。

うつとりゆっくり噛みしめて、おかわりを5杯ほど食べ終えたこ

ろ、メイドキャサリンはあの青いお酒を持ってきました。

その瓶の中身はほんの少しだけ減っていました。そして、そこにはもうあのプルプルと震える唇は あの方は、存在しませんでした。

第22話 呪いは解けた

食後のお茶の時間です。侵入者さんはご機嫌で狼さんにもらったお酒を撫でています。そしてそんな侵入者さんを、狼さんは距離を取って不気味そうに眺めています。

「よくそんな得体のしれない呪いのかかっていた酒を飲もうと思えるね」

「馬鹿だな、酒に罪はないんだよ」

お茶と一緒に出してもらったクッキーをかじりながら、私はあの方のことを考えていました。

「赤ずきん、ぼろぼろ欠片が落ちているじゃないか。行儀が悪い」
こんなときでも狼さんはマナーにうるさいです。でも、落とした欠片がもつたいないので、つまんで口に入れながら次から気をつけようと誓いました。

「こら、床に落としたものまで食べない！ ああもう、せっかく一度完璧にマナーを身につけたのに、ジグザが来てからまた悪化してるじゃないか」

狼さんは侵入者さんを睨みましたが、侵入者さんはお酒を眺めたまま聞き流しています。その瓶に張り付いていた唇を思い出し、うーんとまた考えます。

「……あの方は、どこに行ってしまったんでしょう」

考えても分からないことは聞くにかぎります。

「どこに行ったも何も……」

狼さんはふと、言葉を切りました。

「いや……そうだな、私たちにはもう会えない場所、かな」

「そうか？ そうとも限らないっていうか、その可能性は低いと思うけど」

どこかしんみりと狼さんが言ったのに対し、侵入者さんは笑いながら反対のことを言いました。

「いや、まあ、そうだな。逢えないとも限らないかもな」

狼さんはそんな侵入者さんに咎めるような視線を送り、珍しく食後だというのにクッキーに手を伸ばしました。まるで何かを誤魔化そうとしているかのように、「ああ、やっぱりキャサリンのクッキーは美味しい」と呟きます。

そして私の不思議そうな視線から逃れるように目をそらし、二枚目に口をつけた瞬間

ちゅ。

と、聞きなれない音が響きました。

よく見ると、クッキーから飛び出た分厚いピンクの唇が、狼さんの唇にくっついていきます。

「っ……!!」

「あ」

どうやらちゃんとここにいたようです。いきなり姿を消してしまったので、どこに行ったんだろうと考えてしまいました。

その分厚い唇から舌を出しぺろっと狼さんの唇を舐めました。

「う、うわーっ!!」

狼さんがクッキーを放り投げて悲鳴を上げます。私はしっかりとそのクッキーをキャッチしました。感動の再会です。

「よかった、また会えましたね」

「ええ、ありがとう。おかげであたしも封印から解放されて自由の身になれたわ!」

ふふ、と少し懐かしく感じる低く男性のものと思えない声に女性の口調。そして微笑む唇からは先ほどまでなかったはずの白い歯が覗いています。

「歯が、舌も……!!」

「ええ、封印が解けたおかげよ。力がみなぎってるわ……あなたには本当に感謝してる」

「そんな、私なんて何もしていません」

「うつん、お礼を言わせて。ありがとう……」

突然、ガタガタガタと音が響きました。狼さんが椅子を蹴飛ばし、つまづいた音のようです。いったい狼さんはどうしたというのでしょうか。それより今は、目の前の方に言わなければならないことがあるのです。

「あの、名前考えたんです。すごく考えたんです。あの　オルテ、はどうでしょうか」

『なによ、それ。まんまじゃない』

怒ったような言葉とは裏腹に、その口調はとても柔らかいです。

「でも、似てると思ったんです。オルテールは、見えない果物のお酒です。あなたも、本当の姿は見えない方です」

オルテさんを見ていればわかります。オルテさんの本体は私たちのように、ちゃんとした体ではないのです。魔力そのものがオルテさんなのです。そしてその魔力で魔素をほんの少し集めて、実体として目に見えるようになったのが私たちの見ているオルテさんなのです。

それは、オルテールにとってもよく似ていると思うのです。

「ダメでしょうか……」

『ダメなんて言っていない……気に入ったわ』

ちゅ、と私のほっぺたにオルテさんの唇が触れました。

『本当に、ありがとう』

嬉しくて顔が勝手に笑ってしまいます。笑い合う私たちの間に、がちやり、と何かが壊れた音が聞こえました。見ると、狼さんの近くの花瓶が倒れています。

あれ？　狼さん、いつの間にあんな所まで行ったのでしょうか。

まるで今にも部屋を出ようとしているかのようです。

私と、オルテさんの視線を感じたのか、狼さんがこちらを向きました。まるで信じられないものを見るような目をしています。

「な、な、なんで……」

狼さんは、壁際まで下がり、口を覆いながら言葉にならない声を漏らしています。顔から血の気が引いて真っ青です。

一方、侵入者さんも涙目でした。お腹を抱えてひーひーと笑いが止まらないようです。なにがそんなに楽しいのでしょうか。

「お、お前さ、解呪、勘違いしてたろ」

「え、あ、まさか」

狼さんは目を見開きました。

ところで、オルテさんという存在を魔力石とあのお酒に分けて魔術で封印し、一定条件のもとでしか行動できないようにしたのが、オルテさんにかけられた呪いの正体です。つまり、呪いを解くということはオルテさんの存在を解放することにほかなりません。意思あるものを封じ込めた呪いはそういうものだとして先生に習いました。だから、考えなしに解呪をしたりしてはいけないよ、その存在そのものを消せるわけじゃないんだから、面白いことになってしまいかもしれないからね、と。

ああ、今日は先生のことをよく思い出します。先生、私は先生が教えてくれたことをちゃんと覚えてましたよ。考えなしに解呪したりしませんでしたよ。

『ご主人様にも本当に感謝しているの。あたしを解放することを選んでくれて、本当にありがとう』

私の手の中から、オルテさんが声をあげました。

「い、いや」

狼さんは頬に汗をたらしながら、あらぬ方に向けて答えました。

『封印が解けて本当にうれしい……でもね、ご主人様に私を飲んでもらえなかったことが残念……ご主人様の口の中を通してその体の中まで入れたらどんな感じだったのかしら……』

う、と狼さんが口元を押さえます。

『うつん、でも、今からでもそれは遅くないわよね。自由になれたからこそ、今度は自分の意思であなたの中へ飛び込んでいきたいの！』

まるであの青いお酒のように青ざめた狼さんは、口元を押さえながらぶんぶんと首を振りしました。

そして、私は見ました。狼さんのちょうど耳元の辺りの壁からにゅ、と私の手の中にあるクッキーと同じようにオルテさんが現れるのを。

『だからお願い。あたしを』

耳元から聞こえるオルテさんの声に気づき、狼さんがひ、と固まりました。そんな狼さんを囲むように壁にぶわ、とオルテさんが増えました。

『あたしを　食・べ・て』

声にならない叫び声が、聞こえた気がしました。

第23話 ただいま80%オフ

「狼さん、狼さん、朝ごはんですよ」

「……………」

「狼さん、狼さん、お昼ごはんですよ」

「……………」

「狼さん、狼さん、おやつですよ」

「……………」

「狼さん、狼さん、晩ごはんですよ」

「……………」

「狼さん、狼さん…………… お願いですから、出てきてください」

「……………」

狼さんが寝室にひきこもってから、3日が経ちました。

「このままでは狼さんが餓死してしまいます」

「こいつを追い出せば済む話だろ」

『『『なんですって！　こんなかわいあたしを追い出そうっていうの！？　この薄情者！』』』

侵入者さんの座るソファ一杯に現れたオルテさんが一斉に叫びました。はい。このオルテさんが問題です。オルテさんを弁護したい

気持ちとは山々なのですが。

「でも狼さん、オルテさんを怖がって部屋から一步も出てきてくれないんです」

部屋中に魔力で支配した魔素を集めて、オルテさんが現れることのできないようにしているのです。たかが部屋一つ分とはいえ、その空間を飽和状態にするほどの魔素を集める魔力を放ち続けるなんて、かなりの重労働です。

しかも、それをおそらくは飲まず食わず、休みなしで行っているのです。

「お前、カーティを殺す気が」

「そ、そんなつもりはないわよっ！　っていつかあたしだって驚いてるんだからね、ご主人様にこんなに……奥手だなんてっ！」

「……は？」

オルテさんは、今日も絶好調です。

「ま、ちよつと焦りすぎたのは認めるわよ。……それにしても、キスしただけであたしと顔を合わせられなくなるなんて……キャッ、かわいい！」

うえ、と侵入者さんが口元を押さえました。

「その思考はポジティブを通り越して異常だろ」

「あら、嫉妬？　あーやだやだ見苦しいわね、ご主人様が私にメロメロきゅん（はーと）だからって」

「お前マジキモい」

「なんですって、あたしのどこがキモいっていうのよ！」

「嫌がられてることも分からない単細胞だわ、見た目は不気味だわ、叩いても叩いても消えないわで、最悪じゃねーか。台所にいる茶色い虫のほうはまだマシだ！」

「誰がよ！？」

「お前だよ！」

オルテさんは狼さんが大好きです。でも、狼さんはオルテさんが大の苦手になってしまったようです。なかなかうまくいかないもの

ですね。

人と人の関係ってというのは、難しいものだね……と疲れきった顔で時期村長のサティ様が言っていたことが思い出されます。ごく潰しが、身の程を知れ、とよく私に向かつて怒鳴っていた村長とは違って人間関係に板挟みになってしまいう優しい人でした。

「とにかく、狼さんにせめてご飯くらいは食べてもらいたいです」
食事は生きる基本です。

「待てよ、絶対こいつ追い出した方が早いつて。つか、食事よりも睡眠とつてないみたいだし、そっちの方がやばいだろ」

「え、でも私は3日くらいなら寝なくてもなんとか耐えますけど、3日ご飯を食べられなかったら……」

……生きる希望を失いそうです。きつと絶望と渴望に気が狂います。

「いや、そんな暗い顔すんなよ。まーでも確かに、こいつを追い出す方法が屋敷をぶっ壊す以外に俺に思いつけない以上、そっちの方が手っ取り早いかな」

どこかで聞いたことがあるような計画です。オルテさんとともに私も狼さんもメイドキャサリンも侵入者さん自身も追い出されちゃう計画です。

あ、でもそうですよ。狼さんも出てくることになるわけで……ひよっとして名案では。

「いくらなんでも婆さんの遺産のこの屋敷をぶっ壊すわけにもいかないしな」

それは残念です。

「でもどうしましょう。普通の食事だと、オルテさんを警戒して食べられないのです」

それは、すでに数回試し済みです。もちろん狼さんが食べてくれなかった食事は、最初は私の胃に、次は、侵入者さんの胃に、そしてその次は私の胃に……というように無駄にはなることはありませんでした。しかし、満足感とともに、寂しさがこみ上げてきました。

どれだけ行儀が悪くても、狼さんが怒鳴りつけてくることも、ナプキンを投げてくることも、肩を落とすこともない……侵入者さんとひそかに争うだけの食事は、狼さんというスパイスがなくほんのちよっぴりさびしくて……そう、200%中80%オフ！ という感じなのです。

ちなみに、メイドキャサリンのご飯をお腹いっぱい食べれることができるという時点で120%は確実にくりあーです。

「みなさま、お茶の準備ができました」

噂をすればメイドキャサリンの美味しいクッキーの匂いです。いつも通りにてきはきとテーブルに並べられます。おいしそうです。並べられたティーカップは二人分、オルテさんは基本的に飲み食いをしないので、私と侵入者さんの分だけです。狼さんの分が並べられていないこの光景を見慣れつつあります。

「あの、狼さんの分は？」

「これをお召し上がりになられたら持つてまいりますので……」
はい、と元気よく手を挙げました。

「今回も行きます」

狼さんがご飯を食べなくなつてからの日課？です。メイドキャサリンにくつついて狼さんにご飯の素晴らしさを説きにいくのです。今日こそは食べてもらえるように頑張ります！

「キャサリン、今回は俺も行くから」

初めて侵入者さんが同行を申し出ました。

「オルテのこと見張つといてくれ」

『ちょ、行かないわよ！ ご主人様が飢え死にしちゃうのは私だつて本意じゃないわ！』

「どうだか……」

オルテさんは増えますが、増えることのできる範囲は限定されるのです。つまり、今この部屋にオルテさんが100人くらいいいようと、1人しかいなかろうと、オルテさんが現れることができるのはこの部屋の近くだけであつて、ちよつと離れている狼さんの部屋に

は現れることができないのです。

とはいえ、オルテさんは神出鬼没です。オルテさんがその気になればオルテさんに触れることすら空気をつかむように難しいことなのです。それなのに見張っていても何の意味もないように思えますが、そこは侵入者さんの一言。

「お前、この部屋から離れたらどっかの悪魔に頼んで消滅させるかな」

『はいはい、分かってるわよ！』

どっかの悪魔さんになら、オルテさんを消滅させることは簡単らしいです。オルテさんを作った方も悪魔さんのようですし、いったい悪魔さんはどんな能力を持っているのでしょうか。ちょっと興味をそそられます。

「侵入者さん、そろそろ行きましょうか」

2人が口論してる間に、クッキーの最後の一枚を食べ終えました。お茶を飲み終え、準備万端です。

「……おい、赤ずきん、お前俺の分のクッキーも食べただろ。あと、俺はジグザだ」

オルテさんと口論しながらも絶妙のタイミングで口に運んでいたかと思えば数までカウントしてらっしゃったようです。意外とみみっちいです、侵入者さん。

「食べましたね」

嘘はついちゃいけないので正直に答えるとげんこつを頭に押しつけられて、ぐり、ぐり、ぐりとねじこむように動かされました。痛いです。

頭を抱えて痛みに耐える私をいつかのよつに持ち上げ、侵入者さんは台所へ向かいました。

第24話 ひらめいた！

私たちの分とは別にされていた狼さん用のお茶とお菓子の載ったお盆をえいや、と持ち上げました。ぐらり、とふらつきました。思った以上に重いです。

なんとか持ち直そうと足を踏ん張った途端、重さが消えました。踏ん張った分の力が余ってそのままの勢いで倒れこみそうになりましたが、背中を支えられて持ち直しました。

見上げれば侵入者さんが片手で私を支え、片手で私が持ち上げていたはずのお盆を軽々と持っていました。

「危ないから、お前は持つのはやめとけ」

でも、狼さんのもとにお茶とお菓子を運びたいのです。

むう、と唇を突きだして手を出すと、侵入者さんは少しの間の後、私の手をぎゅ、と握りました。

「違います！ 手をつないでほしいんじゃないんです！」

「えー、だってお前渡したら割りそうだし、俺の手で我慢しとけよ」
つないだ手の暖かさに惑わされたりしません！

「私が運ぶんですー！」

ふさがってない方の手でも要求すると、侵入者さんはちよつと考えてから私の手を放し、お盆の上からクッキーの載ったお皿を私に差し出しました。

「これだけ持つとけ。ティーポットとかはよりは危なくないし」

「ありがとうございます」

美味しそうな匂いにたたり、と口元からなにやら消化を促す液体がこぼれそうになりますが、我慢我慢。これは狼さんに運ぶクッキーです。

でも……食べてくれるでしょうか。

ただ持つて行ってもきつと食べてくれないでしょう。今の狼さんは怯えるあまり、疑いの心が強くなっているのです。

「扉をぶち破って、無理やり口にいれるか……でも死ぬ気で吐き出しそうな気がする」

「同感です」

侵入者さんと一緒に悩みながら言葉少なく歩いているうちに狼さんの寝室に到着です。

まずは侵入者さんがコン、コン、コン、とノックをしました。

「おい、カーティ！ 食え！」

簡潔です。

「……………」

対する狼さん、無言です。

「狼さん、美味しいクッキーですよ」

見えないことを承知で、高く掲げます。ついでにドアと壁の間の、向こう側が見えないほどしかない隙間に近寄ります。ちよつとでもこの素晴らしい匂いが届けと願いを込めて。

「……………」

ダメです。狼さん、無言です。

「このクッキー、とても美味しいです。サクとした食感もほのかな甘みもいつも通り完璧ですが、今回はさらになんと、ちよつと酸っぱめも果物が練り込まれているんです。酸っぱさと甘さが絶妙なバランスで、もはやこれは神技と言っても過言ではありません。お茶も狼さんが好きだと言っていた……名前は忘れちゃいましたが、とても手に入れるのに苦労すると言っていた一品をキャサリンが頑張って仕入れてきてくれたのです」

「……………」

「お茶が冷めちゃいますよ、これを冷めるまで放置するなんて、美味しいものへの冒瀆です！」

「どうせ……………」

暗い、としか表現できないとても憂鬱そうな声が聞こえてきました。間違いありません、3日ぶりの狼さんの声です。

「どうせ、そのクッキーも、お茶も、あの化け物のお手付きなんだ

ろ……」

「違います！ オルテさんに手はありません！」

「赤ずきん、否定するポイントが違っただろ、それは……」

侵入者さんの言葉に、これじゃあ根本的に否定になってないことに気が付きました。慌ててオルテさんにはずっと別室にいてもらったことを伝えましたが狼さんは再びうんともすんとも言わなくなっていました。失敗です。

「……狼さんー」

無言です。

「狼さん、出てきてくださいよ……狼さん」

無言です。無視です。

……ちよつと泣きそうです。

「ふえっ……つく」

「……え」

扉の向こうから、ちよつとだけ狼さんの声が聞こえました。でも、やっぱり何も言ってくれません。

ますますこみ上げてくる涙をこらえようと頑張っていると、侵入者さんが私の耳元で囁きました。

「赤ずきん、その調子だ。もつと泣け。カーティは女の涙に弱いから出てくるかも」

お前、一応は女だし。と、侵入者さんから泣くことを応援されてしまいました。むう、一応ではなく立派に可愛い女の子です。なんだか失礼です。

と、こんなことを考えていると涙が完全に引っ込んでしまいます。何か悲しいことでも思い浮かべなければ。悲しいこと悲しいこと悲しいこと……お腹がすくのは、とても悲しいです。

そういえば、狼さんきつとお腹がすいています。お腹が空いているととても切ない気持ちになります。生きることを放棄してるも同然だから、そうなるのでしょうか。きっとそうです、だって食べないと死んでしまうのです。

狼さんもこのままだと死んでしまいます。餓死です。きっと辛くて苦しいです。私は狼さんには幸せでいてほしいです。私に幸せを沢山くれたから。そんな狼さんが辛くて苦しい思いをして、死んでしまうかと思うと、いなくなってしまうかと思うと、悲しいです。

「う……うー……ひつく……うえ」

よしその調子だと侵入者さんが拳を握りしめて無言で応援してくれます。でもそれどころじゃありません。どんどん悲しい気持ちになっってきました。そろそろマジ泣きそうです。

このまま狼さんが出てこないで餓死してしまったら、いったいどうしましょう。私はどうすればいいのでしょうか。狼さんがいなくなるなんて嫌です。それに狼さんがいなくなったら私がここにいる意味がありません。しかもそんなことになったら村が。

……とまで考えて 名案を思い付きました！

涙をぬぐって、もう一度狼さんのドアを叩きます。

「狼さん、狼さん、オルテさんが絶対に取りついてないものがあります、食べて下さい！」

「……………な、なんだ」

戸惑ったような狼さんの返答がありました。私の横にいる侵入者さんも口を開きます。

「絶対って、そんなのあるのか？」

「はい、私です！」

侵入者さんが虚を突かれたように固まりました。こころなし、扉の向こうからも凍りついたな空気を感じます。

そうでしょう、思いつかなかったでしょう、何を隠そう、私もたった今気が付いたばかりです。お二人が気が付かなかったことに気が付いたことにちよつと得意になってしまいます。

ここ数日忘れかけていましたが、私は狼さんに食べられるためにここにいるのですし、狼さんが亡くなってしまうたら村が大変です。ここは अच्छو、がぶりとやってもらう場面ではないでしょうか。

ときどきと高なる胸を抑えつつ今度こそと不安と期待を込めてド

アを見上げていると、扉の向こうから固い声が聞こえてきました。

「…………断る」

「え…………」

断られてしまいました。名案だと思ったのに、これ以上ないほどの名案だと思ったのに…………。

うなだれると、侵入者さんの手が降ってきて頭に置かれました。

慰めてくれているようです。でもごめんなさい、自分で言っておきながらちよっぴり…………ほんの、ほんのちよっぴりですよ。ちよっぴりですけど　　安心しててもかもしれません。

「赤ずきん、お前って本当によくわからない奴だけど、それはアリだわ」

「ジグザ」

相変わらず固い調子の声が部屋から聞こえました。

「安心しろ、カーティ。別にこいつを食べるっていうわけじゃない思い出したんだよ。ああいう実体をもつ憑依型は生きているものには取りつけないってことを」

そうです。生きとし生けるものはすべからく大なり小なり魔力を持っています。魔力は周囲の魔素を引きつけ、自分の身を守るために使われるのです。それを意図的に行うことができるのが魔物と、そして魔力を操る能力を身につけた人間　魔法使いなのです。

なのに、魔法使いのことを魔物だなんだと言う無知な愚か者は頭蓋骨をはがして正しい知識を脳みそに直接教えこみなくなるね、とは村に立ち寄ったちよつと無謀すぎる旅人さんにお仕置きしながらの先生の言葉です。

オルテさんが魔力を持った存在に取りつけば、おそらくその方の持つ魔力によってオルテさんは存在するための魔素がコントロールできなくなるでしょう。ですから、生きているものにオルテさんが取りつくことは不可能なのです。

侵入者さんはドアの横に持っていたお盆を置きました。そして私の持っていたクッキーのお皿も載せて、そのまま私に向かって背を

向けてしゃがみ込みました。

このポーズは……あ、思い出しました。おんぶです。

そういえば、前におんぶをしてもらったのはいつでしょう。庭師さんに肩車をしてもらったことは記憶に新しいですが、おんぶはとも久しぶりな気がします。おぶさってもいいのでしょうか、おぶさりたくなってきました。ちよつとドキドキです。

じっと見ていると侵入者さんが「ほら」と促すように声を掛けてくれたので遠慮なくえいや、とおぶさりました。侵入者さんが立ち上がると視界がぐん、と上がります。お腹も苦しくなくて快適です。楽しいです。

「カーティ、赤ずきん連れてちよつと出掛けてくるわ。お前でも食えるものとなってきてやるから、楽しみに待ってる」

「おい、ちよつと待」

狼さんが何やら言い掛けたようですが、侵入者さんは無視して窓を開け放ち飛びだしました。

ちなみにここは3階です。

浮遊感を感じながら、私はもしかして選択を間違えたのかもしれないと思いました。でも、次の瞬間にはもう景色が飛ぶように過ぎ去って見覚えのない場所にいたので、気にしないことにしました。過去は振り返らない主義なのです。

第25話 大人の事情

外に出てはいけない　そう言われた記憶が確かにあります。
でも、私は今、明らかに狼さんのお家の外にいます。

「あの、侵入者さん」

「ジグザナ」

「ここは、どこでしょうか」

見渡す限りの密林です。快適な温度の保たれていた狼さんの家とは違って、蒸し暑いです。

「どこって……さあ？」

侵入者さんは、首をかしげました。

「カーティの家から全速力でちよつと走ったところ？」

あまりにもそのまま過ぎます。来る途中、もつと周囲を確認しておくべきでした。侵入者さんの走る早さに目を回してしまうなんて、不覚です。

「何をしにここに来たんですか？」

「言っただろ、カーティに食わせるもの捕りに来たんだよ。確か、このあたりにいたはずなんだ　ゲドマドラドナが」

ゲドラドナド…ええと。

「すみません、もう一回お願いします」

「ゲドマドラドナを捕りに来たんだよ。一回でわからないのか？　赤ずきさんは馬鹿だなあ」

馬鹿じゃありません。馬鹿は自分で自分のことを馬鹿だと思った瞬間に真性の馬鹿になるんだって、先生が言っていました。だからって、馬鹿じゃないかと思ひこんでる奴はもつと馬鹿だけど……って、あれ、どっちにしても馬鹿なのでしょうか？

私が首をひねっている間にも侵入さんはすたすたと歩き出してしまいまうので、私は頑張つて跡を追います。

サバイバル能力にはちよつとした自信があったのですが、さすが

にどこを見渡しても毒だらけの魔界でサバイバルしていく自信はありません。おいて行かれたら多分帰れません。私はまだ、死にたくはないのです。今日もメイドキャサリンの作る晩御飯を食べたいのです。

「ゲドマドラドナは、お前の指から俺の指くらいの大きさの魚だ。結構前、あれを踊り食いするのが流行ってた気がする」

踊り食い　つまり、生きているものをそのまま口に入れる、ということですよ。お腹の中で暴られる感覚は何ともいえず不思議でした。先生に、子供は食べ物をよく噛んで飲み込まないといけないと注意されてからはすっかり噛んでから飲み込んでいます。でも狼さんは大人なので飲み込むのも噛むのも自由自在です！

「なるほど、それならオルテさんの心配がないですね！」

「そういうこと」

すごいです、と拍手すると侵入者さんはやり、と笑いました。

わー、悪者っぽいです。

「ただ、ゲドマドラドナの生息地には厄介なのがいてな」

「厄介？」

「ゲドマドラドナを主食にしてる『沼地の人魚』だ」

人魚、聞いたことがあります。むしろ、絵でなら見たことがあります。村長さんの家の本棚の奥にこっそりと並んでいた魔界生き物図鑑に載っていました。上半身裸で、下半身が魚の女の人の形をしていました。先生に、なんで上半身は人間なのに服を着てないのですか、と聞いたら、大人の事情です、と言われたことを思い出します。

「大人の事情で、服が着れないんですよね」

「は？ いや、服は確かに着てないが大人の事情とかいうわけの分かんないものは関係ないと思う……」

あれ、先生でも間違っているのでしょうか。珍しいです。

侵入者さんが足を止めたそこは、大きな沼の前でした。いかにもドロツとしていそうです。雰囲気的に底なしと見ました。

「いきなり出るてくるから気を付けるよ」

侵入者さんはそう注意しながらも気を付けるそぶりもなく沼に近づきました。私も恐る恐る近づくと、意外とドロツとしていないことが分かりました。底の方はドロツとしていますが、水面近くは魚を見ることが出来る程度に澄んでいます。

「……美味しそうです」

「魔界の生き物は毒を持つてるやつの方が多いんだからむやみに食うなよ」

残念です。

「つと、見つけた」

侵入者さんが目にもとまらぬ速さで水面をけると、その勢いで魚が数匹地面に落ちました。お見事です。

「いいか、赤ずきん。この斑なのは触ると痺れる。この黄色いのは触ると毒がまわる。この線が入っているのは食うと死ぬ」

魔界にはこんな物騒な魚しかいないのでしょうか。

「で、この目の周りが白くて全体的に透明なのがゲドマドラドナだ。食える。ただ、死んだら腐るのが早くて腐ったのを食うとだいたい死ぬ」

なるほど、踊り食いなら腐る前に食べられるというわけですね。

「覚えました。頑張ります」

「頑張らなくていいから、俺が捕った魚をなんとか生け捕りにしてまとめといてくれ」

生け捕り？

そういえば確かに生け捕りじゃないと意味ないです。でも。

「えと、どうやってですか？」

魚を生きたまま持ち帰るにはバケツとか水を入れられる容器が必要なのですが。

首をかしげて侵入者さんを見上げると、侵入者さんは空を見上げ

ました。

「……そういえば、どうしような」
考えていなかったようです。

「ここは一度戻ってなにかバケツっぽいものを持ってきた方がいいのではないだろうか」

「でも面倒だしなあ……」

とはいえ、手づかみで持って帰っても魚がちゃんと生きているかは怪しいと思うのです。

「仕方ないか……」

侵入者さんが沼地に背を向けました。どうやら私の意見を採用してもらえるようです。ちよつと迷ってゲドマドラド……ラ？を手で掴みました。一応持つて帰ってみて、生きていたら水で洗って食べようと思ったのです。

そして、侵入者さんのそばへ行こうと振り返ったその時でした

沼からソレが現れたのは。

「あつ……！」

危ないと、声をかける間もありませんでした。侵入者さんよりも2倍はありそうな大きさの巨大なトカゲ？らしき生き物が、鋭い牙をむき出して侵入者さんに襲い掛かったのです。

そして。

文字通り、あつ……！つと言う間でした。まさしく瞬殺でした。

沼から現れた、巨大なトカゲに似た生き物は現れた次の習慣には侵入者さんによつて倒れていました。沼に浮かんだ白い腹からは、トカゲよりもずいぶんの人のものに似た手足がついています。

「人魚だな。やっぱり出たか」

「え、こちらが人魚さんなんですか！？」

私の知っている人魚さんとは親戚とすら思えません。

「……女の人っぽくないです」

「は？ いや、雌か雄かなんて知らねーけど、つてまた！」

続いて二匹目の登場です。今度は先ほどの人魚？よりも大分大き

いです。それなりに大きな沼だとは思いますが、こんなに大きい体では狭くないのでしょうか。それとも、底なしだからそれなりのスペースがあるのでしょうか。

「あー、もう、うぜえ！」

侵入者が顔をしかめながら応戦します。私には見えない速さの拳や蹴りでダメージを与えていきます。今までの侵入者さんと行動で予想は付いていましたが、肉弾戦が得意なようです。いかにも狼さんは苦手そうです。

派手な水音とともに二匹目が倒れました。咄嗟に魔素を集めて壁を作ります。沼の水の匂いはあまりよくありません。服に着いてしまつと困ります。ついでに、しぶきとともに飛んできた毒もちの魚もはじきます。毒に触れるのはもっとよくありません。

ちなみに戦っていた侵入者さんはもろにしぶきを浴びてしまったようで頭のとっぺんからつま先までちよつと沼色に染まっています。「……ちくしょう」

侵入者さんはいらだち紛れに人魚さん2号のお腹を力いっぱい蹴りつけました。あまりの勢いに沼近くの氣に叩きつけられた人魚さん2号から、おそらく人魚さん2号が食べていたでしょう、見覚えのある魚がビチビチと飛び出してきました。どうやら丸呑み派みたいですね。まだ消化されていなかったようで動いています。

これは。

「侵入者さん、私、名案を思い付きました」

沼色に染まつた服を脱ぎながら、侵入者さんが私の方を見ました。

第26話 そしてまた

コンコンコン！

「ただいま帰りました、狼さん！」

元氣よく、帰りましたの挨拶です。ここ数日部屋に閉じこもっていた狼さんですが、今日ばかりは私をちゃんと迎えてくれました。

「なんで窓から来るんだ！」

「それより狼さん、来てください。狼さんに食べられる物を捕ってきたのです」

「……食べられるもの？ それよりも赤ずきん、臭うぞ」

侵入者さんに運ばれる以外の移動手段がなかったので、仕方ないのです。服がちよつと汚れたことについてはメイドキャサリンに心をこめて謝罪する所存なのです。

それよりも。

「いいから来てくださいー」

ぐいぐいと狼さんの腕を引きます。狼さんは部屋から出ることを躊躇っていたようですが、素直に出てきてくれました。

「来て、ってどこに　こ、この悪臭は……」

風に乗る臭いに気付いたのでしょうか。狼さんの顔が歪みました。

「……赤ずきん、なにをとってきた」

「オルテの心配がない食材です！」

「沼地の匂いがするんだが……」

「洗う場所がなかったのです」

てへ、ちよつと失敗です。と笑うと狼さんの顔が引きつりだしました。

「まさか」

またたく間に地上に降り立つ狼さん、素早すぎます。私はそんなに急げません。

バルコニーから身を乗り出し、排水管やら窓枠のでっぱりやらを

辿ってようやく地上に辿りついた頃、狼さんの絶叫が聞こえてきました。

お風呂に入ってすっきりさっぱりです。

「まだ沼臭さが取れていない気がする……」

「気のせいだつて」

私が到着したとき、狼さんは人魚さんを頭からずっぽりと被っていました。まるで狼さんが人魚さんに食べられたかのような光景でしたが、すぐに狼さんは人魚さんのお腹を破って出てきました。

そしてその結果、色々なものにまみれる結果となつたわけです。

「にしてもなんで食わないんだよ。もうそろそろ腐り始めてるぞ」

「僕は美食家であつて、珍味好きじゃない！」

ドラドラなんとかは珍味だつたようです。

「狼さんが食べないなら私が」

「食べるな！」

「だって、狼さんが食べないんだつたら私が食べないともつたいないじゃないですか」

珍味、バッチコイです。

「だからって泥にまみれた腐りかけてるかもしれないものを食べようと考えるんじゃない！ 魔物が食べて平気なものでも君が大丈夫とは限らないんだ！ ああもう……頭が痛い」

むう、確かに。お腹は丈夫なほうだと自負していますが、あれだけ毒のある魚のいた沼の泥です。確かに、私の内臓も耐えきれないかもしれません。

我慢です。

「カーティ、まるで赤ずきんの母親みたいだ。保護者さんは大変だなあ」

うなだれる私の横で、侵入者さんがけらけらと笑い出しました。

「他人事のように……それというのもジグザ、君のせいなんだぞ！」

「いやいや待てよ、俺はカーティのことを思ってたな」

狼さんと侵入者さんが話しこみ始めたので、のんびりごろんとソファに転がります。

「こら、だらしない格好をするんじゃない！」

狼さん、目ざとく注意してきます。でも、元気になったようでないようです。メイドキャサリンが説得してくれたのかオルテさんも姿を見せませんし、久しぶりにゆったりとした空気が流れてします。疲れもあつてうとうとしてきました。

眠いです……はっ、今ちよつと寝てました。いや、寝ません。久しぶりの狼さんです。それにまだ夕食も食べてないんです。寝るなんてそんなもつたないことをするわけには。

「赤ずきん、眠いのか？」

「寝るならちゃんとベットに行きなさい。風邪をひいたらどうするんだ」

だつて、体が重くて、動かないのです。

「赤ずきん様、どうかなさったのですか？」

「いや、眠ってしまったているようだ。キャサリン、毛布を」

「はい、ただ今」

「にしても、寝入るの早いなー」

侵入者さんに、言われたくないのです……。

ふわつとした感触で体を包まれました。毛布です。気持ちよさ倍増です。ますます眠りの国へれつつごーです。

「ご苦労、キャサリン」

「いえ、それよりもジグザ様、赤ずきん様を、外にお連れになったのですよね」

「ああ、連れてったけど」

「どこか様子がおかしかったり、辛そうだったりしませんでしたか？」

「赤ずきんが？ いや、そんなことはなかったけど、どうしてだ？」
「ないならよいのですが……赤ずきん様は人間でいらっしやいます」

し、その、魔界の毒気に当てられていないかと」

「その心配はもつともだ。ジグザ、本当に何もなかったんだろぅな？」

「なかった、と、思う。そうか、赤ずきん人間だもんな。忘れてたなんか、あんまり人間って気がしなくて」

「………侵入者さんは、ボケがはじまっているに違いありません。私は、人間です。」

「君は赤ずきんと仲良くしているからね。我々と同じ姿をしているし、意識しなくなるのも分からなくないが、我々よりも遥かに弱い生き物だ。気をつけてくれよ」

「ああ」

頭を、柔らかくなでられました。暖かくて、優しい感触です。

「そういえばカーティ様、郵便が届いています。ご実家の方から「実家から？」

手が離れて、少し残念です。

「なんて書いてあるんだ、カーティ」

「……話があるから帰って来いと。なんなんだいきなり。お婆さんの遺産の件ならもう一通り話は付いたはずだろうに　　ってうわあ！」

苛立たしげ声と　そして、絶叫が聞こえてきました。

「なななななななななななでそういえばお前っ！」

あまりの大声に眠気が飛びました。起き上がると、狼さんの足元に落ちた紙　おそらく、先ほどまで読んでいた手紙に、ここ数日で見慣れた唇がくっついていました。

『だって、ダーリンに会いたくて……我慢できなくなっちゃった。きゃ！　ごめんね、キャサリン！』

「まあ……」

困ったようにキャサリンが頬に手を当てました。狼さんはオルテさんからじりじりと距離をとりをとりつつメイドキャサリンに早口でまくしたてます。

「まあじゃないだろうまあじゃない！　そうだこれから私は外出する、父上からの呼び出した子としてこれに答えないわけにもいかないだろう今から出かけるから夕食はいらぬ帰るまでしばらくかかるかもしれないが気にしないでくれ、では行つて来る！」

言いきるや否や窓に駆け寄りますが、オルテさんが窓際にバツと出現しました。狼さんは怯んで立ち止まりましたが椅子をつかみ、窓に力いっぱい投げます。もちろん、派手な音とガラスを飛び散らせながら窓は割れます。オルテさんの悲鳴も聞こえてきます。阿鼻叫喚です。狼さんは手当たり次第物を投げつけ、そしてようやく空いた人一人分の隙間から飛び出して行きました。

……後に残つたのは、すさまじい惨状です。狼さん、すばらしい逃げっぷりでした。なりふり構わずとはまさしくこのことでしょう。「そこまでして逃げるか……」

『ひどい、ご主人様あー』

呆れたように散らかつた部屋を見る侵入者さん、嘆くオルテさん、片付けることを考えてか頭を押さえてひそかにため息をメイドキャサリン。

それぞれを見ながら、私もメイドキャサリンと同じようにため息です。

やれやれ。

第27話 目が覚めるとそこは

狼さんが家出、もとい帰省してから早3日が経ちました。

暇を持て余していた侵入者さんは散歩と言って出て行ってから消息不明。オルテさんは何となく憂鬱そうに出たり引つ込んだりわめいたり黙ったりと忙しく、メイドキャサリンはいつも通りキビキビと働いていて、庭師さんはマイペースに植物のお世話。

誰も私の相手をしてくれません。寂しいです。

寂しいので、広い庭を散策していました。庭師さんの暇な時間に色々聞いていたので、今では庭の植物の半分を知っています。今日は、その植物の中でもまっ先に覚えた食中花を見に行っていました。虫を捕まえて食べようとするのですが、魔界の虫はなかなかしぶとくて、お食事のたびに死闘を繰り広げるのです。手に汗握ります。

食事時以外は見てくれも悪くないし、害虫を駆除してくれるので結構魔界ではどの家でも植えてるんすよ、とは庭師さんの言葉です。そして今日も死闘の末勝利を収めた食中花の姿をこの目に収め、さて次は何をしようかと屋敷への道をわざと遠回りしながら進んでいた時のことです。

ざわり、と音すら立てて空気が変わった気がしました。嫌な予感がして、思わず臨戦態勢を取ろうとしたその刹那 首に衝撃を受け、私は気を失ったのでした。

気が付くと冷たくて固い場所に寝転がっていました。薄暗いですし、見回すとまるでこれは噂に聞く牢屋のようです。石の壁と金属の柵で囲まれた空間です。

ここはどこなのでしょう。

とりあえず柵まで近寄って握ってみました。冷たいです。固いで

す。

ためしに力こめて見ました。びくともしません。

困りました。

柵と柵の間に首を突っ込んでみます。通りません。

横向きに右手、右肩、と頑張ってみました。通りません。

困りました。

念のため左手、左肩、と頑張ってみました。通りません。

困りました。

ふと、下を見ると柵と床の間にちよつと隙間があります。

床に寝そべってほつぺたを床にこすりつけたままズリつ、と隙間に進んでみます。通りません。右手、右肩、と頑張ってみました。こちらは結構いけそうですが、やっぱり頭が通りません。

困っていると足音がカツン、カツンと聞こえてきました。誰か来るようです。立ちあがろうとしましたが、どこかつつかえてしまったようで動けません。動けないのは仕方ないのでじっとしているとカツチリとした服を着た男の人が来ました。その手にあるのは、ご飯の載ったお盆です。ご飯です。

「……なにをしている」

「ここから出ようと頑張っています」

男の人は軽いため息をつきました。

「……それで、その格好か」

男の人は手に持っていたご飯を床に置くと、柵と床の間でつかえている私の体をぐい、と押ししました。ほつぺたと床が擦れて痛かったですが、動けるようになりました。やれやれ。

「無駄な努力をするな」

「じゃあ出してください。あとついでにそのご飯欲しいです」

「出すことはできない。これはもとより君のものだから渡そう」

柵の下の方の隙間からスツとご飯を差し入れてくれました。ひとまず脱出をあきらめてご飯タイムです。私の腹時計では……今は、晩御飯の時間ですね。おかしいです。私の記憶ではお昼ご飯を食べ

たばかりなのに。それだけ気絶していたということでしょうか。

「あの、ここはどこでふか」

「食べ物飲みこんでから話せ」

狼さんのようなことを気にする方ですね。言葉通りにしっかり噛んで飲みこんでもう一度口を開きました。

「ここはどこですか？」

「牢屋だ」

私の推測は当たっていたようです。でも聞きたいのはそこじゃありません。

「狼さんのお屋敷の中ですか？」

「確かに、主は狼　ワーウルフのお方だ」

「ああ、じゃあここは狼さんのお屋敷なんですね。はじめまして、ここでお世話になって結構経ちました赤ずきんです」

「君は今日初めてここに来たと思う」

あれ？

「ここは狼さんのお屋敷なんですよね？」

「私が推測するに、君の言うお方と私の主は別人なのだろう」

つまり、ここは狼さんのお屋敷ではない、と。

あれー？

「じゃあ、ここはどこなんですか？」

「牢屋だ」

それはもう聞きました。

「そうじゃなくて、ええとええと、狼さん、えと、カーティスさん？のお屋敷からどれくらい離れてるんですか？」

「カーティスという人物に聞き覚えはない」

ええー。

狼さんの名前ってカーティスじゃありませんでしたっけ？ それっぽい名前だったと思うのです。

「しかし、それによく似た響きの名前を持つ人物、カーティム様なら知っている」

「あ、それです。たぶん」

カーティムです。カーティムさんです。たぶん。

「カーティム様は、主のご息だ。カーティム様が住んでらっしゃる屋敷までは私の足で丸一日というところだろう」

大の大人の男の人の足で丸1日、ということは結構な距離です。

「あの、私ここまで歩いてきた覚えがないのですが」

歩いたとしても、2日はかかりそうな距離だと思います。ものすごく頑張っても半日はかかると思います。どちらにしても腹時計と計算が合いません。

「君はファラ様に連れられてきた。あの方なら、半日かかるまい」
ファラ様。

ファラ、聞き覚えがあります。すぐに出てきませんが覚えがあるのです。でも嫌な感覚しかしません。思い出たくありません。忘れたままでいたいです。

でも、思い出さない方が怖いです。

ファラ。確か、狼さんがそう呼んでいた人がいました。侵入者さんはファアと呼んでいました。そして私は「お客様」と確か読んでいました。

そうです。ファラ。私を食べようとした人です。

とりあえず体中をぺたぺた触ってみます。とりあえず傷もありません。どこも欠けていません。

食べられてはいないようです。

「あの、なんでお客様は私を連れてきたんですか？」

「お客様？」

「ええと、ファラさんです」

「さあ。俺は君を見張れと言われているだけだ」

困りました。とりあえず腹ごしらえをします。腹が減っては戦ができないのです。

戦うことになる予感もしますし、やっぱりご飯です。
座り込んでまずスープに口を付けました。

……ぬるいです。

パンをかじってみました。

……固いです。

最近、メイドキャサリンの美味しいご飯ばかり食べていたのです。つかり舌が肥えてしまったようです。贅沢な人間になってしまいました。どんなものでもおいしいとは思いますが。でもメイドキャサリンのご飯が恋しくなってしまうのです。

「はぁ……おかわりお願いします」

「あるわけないだろ」

「ええっ！」

そんな、少ないです。狼さんに食べさせてもらう量の半分もありません。確かに村にいたときはこれくらいしかもらえなかったことも多いですけど、満足いくまで食べに食べ続けた日々の結果広がった胃が、これじゃあ足りないと思うています。

グー。グー。……グウ。キュウ。

「聞こえますか、私の嘆きが！」

「子供には十分すぎる量だったはずなんだが……」

不十分です。全然足りません。

「しかし、ないものはない」

そう言いきって去っていかうとする牢屋さん。ひどいです。ひどすぎます。

「ご飯ー！」

「次の飯の時間まで寝てろ」

私は、心を決めました。

脱獄です。

第28話 脱走中

気配が二つ近づいてきます。

「赤ずきんはどうしている」

「食事を取った後、眠ったようです」

牢屋の隅にあった毛布にくるまる私を見ているのでしょうか。先ほどの見張りの人とは別にもうひとつ気配があります。

「ふん、まるでただの人間の子供だな。これに情を移すなど、愚かなことだ」

「……優しい方ですから」

「優しさではない。弱さだ。必要なものと不必要なものを分けられない。まったく、俺の息子だとは思えないな」

「……………」

「ルミナスの耳に入ると厄介だ。まったく、あいつが食べないのであれば俺が食べてしまいたいくらいだというのに」

ガシャン、と柵が揺れる音がしました。

「まあいい。続けて見張りをするように」

「かしこまりました」

二人の足音が遠ざかっていくのを確認して、ぷは、と息を吐き出しました。ああ、なんだかドキドキしました。一体なんだったのでしょうか、さっきの偉そうなの。話の内容もよくわかりませんでしたし。

まあ、なににせよ近くから気配が消えたこのタイミングがチャンスです。

意識を集中して、魔力を強めていきます。集まった魔素を支配、そして魔素を組みあげていきます。予定していた形に魔素が組み上げればあとは発動のために一言。

「破壊」

爆発音とともに壁に穴が開きます。破片が飛び散りますが、余っ

た魔素でくみ上げた防壁のおかげで無傷です。完璧です。
さて、脱獄です。

まず厨房へ向かいます。どうやって見つけたのか、というのは愚問です。私の鼻を持つてすれば食糧が集まってる場所を見つけるなんて簡単なことです！

きよろきよろとあたりを見渡します。日ごろの行いがいいからでしょう。人がいません。今のうちにお腹にめいっぱいつめこみます。お料理はありませんでしたが、素材の味というのはなかなか捨てがたいものがあるのです。ハム、チーズ、パン、お野菜。あ、全部一緒に食べても美味しそうです。

「な、なんだいったい！」

一心不乱に食べていたため、気付くのが遅れました。白い服に身を包んだ人が私を見て茫然としています。その声を聞いて、人が集まってくる気配がしました。これはいけません。見つかったら牢屋に戻される気がひしひしとするのです。

私はメイドキャサリンに作ってもらったポケットに手当たり次第食べ物詰め込みました。パンしか持ちだせなかった前の私とは違うのです！

「ど、泥棒！？」

う、と思わず手を止めました。そういえばここは狼さんの家ではないのです。勝手に食べ物を持っていったら泥棒になってしまします。でも、待つてください。ここのお屋敷の人は私を勝手にここに連れてきました。拉致です。誘拐です。いけないことです。いけないこと同士でチャラにするってことではないでしょうか。

迷いが消えたところで、未だ茫然としていた白い服の人の横をすり抜け走りだしました。「逃げたぞ！」「追え！」「いつたいなんだあの子供はっ」追い掛けてくる声と足音はどんどん数を増します。厨房を探している間も思ったのですが、このお屋敷は狼さんのお屋

敷と違って人がすごく多いです。あっちこっちにいて逃げ回るのも一苦労です。

なんとか撒いて、生き物の気配を感じない部屋へ飛び込みます。

「あっちに行っただぞ！」

「待て、こっちにはもういない！」

「向こうの方へ行っただという目撃情報が」

どたばたと騒がしい物音がします。まったく、大の大人がそろっていたいけな子供を追いかけまわすなんて、ひどい話です。

ここでこうしていても見つかるのは時間の問題でしょう。はてさでどうしたものか。

ひとまずこの部屋に隠れる場所でもないかと見回しました。洋服がたくさんあります。ドレスってやつでしょうか。長くて大きいです。他にもいろいろあります。どうやら服と服の間とか、隠れる場所は結構ありそうです。

まあ、扉から離れた位置に隠れたほうがいいでしょう。適当な場所を探して服を持ち上げたりしていると、奥の方に取っ手のようなものが見えました。

取っ手、つまり扉があるということです。

服を適当によけて取っ手を引いてみます。動きません。押してみます。動きません。

ちよっと考えて横に押してみました。ビンゴです。扉の向こうにはちよっとした空間が広がってそうです。隠れるにはちよつとよさそうです。私は中に体を滑り込ませ、扉の隙間から服を元の通りに戻して、なるべく扉が隠れるように直しました。完璧です。

そう、っと扉を閉じて辺りを見渡しました。明かりがないため、暗いです。さきほどの部屋には太陽の光が入ってきていましたが、ここは窓がないのか暗闇です。手探りでちよつと動いてみますが、思ったより広い空間のようです。

「……まあ、そんなに明るくしなきゃ大丈夫ですよね」

魔力を強め、魔素を集めます。ほんの少しでいいのです。

「光を」

ポウ、とほのかに辺りが明るくなりました。この程度なら、扉の隙間から光が漏れる心配もないでしょう。

改めて周りを見ると、閉じられた空間だと思っていたのですが通路がいくつか見えます。むしろ、ここが通路の一部のようです。通路でも空間でも人氣がなければ問題ありません。私は一息つくことにしました。

「やれやれ、です」

久しぶりに魔術を使いました。狼さんの屋敷では使う機会も特にありませんが、村にいたころはご飯のために毎日のように使っていました。先生にもしごかれましたし。なにもしなくてもご飯が出てくる生活は本当に素晴らしいです。

そんな生活に戻るためにも、狼さんの屋敷に戻らなくてはいいけません。

でも、このお屋敷から狼さんのお屋敷までの道のりが分からないですよ。見張りさんが丸一日とか言っていましたから、目で見る距離ではないでしょうし。道を聞いて教えてくれる人がいるとは思えませんし、困りました。

ひとまずこのお屋敷から出ることを優先して考えるべきでしょうか。でも、魔界で迷子になるっていうのは結構大変なことの予感があります。魔物は人間よりも基本的に強いですし、戦って勝てない相手も多そうですし、狼さんの屋敷に戻る前に野垂れ死にとかごめんですし、他の魔物のご飯になるのも嫌です。

連れてきたのはお客様らしいですけど、いったい何を考えているのでしょうか。前に会った時は私を食べる気満々のようでしたが、私を気絶させた割に齧りもせず連れてきて放置です。意味がわかりません。

うんうん唸っていると近くに誰かの気配を感じました。慌てて隠れる場所を探そうとして、すでに隠れていることを思い出しました。落ち着くのです、私。

さっきの服がたくさんある部屋に誰か来たようです。私を探しに来たのでしょうか。気配は一つだけのです。声が聞こえてきますが、独り言と言うにも意味をなしていません。鼻歌、でしょうか。もうちょっと動いてから休憩すればよかったと思っても手遅れです。下手に身動きするよりはと私はじつと息をひそめました。

しかし、その甲斐はまったくありませんでした。

ガラリ、という音とともに先ほどの扉が開かれました。そしてばつちり化粧をした女性がにこやかに、私に手を振りました。

「みーつけた」

第29話 盗み聞き

咄嗟に逃げだした私の後ろにあつという間に追いつき、抱き上げられます。

「かわいいわー、小さいし、かわいいわー」

ぎゅう、と抱きしめられて抵抗するべきか大人しく捕まるべきか、混乱してきました。柔らかいものに顔が挟まれてちよつと苦しいです。

「いいわねー、女の子。かわいいわー」

ちよつと離されて顔をのぞきこまれます。さきほどは驚きすぎてよく見ていませんでしたが、狼さんよりも一回りくらい上に見える女の人のようです。

「みんなに追いかけられて怖かったわねー。もう大丈夫よー。一緒に美味しいお菓子でも食べましょう?」

お菓子……!

思わず期待に顔がゆるみます。や、でも、待つのです、私。この女性は私を捕まえに来たのです。拉致、誘拐犯の仲間です。

「美味しい頂き物のプリンがあるのよー」

ぷりん?聞いたことがあります。聞いたことがない食べ物に期待が高まります。

……まあ、もう捕まってしまいましたし。逃げるにしてももうちよつと後で、そう、ぷりんを食べた後でいい気がします。遅いか早いかだけの違いです。

「あら、大人しくなったわねー。いい子ねー」

よしよしと抱かれたまま頭をなでられます。にこにこ浮かべられた笑顔に気が抜けてしまいます。その笑顔は狼さんのめったに浮かべない笑顔にちよつと似ている気がしました。

部屋には戻らずに、人気のない通路を女性は進んでいきます。私
がいた場所を離れ、辺りもよく見えないのですが、それでも迷いな
く進んでいきます。私には辺りの光景がぼんやりとしか見えません
が、この女性にはよく見えているのかもしれない。狼さんと同じ
金色の瞳がうつすらの光を放っているようにも見えます。

「あの、あなたは誰ですか？」

「わたくしはルミナスっていうのよー、赤ずきんちゃん」

名乗る必要がないようです。

「私を連れて来たのはあなたですか？」

「違うわ。あなたを連れて来たのはファラちゃんよー。連れてく
るように言ったのはレガスだけどー」

レガス？

「レガスって誰ですか？」

「私の旦那さまよー。かつこいいいのよー。でも、ちよつとわがまま
でねー。人の言うことあんまり効かないのが玉にきずかしら」

旦那さま。……ええと、つまりこの女性は私をさらった原因の奥
さん、ということになるのでしょうか。なんだかますます捕まっ
ては行けない気がしてきました。ぷりんの誘惑を振り払ってでも逃
げるべきでしょうか。

じい、と女性を見つめます。じいー。

「なあに？」

につこりと微笑みが返ってきました。なんだか警戒心がふにやり
と抜けてしまいます。

『いい加減にしてください！』

ふにやりとしていたところに、唐突に狼さんの怒鳴り声が聞こえ
てきました。思わず姿勢を正してしまいます。ですが肝心の狼さん
の姿が見えません。女性の腕の中から乗りだしてあちらこちらと探

しますけど、見えません。でも、確かに狼さんの声でした。

「あらあら」

女性は私を抱き直して、進む方向を変えました。

「カーティの声だったわねー。そういえばこのあたりだわねー。ちよつと覗いてみましょうかー、でも、出て行っちゃだめよー。レガスがいるから危ないかもしれないわ」

女性がすつと伸ばした腕で壁を押すと、できた隙間から光がこぼれてきました。そして同時に狼さんの声もはつきりと聞こえてくるようになりました。

『何度言えば分かるのですか』

『お前こそ何度言えば分かる。愚かだと思っていたが、これほどまでとは思わなかったぞ』

狼さんと、あとレガスさんといういけすかないおじさんの声が聞こえてきました。なんだか漏れてくる空気が「きんぱく」しています。背筋を伸ばさなきゃいけない感じです。

「やつぱり、まだ終わってないみたいねー」

女性がこそそと耳もとで言います。ちよつとくすぐりたいです。「あんまりいるとばれちゃうかもしれないし、そろそろ行きましようねー」

もつと聞きたいし、なにより狼さんに会いたいですが、いけすかないおじさんに見つかりたくはありません。ひとまず狼さんが近くにいます。それが分かっただけでも大収穫です。

私が女性にわかりました、と小声で返すと女性は隙間を閉じようと、手を伸ばしました。その間にも二人の会話は続きます。

『あなたに合わせて賢くなる気などありません。私は私の生き方を貫きます』

『ワーウルフとしての誇りを忘れたか!?!』

『忘れてなどいません！ その誇りの在り方が、あなたと私で違うだけです』

『……話にならん。お前はあれの価値をわかっていないのだ』
『何と言われようとも』

『私は、赤ずきんを食べません。あの子を食べたりなんか、しない』

第30話 餌付けお断り

「着いたわ」

女の人が手を伸ばすと同時に、光が目差し込んできました。ぼんやりとしている間に、通路から普通の部屋に出てきていました。ゆつたりとしたソファのある、落ち着いた部屋です。

女の人は私を抱きかかえたまま机の上に置かれていた鈴を鳴らしました。するとすぐにメイドさんが現れました。メイドキャサリン以外のメイドさんです。珍しいです。

「プリンあつたじゃないー？ 持ってきてくれるかしらー」

「かしこまりました……あの」

メイドさん2が不思議そうに私に目を止めます。私もメイドさん2を見ます。メイドキャサリンの着ている服と似ていますが、こちらの方が色々飾りが付いています。スカートも長い気がします。メイドさんにも色々いるんですね。

「この子が赤ずきんちゃんよー。もう探さなくても大丈夫ーって、他の子たちに伝えてくれるかしらー」

「はい、では失礼いたします」

メイドさん2が頭を下げて去っていくと、女の方は私を抱きかかえたままソファに腰をおろしました。女の方に抱きしめられることはあまりないので落ち着きません。なんだか柔らかいです。

「あの」

「そうだわー。赤ずきんちゃん、ごめんねー。目が覚めたとき驚いたでしょー。あの人も牢屋になんか入れることないのにねー。女の子なのに可哀そうにねー」

よしよしと頭をなでられます。

「プリン食べたらかーティのところ連れて行ってあげるわ。今はレガスとお話してるから、終わったらねー」

「狼さんここにいるんですか!？」

「狼さん？ 狼さんはいつぱいいるわよー。わたくしもワーウルフだもの。狼さんよー」

さりげなくこの女性の種族が発覚しました。

「あ、いえそうじゃなくて、ええと、カーティムさんここにいるんですか？」

「いるわよー。ここは、カーティの家だものー」

なんだか混乱してきました。首をかしげる私の頭を女の人は頭巾越しにまたなでます。

「赤ずきんちゃんカーティのなのになえー。いくらお父さんだからって、成人した子供に口出しするのはよくないと思うのよー」

「……お父さん」

そういえば、狼さんは父上に呼び出されたと言ってどこかに行つたのです。それがここだというならここにいるのがその父上、つまりお父さんということでお父さんの奥さんであるこの人はもしかすると。

「カーティムさんのお母さんですか？」

「そうよー」

にこにこ肯定されます。うわあ。狼さんのお母さんです。道理でちよつと似てる気がしました。でも、お母さんにしてはずいぶんお若いです。お姉さんと言われた方が納得できます。

「狼、じゃなくてカーティムさんにお世話になつて赤ずきんです。ご飯いっぱい食べさせてもらってます美味しいです」

「礼儀正しい子ねー。ご飯がおいしいのはいいことよねー」

まったくもってその通りです。

「お待たせいたしました」

「ありがとうー」

そうこうしているうちにメイドさん2がぷりんとやらを持ってきたようです。置かれたお皿の上には、やっぱり見覚えのないお菓子が乗っています。ふるふると震えている様子にオルテさんを思い出しました。思わず頭を振って記憶から追い払います。すみません、

オルテさん。オルテさんはあまり美味しそうとは思えないのです。オルテさんを頭から振りはらって改めてぷりんを見ました。美味しいです。甘そうな匂いがします。

「ほーら、赤ずきんちゃん、プリンよー」

はい、あーん。とぷりんとやらを掬ったスプーンを差し出されました。思わずぱくりとくわえます。

「……………おいしいですっ!」

口の中でとろけるような絶妙なハーモニーです。幸せです。

「よかったわねー。はい、もう一口いかが?」

「何口でもいただきます!」

「いただきますじゃない!!」

唐突に開いた扉とともに、とても覚えのある大声が鼓膜に響きました。ドン、と机につかれる手に、ぷりんの乗ったお皿がカチャリと音をたてました。

「どうして赤ずきんがここにいて　母上の膝の上でプリンを食べてるんだ!」

狼さん、再登場です。

第31話 強者と弱者

どうしてここにと言われても、私だって知りたいですとしか返しようがありません。困ってしまった私の前に、お母さんがスプーンを差し出したので思わずパクリ。……幸せです。

「母上、私の話を聞いていますかっ!」

「聞いてるわ」

どうやら、私に向けられた疑問ではないようです。ならいいかとあーんと口を開いてプリンを催促します。お母さんはうふふと笑ってまたスプーンを差し出してくれます。

「赤ずきんも! 君が牢屋から逃げ出したと聞いてそもそも連れて来られていると知らなかった私がどれだけ心配したかっ! 母上に捕まったと聞いてこうして来て見ればこのありさまなんて私を馬鹿にしているのか!」

「心配してくださったんですか?」

思わず聞き返すと、狼さんは一瞬硬直し、「ああ、したとも!」と半ば怒っているような口調で言いました。嬉しいです。心配なんて村にいたころからあまりされた覚えがありません。

「ありがとうございます」

「……っ」

素直に喜んでいると、スプーンを置いたお母さんの手が私をギュッと抱きしめました。

「やっぱり可愛いわあ」

むぐ、と顔を胸に押しつけられます。狼さんと違う、胸についている柔らかさがちょっと苦しいです。あとなんでか照れくさい感じがします。落ち着きません。

「母上……赤ずきんを離してください。私たちはすぐにも帰ろうと思います」

「お話は終わったのー?」

「平行線でしたが、一応」

「そうなのー。じゃあ、レガスに見つからないうちに帰った方がいいかもしれないわねー」

そう言いながらもお母さんは私を離しません。ちょっと真面目に苦しくなってきました。手足をばたつかせますがびくともしません。ふと、嫌な気配を感じました。

狼さんとお母さんが揃ってその人に気付いたのでしょう。静かになった部屋の中で絨毯の柔らかさにも消えきらない靴の音が聞こえました。

「俺がどうかしたか」

低い、固い岩のような声が聞こえてきました。思わず、魔力を少し強めます。身の危険を感じる冷たい声です。確か、先ほど狼さんと話していた声です。そういえば、この声は牢屋で聞いた偉そうな人のものと同じです。あのときは毛布で視界を遮っていたから、今はお母さんに抱きしめられているせいでその姿を確認できません。離してくださいー、という声も胸の谷間にむくむくと消えます。

「父上……!」

「ほう……さきほどは分からなかったが、それなりに魔力はありそうだな。さあカーティム、さっさと食べろ」

一瞬、体がこわばりました。じわじわと押し寄せてくる感覚は恐怖に似ています。

「父上、私は食べる気はないと一体何度言えば分かるのですか」

「ならば、俺が食べよう」

「……赤ずきんは私のものです」

「食べない赤ずきんに何の意味がある。第一、食べないのであれば、お前に譲る意味もない」

「あなたから譲られた覚えはありません。私はお婆様から赤ずきんを譲り受けたのです。どうするか決める権利は私にある」

「お前は、赤ずきんの価値を分かっていない。」

赤ずきんは、食べたものの力を飛躍的に高める。

愛玩動物ではないのだ。赤ずきんは、我々の力を高めるための

」

「そんなことは知っています！」

お母さんの腕から力が抜けました。自然に顔が狼さんたちの方へ向きます。狼さんのお父さんは、狼さんによく似た顔立ちでした。でも、狼さんよりずっと怖い顔をしています。狼さんはそんなお父さんを厳しい目で睨みつけていました。

「私は赤ずきんを食べません」

「情が移ったか」

「なんとでも。赤ずきんの所有者は私です。食べるかどうか決めるのも私だ。勝手な行動は父上いえど許しません」

「許さない？ どう許さないと言った。お前は我が一族の中でも『弱い』。直系でありながらその弱さ。それを補うべく義母上はお前に赤ずきんを残したのだろうに。しかも、食にうつつを抜かしたおろか者でありながら、その『食』を拒絶するなど……グッ」

ぼうつ、と話を聞いていた私の横でブン、と風を切る音がしました。同時に、狼さんのお父さんが顔の前に手を出したまま動かなくなりました。

「あなた！。あんまりカーティをいじめると、わたくし怒りますよ」

硬直したお父さんの手からポロリと落ちたのは、さきほどまで私がプリンを食べるのに使っていたスプーンです。

お父さんの手からダラリと血が滴り落ちました。

「弱い、だなんて。あなただってそう変わらないじゃないですか！。それなのにそんなこと言うなんてひどいわ！」

お父さんの額に汗がにじみました。狼さんも固まって動きません。「それに見て下さいな、この赤ずきんちゃんを」

そう言って、私を抱き上げたまま立ち上がります。や、あのちょ

つと、ものすごく離れたいですが動けません。動いちゃいけない気がするのです。

「可愛いでしょー。こんなに可愛い子を食べるだなんて、そんなのひどいわー。第一、カーティがすぐに食べなかった時点で、もう情が移るのなんて決まってたようなものじゃないのー。カーティは優しい子なんだものー。その優しさを誇りこそすれ、そんな蔑むような言い方する人なんてー……………そんなの、私の旦那さまじゃないわあ」

すす、とお母さんはお父さんに寄ってその頬をなでました。なんでしょう、怖いです。冷や汗が滲んできました。

分かることが一つあります。

このお母さん、強いです。さっきまで気付きませんでしたがおそらく私を含めたこの部屋にいる誰よりも強いです。きっとお客様よりも強いでしょう。

ぞつとするような殺気に背筋をなでられているような感覚。でもこの殺気が私に向けられていないだけマシです。お父さんの殺気なんて比べ物になりません。

さきほどまでの強気な態度はどこに行ったのか。狼さんのお父さんの顔は真っ青でした。

「ルミナス、俺が悪かった……………」

「もう、カーティのこといじめないー？」

「あ、ああ。約束する」

「ならいいのよー」

コロつと殺気が消えました。ようやくまともに息が吐ける空間になった気がします。とはいえ、先ほどの印象は強烈過ぎました。はい、と狼さんに渡された私ごと、狼さんはじわじわとお母さんから距離を取ります。

「ええと、母上、父上の用件も済んだようなので私たちはこれで失礼しようかと……………」

「えー、レガスも、いじめないって約束してくれたんだものー。も

う一晩くらい泊まっていきなさいよ。ママ、寂しいわー」

拗ねたような甘えたような声ですが、さきほどの殺気の後では命令にしか聞こえません。

「で、では一晩だけ」

「ゆっくりしていつてねー」

ひきつった笑みを浮かべながら狼さんはお母さんに背を向けないように後退し、部屋を飛び出しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8495e/>

赤ずきんと狼さん

2011年5月17日07時04分発行